東京大学大学院新領域創成科学研究科

社会文化環境学専攻

2016 年度

修　士　論　文

金沢八景をめぐる景観環境史

Landscape Environmental History of The “Kanazawa-Hakkei”

2017 年 1 月 23 日提出

指導教員　辻　誠一郎　教授

坂手 久美子

Sakate, Kumiko

目次

第１章　緒論・・1
1.1　研究の目的と意義
1.2　景観環境史の定義
1.3　研究対象
1.3.1　対象地域
1.3.2　対象年代
1.4　研究方法
1.4.1　研究の枠組み
1.4.2　資料の収集と分析
第２章　“金沢八景”の景観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2.1　“金沢八景”とは
2.2　史料からみた“金沢八景”
2.2.1　地図類
2.2.2　絵画類
2.3　写真類からみた“金沢八景”
第３章　“金沢八景”をめぐる自然環境史と社会文化史・・・・・・・・・・・・・・・・30
3.1　平潟湾をめぐる自然環境史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
3.1.1　平潟湾の成り立ち
3.1.2　最終間氷期最盛期の平潟湾
3.1.3　最終氷期最盛期の平潟湾
3.1.4　縄文海進最盛期の平潟湾
3.1.5　古墳時代以降の平潟湾
3.2　中世の金沢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
3.2.1　荘園としての六浦庄
3.2.2　鎌倉幕府と六浦庄の統治
3.2.3　金沢北条氏による六浦庄の統治
3.2.4　金沢北条氏による六浦庄の統治
3.2.5　中世の六浦庄の人々の暮らし
3.3　近世の金沢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
3.3.1　江戸時代の旅の概念の変化
3.3.2　景勝地から観光地へ
3.3.3　“金沢八景”をめぐる出版闘争
3.3.4　永島泥亀による新田開発
3.4　近代以降の金沢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

3.4.1　幕末から近代への金沢のあゆみ
3.4.2　明治時代の金沢
3.4.3　大正時代の金沢
3.4.4　昭和戦前期の金沢
3.4.5　昭和戦後期以降の金沢
第４章　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
4.1　“金沢八景”は失われてしまったか
4.2　“金沢八景”の未来
4.3　結論

謝辞
引用文献

第１章　緒論

1.1　研究の目的と意義

景勝地・観光地として人々を魅了してきた“金沢八景”であったが、時の流れと共に人為的にその姿形を変えられてきた。“金沢八景”とはいったいどんな景観であったのだろう。その景観に人々は何を想ったのだろうか。

景観環境史を辿ることで、人間が自然環境に及ぼしてきた影響（問題と捉えられることもある）をみることができる。人間の開発は生態系の均衡を大きく変え、景観そのものが失われるという結果をもたらした。その事例の一つが本研究で取り上げる“金沢八景”である。現在は八景島シーパラダイスなどで知られ、京浜急行電鉄の金沢八景駅の由来にもなっているが、近世江戸時代には景勝地として多くの観光客が訪れた。しかし、江戸時代初期から始まる新田開発や明治時代以降の軍による埋め立て、戦後の宅地開発などにより、現在はかつての“金沢八景”の面影をみることはほとんど出来ない。

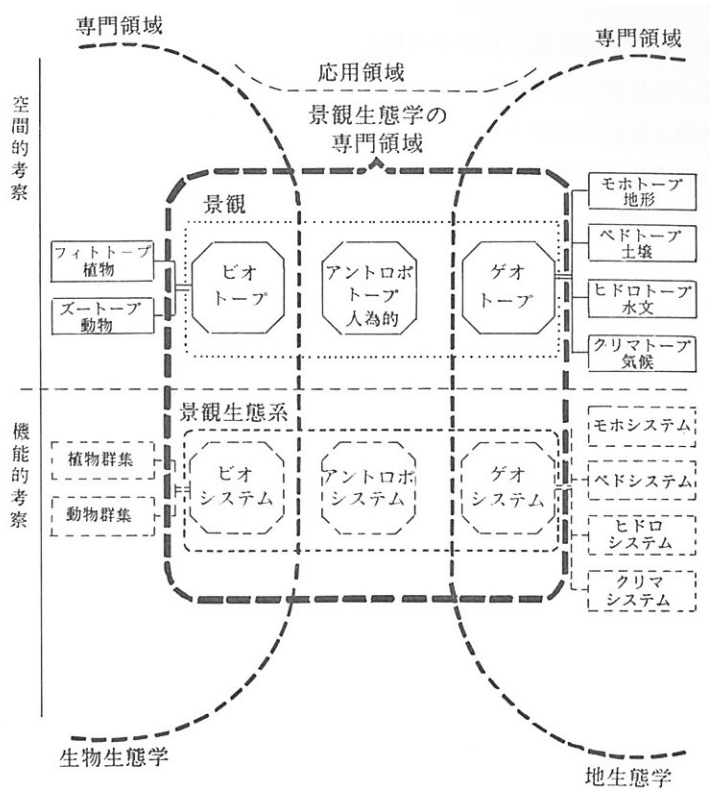


図 1-1　生物生態学、地生態学、景観生態学の研究領域（Laser,1984）

“金沢八景”の事例はまさに景観生態系のバランスが崩れたことによる景観消失の例と言えるだろう。一度失ってしまった景観を取り戻すことは不可能に近い。よって我々に求められていることは、失ってしまったものを取り戻そうとする試みではなく、人為的な開発により景観が失われていく過程を景観環境史として捉え直し、その過程において、“金沢八景”をつくる平潟湾の何が失われてしまったかを明らかにすることである。抽出された問題はいわば今を生きる我々にとっての知恵である。我々は過去に発生した問題の結果を知っている。現在を過去に置き換えれば、今抱えている問題とはすなわち未来の結果である。つまり、過去の問題を知ることは、未来に対する回答を得ることなのである。

“金沢八景”における問題は、美しい景観を生み出していた内湾の埋め立てや宅地開発が大きく関わっている。なぜ“金沢八景”は生まれたのか、なぜ埋め立てられたのか、なぜ

開発の対象地になったか、そして、なぜ“金沢八景”は失われたのか。これらを明らかにすることで生態系の在り方を問い、地域計画や都市開発などで十分な議論がされていない『景観生態系のバランスを壊さない、持続可能な開発』という視点を理解するための一助とすることが、本研究の目的である。

1.2　景観環境史の定義

ここで、景観環境史とは何かについて明らかにする必要がある。

景観とは何かということについては中村（2016）が詳細にまとめている。中村は渡辺ら（2009,2010）が主張した分野ごとの「景観」の語の特徴を挙げ、景観とは造園学・工学の計画・創出・管理を目的とする「景観」ではなく、また文学系分野が示す文化・歴史に特化し地域という概念が欠如した「風景」でもない、「環境と関わりながら人が暮らしていくための生業装置又は機能を有するもの」すなわち「Laser（1984）が示す地生態系・生物生態系・人為生態系の３つの専門領域」からなる空間を基盤にしている、と述べている。

「環境史」という概念が誕生した背景には、産業革命以降に急激に悪化した社会環境にあると言えるだろう。急速な大量生産・大量消費活動により人々の生活水準は格段に良くなった。しかし同時に大気汚染や土壌汚染など様々な公害を引き起こし、人間社会へと多大な影響を与えた。そこで、「人類の活動と環境の変動の関係に関心が向けられるように」なり、「人類活動がどのような環境変動を引き起こしたのか。あるいは逆に、環境変動がどう人類に影響を及ぼしたのか」という問題を論じたのが、米国のGeorge Perkins Marsh（1801-1882）とロシアのAlexander Ivanovich Woeikof（1842-1914）の二人であった（石、1999）。Marshは主に地中海の森林破壊、Woeikofは牧畜・農耕のための植生の除去による土壌侵食についてそれぞれ関心を持っていた。彼らの研究においては、環境史とは地理学のような自然科学であり、そこに人文社会学的な分析はみられない。1955年6月16-22日に米国プリンシトンで行われたシンポジウムでは地理学・地質学などの地球科学や生態学・動植物学などの生物学に混ざり、わずかではあるが社会科学や行政・都市問題などの社会学者がようやく参入するようになった。やがて1962年に出版されたRacheal Carsonの『沈黙の春』をきっかけに、環境問題に大きな関心が寄せられるようになる。このような環境問題は「自然破壊からさまざまな環境汚染、さらには騒音や振動といったアメニティに関わるものまできわめて多岐にわたるように」なり、環境研究においては生物学などの生物系や分析化学・公衆衛生学・気象学などの自然科学分野だけでなく経済学・法学・社会学・倫理学などの人文社会学の観点からも論じられるようになったのである（石、1999）。

石（1999）はこうした環境史への関心の高まりの理由を「環境の現状に対してさまざまな対策が提唱されているものの、国内的にも国際的にもほとんど進展がなく」「地球環境の出口のない窮状から、歴史に回答を求めはじめた」からだとしている。言い換えると、

環境史研究の終着点には人類が直面している環境問題に対する回答がなくてはならないということになる。

樺山（1999）は「『環境史学』とは『環境』の歴史をたどるものと理解するならば（中略）古気候学や古生物学、あるいは古地質学など人間にとっての環境条件を時代にさかのぼって分析する（中略）自然科学上の知見」だけでなく、「歴史のなかにおける『環境』という要素にかんする分析であれば、それは自然科学よりもはるかに人文科学に接近した、議論と分析を必要とする」としている。さらに、従来の議論において「環境を人間主体と対立させ、環境／人間、自然／文化の二元性を前提としてきたこと」は反省すべきであり、また「自然環境は、それ自体の変化にくわえ、人間と文化によって、作りかえられてきたのであり、『自然』として理解されるものの多くは、そうした『第二の自然』にほかならない。（中略）環境史学は、そうした複合体のありかたを、個別の具体相において分析することを課題としている」と述べている。このような環境史の解釈は卯田（2004）の「環境史研究は、現実問題の解明を目的に置きながら、過去の時代における共生／反共生の判断を行うことで可能になる」とする見解とも一致する。

景観環境史についてまとめる。景観とはLaser（1984）が示すところの地生態系・生物生態系・人為生態系の３つの専門領域である。また、環境史とは石（1999）によると人類が直面している環境問題に対する解決策を歴史の中から得ようとする試みであり、樺山（1999）によると、環境と人間という二元性のみで論じるべきではなく、現在われわれが認識している自然とは人為的につくりかえられたものであり、それらの複合体を自然科学と人文科学の双方の議論により分析するもの、としている。景観とは地生態系・生物生態系・人為生態系という３つの異なる視点からみた生態系であり、これこそ景観生態学なのである。

本研究では、３つの異なる生態系を重ね合わせた景観生態系を、自然科学と人文科学という二つの視点から、人間の開発がどのように自然に影響を及ぼしてきたかを辿る歴史を『景観環境史』とする。

1.3　研究対象

1.3.1　対象地域

本研究の対象地は神奈川県横浜市金沢区にある平潟湾とする。“金沢八景”は、かつて平潟湾を中心とした内湾環境において見られた八つの景観であり、現在は該当地域を南北に走る京浜急行電鉄㈱の駅名になっている。

図 1-2　研究の対象地域

1.3.2　対象年代

対象年代は、約10万年前の最終間氷期から、現在の地形に近い約1500年前の古墳時代までの平潟湾の古環境の変遷と、中世から現代までの金沢区および “金沢八景”をめぐる社会文化の歴史的な変遷をたどる。

1.4　研究方法

1.4.1　研究の枠組み

本研究では、“金沢八景”はどのようにして生まれ、どのように変化したのかを捉える。すなわち、“金沢八景”を生み出した平潟湾の地形の変遷を自然環境史とし、平潟湾をとりまく金沢・六浦地域がどのように移り変わっていくのかを社会文化史として、この二つの視点を複合的に分析し、“金沢八景”をめぐる景観環境史を描き出す。

1.4.2　資料の収集と分析

樺山（1999）が言うように、環境史を捉えるには自然科学と人文科学を複合した分析が必要となる。そこで本研究では、松島（1991）や貝塚（1987）などの自然環境史と、平田（1984）や関（1984）らが先行していった金沢に関する社会文化史の資料を収集し、それぞれを複合的に分析することで、“金沢八景”の変遷をまとめる。

また、第２章では地図類・絵画類などの史料、写真類などから人々がどのように“金沢八景”を捉えていたのかを分析する。とくに絵画類などは脚色が施されているものも多く、当時の人々にとって“金沢八景”がどう捉えられていたか、あるいはどう捉えたかったかを知る重要な史料である。一方、写真類は“金沢八景”を客観的に捉えるための資料である。これらの史料から、“金沢八景”とは人々にとってどういう位置づけがされていたのかを明らかにする。

第２章　“金沢八景”の景観

2.2　“金沢八景”とは

八景の概念の由来は古代中国に遡る。中国北宋時代、湖南省の洞庭湖を中心とした八つの風景を、北宋の宋迪が画題として描いたのが瀟湘八景である。瀟湘八景とは、「漁村夕照」「遠寺晩鐘」「江天暮雪」「遠浦帰帆」「洞庭秋月」「平沙落雁」「瀟湘夜雨」「山市晴嵐」から構成される。夕照、晩鐘、暮雪、秋月、落雁、夜雨、晴嵐という二文字で表現される情景が八景の中核部分であり、「八景を選んで文学・美術的に表現する遊びは、中国文明をモデルとして発展を遂げた東アジア漢字文化圏、中国・朝鮮・日本・越南・シンガポールやシルクロード諸国に広まり」（永井，2008）、風景だけではなく季節や時刻、気象などの五感を落とし込んだ景観方式は、アジア文化圏の風景観に多大な影響を与えた。日本へは鎌倉時代後期、14 世紀には八景の概念は広まったとされている。「中国からの渡来僧一山一寧が賛文を寄せた瀟湘八景図や、大休正念の弟子鉄庵道生（1262～1331 年）が選定した博多八景が、日本における最初の八景とされている。室町時代になると八景を用いた遊びは京都の禅僧・武家・公家に広まり、瀟湘八景をもとにした水墨画や詩歌がつくられた」（永井，2008）。

図 2-1　漁村夕照

図 2-2　遠寺晩鐘

図 2-3　江天暮雪

図 2-4　遠浦帰帆

図 2-5　洞庭秋月

図 2-6　平潟落雁

図 2-7　山市晴嵐

図 2-8　瀟湘夜雨

図 2-1 から図 2-8 まで
（堀川貴司，2002）

“金沢八景”が成立したのは近世初期のことである。中世鎌倉時代から金沢の風景の美しさは人々を魅了していた。鎌倉幕府５代将軍頼経は 1228（安貞 2）年 4 月に六浦を遊覧しており、14 世紀初頭には兼好法師が来遊し一時は庵を構えていた。鎌倉後期以降、金沢には鎌倉五山の禅僧が度々訪れるようになる。彼らは金沢の風光明媚な風景を中国禅の拠点の一つ、杭州西湖と重ね、1327 年、北条高時の命によって鎌倉へ下った清拙正澄が六浦を訪れ瀬戸明神に献上した漢詩には、金沢の風景が杭州西湖と非常に似ている旨の詩を詠んでいる。近世に入ると金沢にも八景の風景観が齎されるようになる。『名所和歌物語』（1614 年刊、別名『巡礼物語』）（三浦浄心（1970））の著者・三浦浄心により紹介された金沢の八つの名所が、“金沢八景”の最も古い例と言われている。また、17 世紀に開版された古版絵図に“金沢八景”が配置された金沢が描かれるなどの試みはあったが、“金沢八景”の正確な位置を定めるには至らなかった。この流動的であった“金沢八景”を決定づけたのは、徳川光圀によって招聘された明僧・東皐心越である。彼は 1694（元禄７）年、故郷の杭州西湖と金沢の地を重ねた八つの詩を詠んだ。いわゆる「乙艫帰帆」、「小泉夜雨」「洲崎晴嵐」「称名晩鐘」「平潟落雁」「内川暮雪」「瀬戸秋月」「野島夕照」の八つの景観である。これが今日言われる“金沢八景”の原点であるとされている。

図 2-9　乙艫帰帆

図 2-10　小泉夜雨

図 2-11　洲崎晴嵐

図 2-12　小泉夜雨

図 2-13　平潟落雁

図 2-14　内川暮雪

図 2-15　瀬戸秋月

図 2-16　野島夕照

図 2-9 から図 2-15 まで
（神奈川県立歴史博物館，2007）

2.2　史料からよみとれる“金沢八景”

2.2.1　地図類

金沢周辺の海域は 1899（明治 32）年に軍事保護法・要塞地帯法によって写生や写真の撮影が禁じられたため、以降終戦までの約 50 年間の様子を知る史料は極めて少ない。しかし、むしろ軍事施設が設置されたことで大日本帝国陸地測量部によって綿密な迅速図が作成された。最も古いものが 1903（明治 36）年、次いで 1921（大正 10）年となっている。いずれの地図にも右上に「軍事機密」とあることが、この地域が重要な軍用地であったことがわかる。

戦後最初の測量図は 1950（昭和 25）年、地理調査所が行った。この版から「軍事機密」の判はなくなっている。

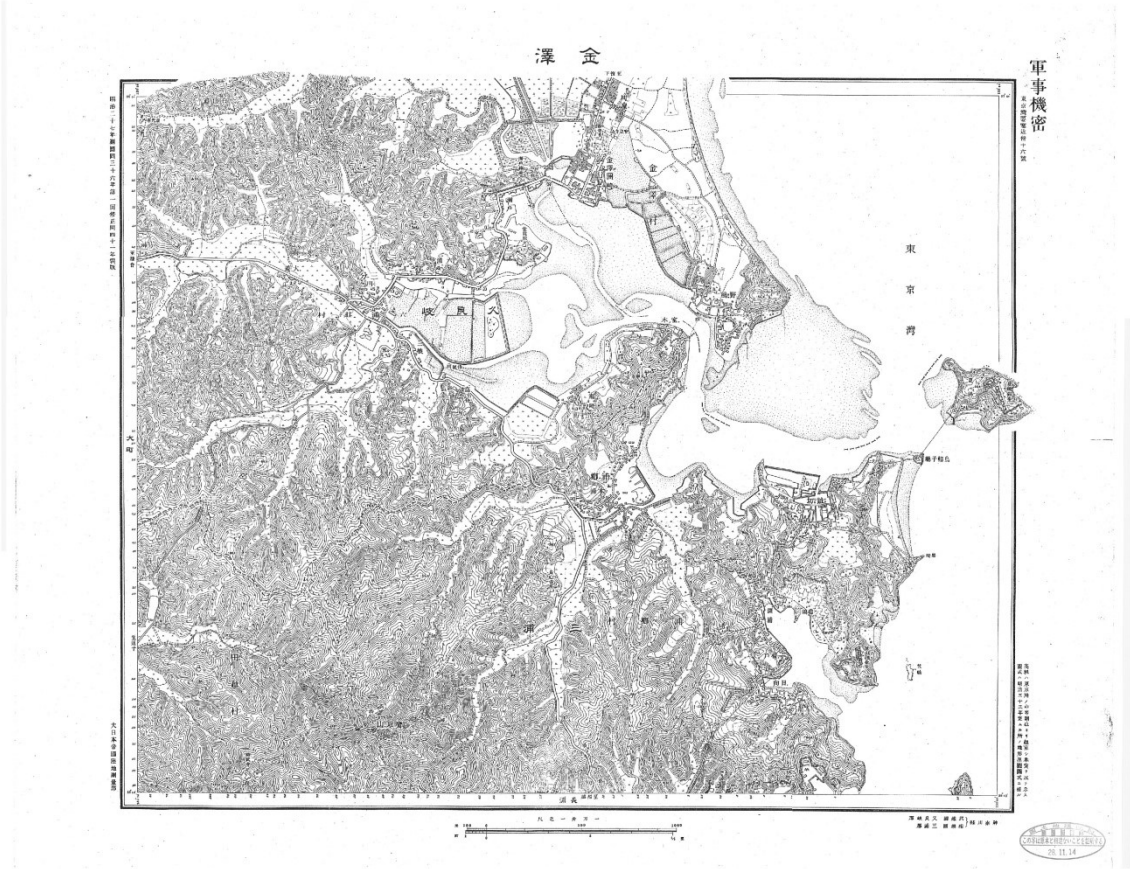


図 2-17　金澤の迅速図（明治 36 年測量）

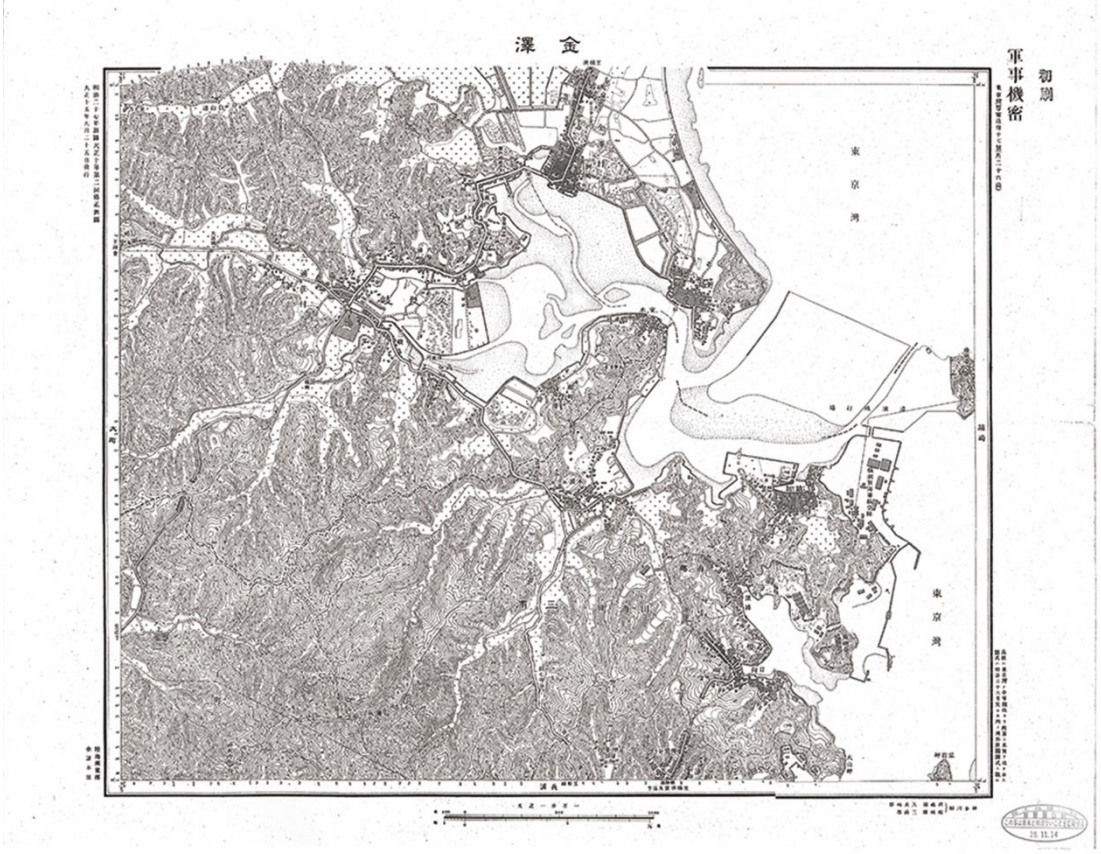


図 2-18　金沢の迅速図（大正 10 年測量）

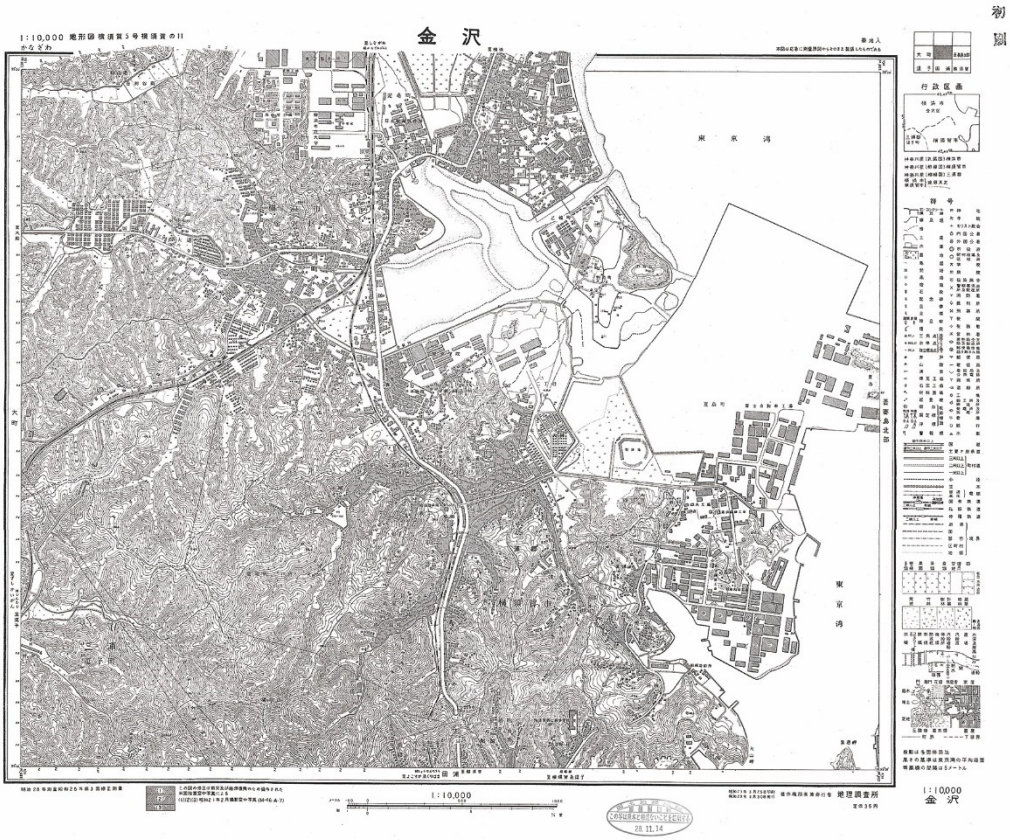


図 2-19　金沢の迅速図（昭和 25 年測量）

2.2.2　絵画類

“金沢八景”に関連する絵画類は刷り物、浮世絵、スケッチなどが数多く残されている。本項では数ある絵画史料を刷り物、浮世絵などの絵画史料から、人々が“金沢八景”をどのように捉えていたかを概観する。

・刷り物

“金沢八景”が比定される以前は、金沢・六浦一帯は江ノ島と共に鎌倉の一部と認識されていた。「鎌倉絵図」の右上には“金沢八景”が描かれている。

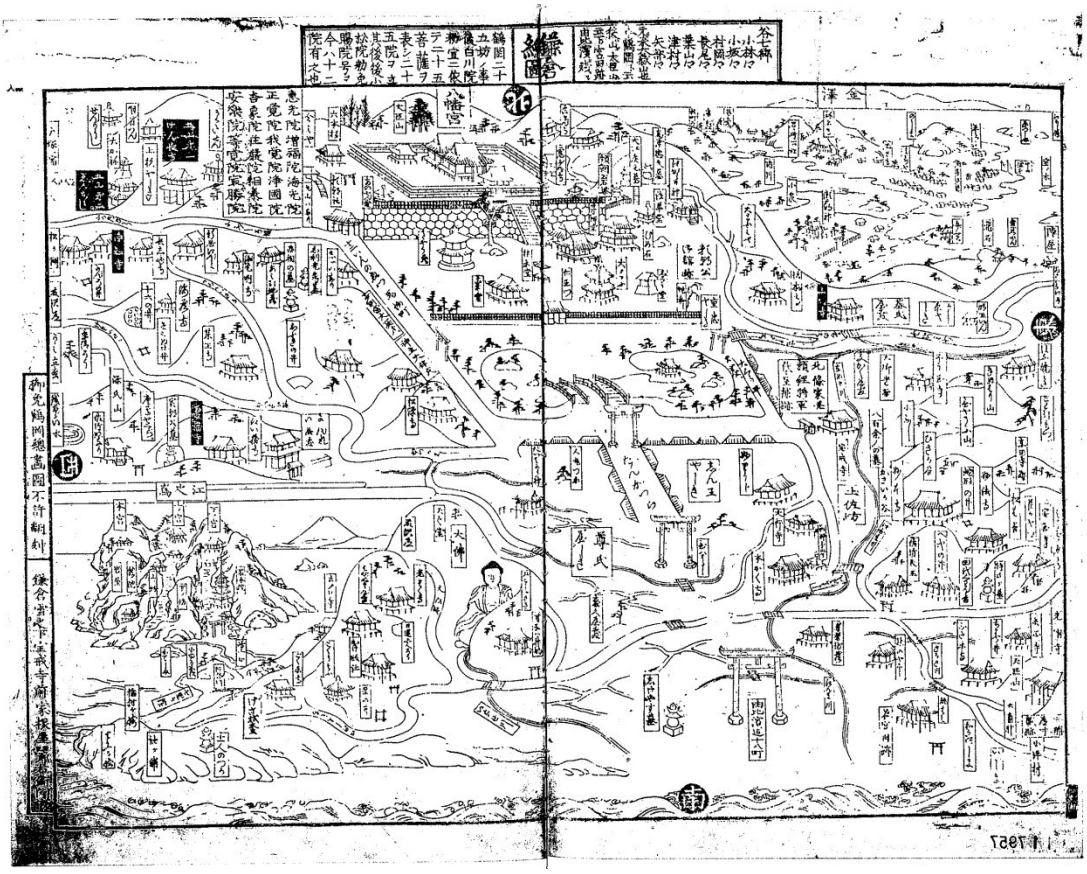


図 2-20　鎌倉絵図(家根屋四郎右衛門版)　(神奈川県立金沢文庫, 1993)

図 2-21　鎌倉総図江之島金澤遠景(戸川版)　(神奈川県立金沢文庫, 1993)

鎌倉総図江之島金澤遠景にも右上に小さくだが“金沢八景”が描かれている。両図とも右上に金沢八景、左下に江ノ島を置き、鎌倉を西から東へと鳥瞰する構図をとっている。江戸市民にとって、大山詣のような鎌倉・江ノ島・金沢を巡るコースは江戸では見られない古刹や海の景観を感じることが出来、また日程や旅費的にも行きやすい巡覧地であった。このような認識のもと描かれているので、実際は鎌倉から見通すことは出来ない金沢の地形を遠景として描き、鎌倉との一体感を演出している。

江戸時代末期に刷られた鎌倉総図江之島金澤遠景はより立体的な風景画の様相を呈し、着色も施された。この絵図では金沢八景はより大きくはっきりと描かれている。

図 2-22　鎌倉総図江之島金澤遠景(江戸末期、雪貢画/戸川版)　(神奈川県立金沢文庫, 1993)

当初の鎌倉絵図は江戸版元であったが、“金沢八景”が江戸市民に広く知られるようになると在地出版に移行し、さらに鎌倉の雪ノ下や富田版金沢絵図が刊行された。

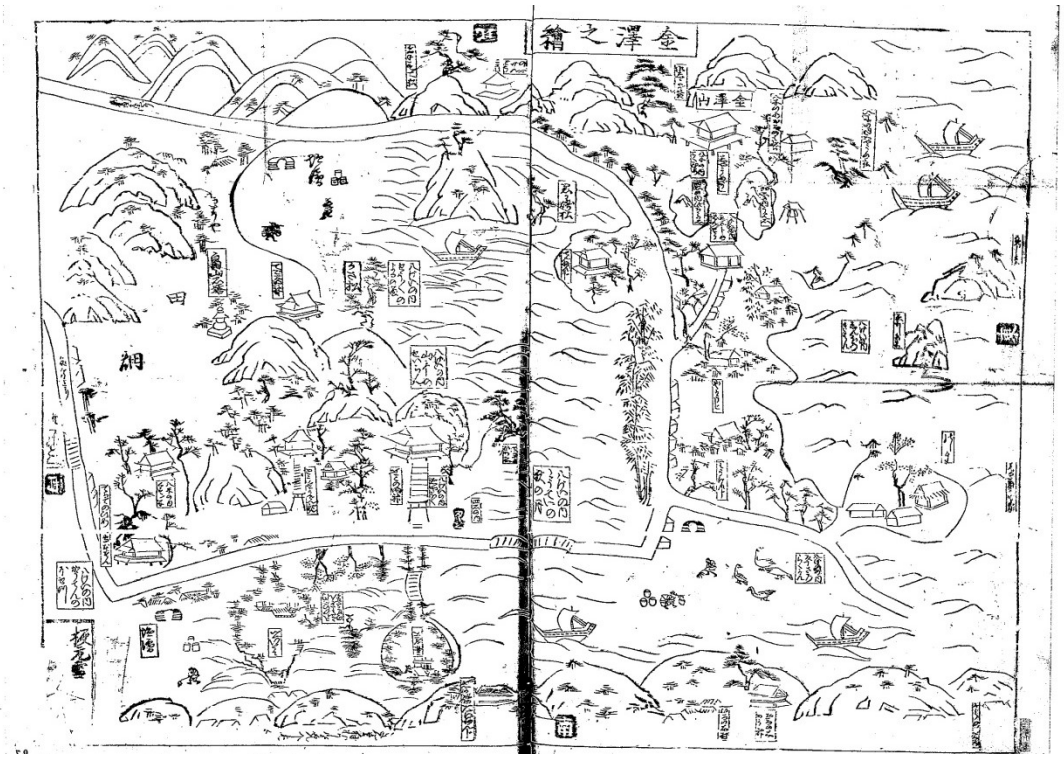


図 2-23　金沢之絵図(17 世紀後半、雪□□版)　(神奈川県立金沢文庫, 1993)

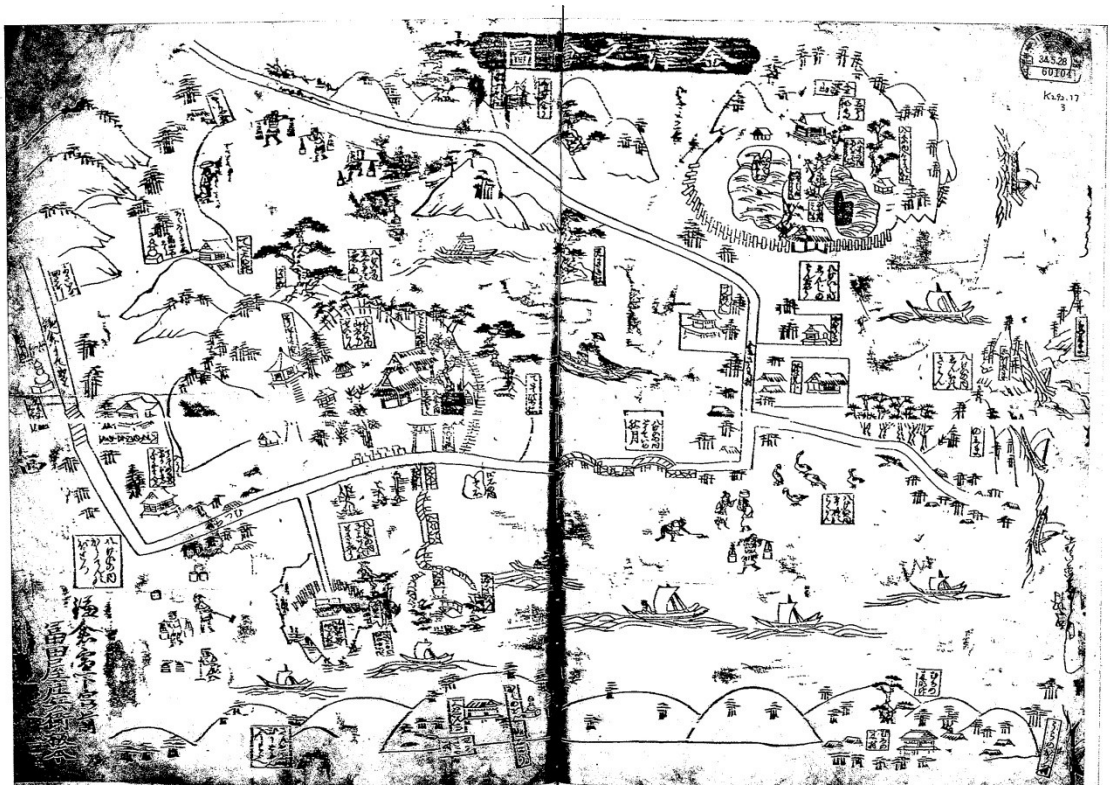


図 2-24　金沢之絵図(17 世紀後半？、冨田屋庄兵衛版)　(神奈川県立金沢文庫, 1993)

これらはいずれも概略図で、瀬戸橋を中心に北に称名寺、東に野島が描かれているおり、正確な地形とは言えないが“金沢八景”の位置や寺院などの史跡の位置などがプロットされ、金沢の名所の位置関係が一目でわかる。このような絵図を観光マップ代わりに金沢の名所を練り歩いたのだろうか。

上記のような金沢の概略図が原形となり、能見堂や金龍院から続々と金沢の絵図がか刊行されるようになる。八景安見図や武州金沢擲筆山地蔵院能見堂八景之図がそれに当たる。とくに武州金沢擲筆山地蔵院能見堂八景之図は何度も修正再版が繰り返され、鑑賞を念頭においた描写へと変化していく。いずれも北に能見堂が大きく描かれ、“金沢八景”一覧の地としてライバル敵対関係にあった金龍院は中央付近に申し訳程度に描かれていることから、金龍院の差別化を図ろうとする意図がみて取れる。

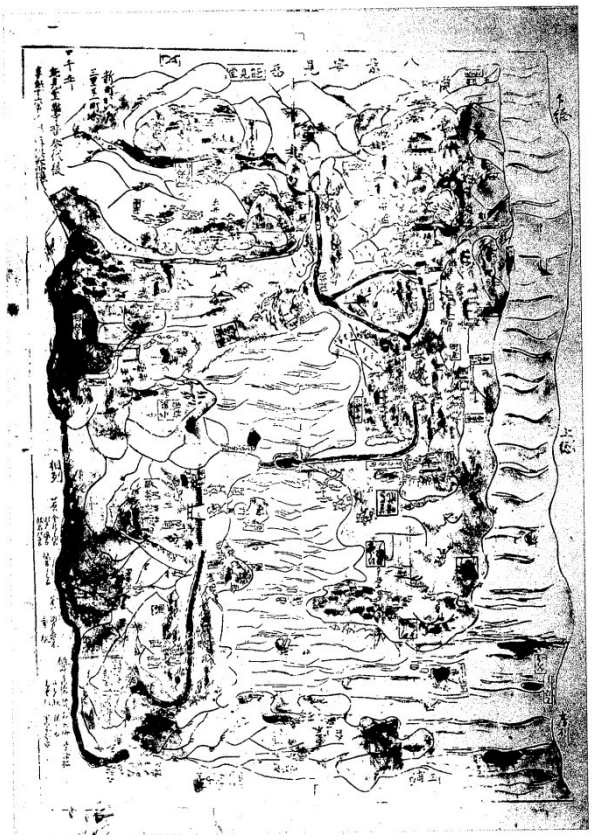


図 2-25　八景安見図(1731 年、能見堂版)
(神奈川県立金沢文庫, 1993)

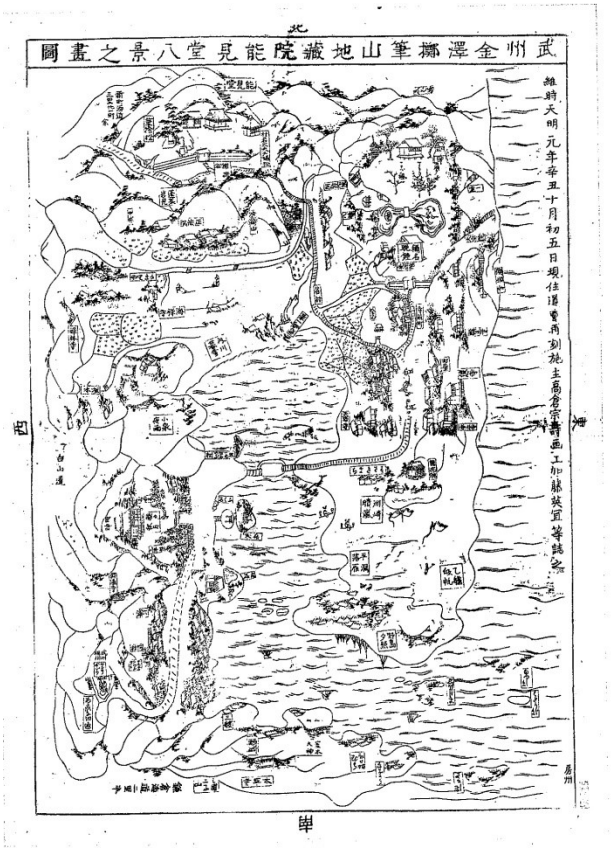


図 2-26　武州金沢擲筆山地蔵院能見堂八景之図
(1781 年、能見堂版)
(神奈川県立金沢文庫, 1993)

図 2-27　武州金沢擲筆山地蔵院能見堂八景之図(1852 年、能見堂版)

(神奈川県立金沢文庫, 1993)

能見堂に続き、金龍院から金沢絵図の刷り物が出版された。里俗相伝而面西湖之詠在金澤伝其景光如図は中国の杭州西湖と対比を題名に掲げた金沢の一覧図である。刊行年は不明だが、おそらく文化年間初頭（1804 年～）と思われる。瀬戸橋を中心に展開する形は能見堂版と共通だが、金龍院をその下に大きく描いている。

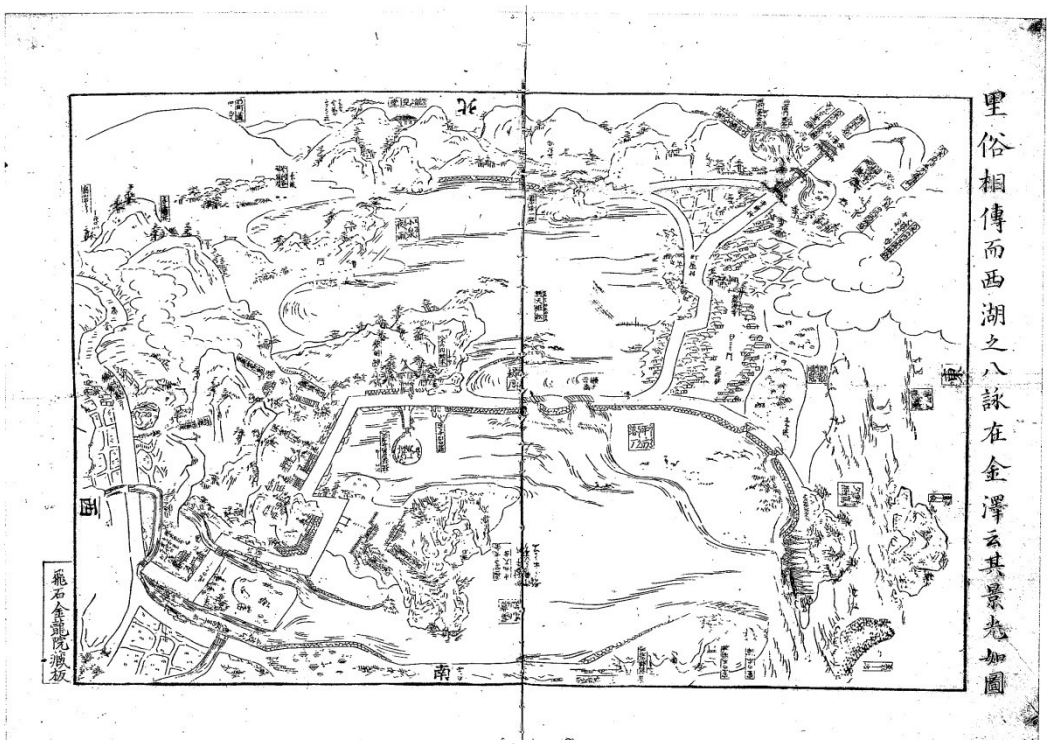


図 2-28　里俗相伝而面西湖之詠在金澤伝其景光如図（金龍院版）

（神奈川県立金沢文庫, 1993）

同じく金龍院から出版された金澤八景絵図は、瀬崎上空から洲崎・野島方面を俯瞰した一覧図である。中心に金龍院を配置した構図と立体的な描写は、その後の浮世絵への発展を思わせる。

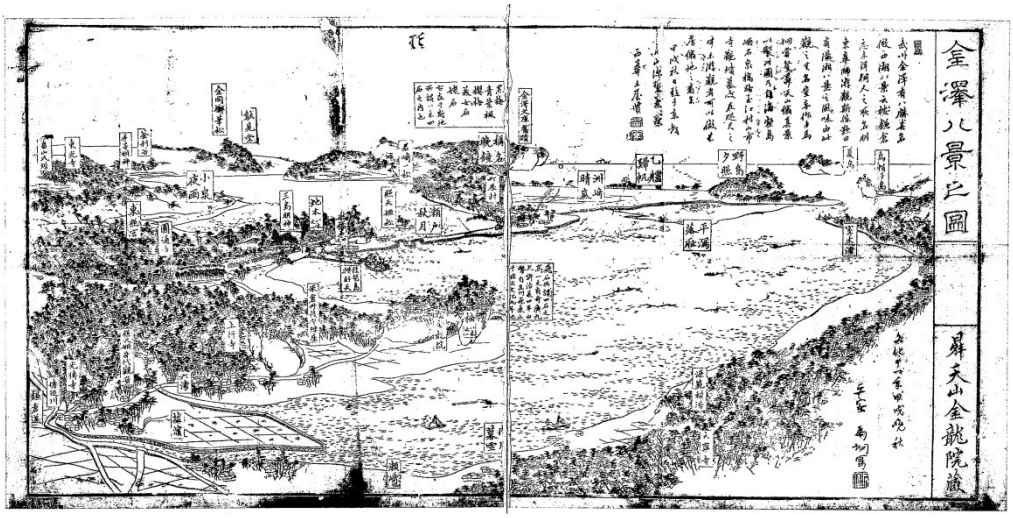


図 2-29　金澤八景之図（馬坰/1814 年、金龍院版）　（神奈川県立金沢文庫, 1993）

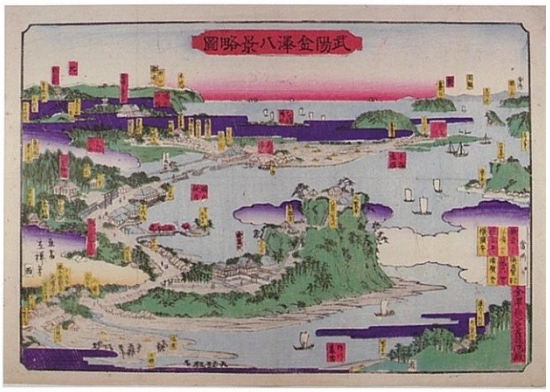
以上、江戸時代に刊行された“金沢八景”関連の刷り物をみてきた。刷り物は風景描写にはほとんどこだわっておらず、むしろ鎌倉との位置関係、“金沢八景”の位置、金沢の史跡など、“金沢八景”を中心とした周辺環境を描き出すことが目的とされていたのであろう。風景描写は拙いが、地理的な描写に非常に優れていた。また、浮世絵とは気軽に持ち歩くことが出来るので、金沢巡覧の際にはこれらの絵図を片手に各名所を訪問していたことも考えられる。“金沢八景”を画題としてだけではなく、自分の目で“金沢八景”を見て歩くための指標となり得る、実用性も兼ね備えていた。

・浮世絵

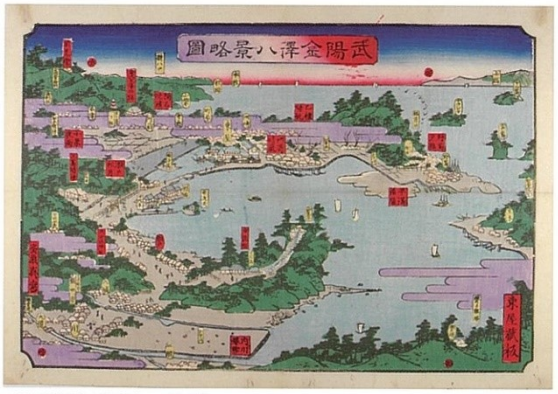
金龍院・能見堂の出版活動が盛んになってくると、次第に江戸の絵師との関係が築かれていった。とくに、金龍院は歌川広重と接近し、金沢八景図として多数の異版を生んだ「武陽金沢八景略図を刊行した。広重の描いた“金沢八景”それぞれの景観を描いた絵図は、その後の出版物の原形ともなった。また、広重は“金沢八景”に限定されない金沢の風景も描いている。広重晩年の作「武陽金澤八景夜景」は広重のみならず、“金沢八景”の風景画の最高峰とみられる作品である（神奈川県立金沢文庫, 1993）。このような浮世絵は金沢土産として普及し、金龍院や能見堂のみならず旅籠屋なども便乗し、様々な種類の絵図が作られた。

図 2-30　武陽金沢八景略図（馬坰/1814 年、金龍院版）　（神奈川県立金沢文庫, 1993）

金沢飛石金龍院蔵　立祥（明治年間）



金沢飛石金龍院蔵　立祥（明治年間）



東屋蔵板（明治20年頃）

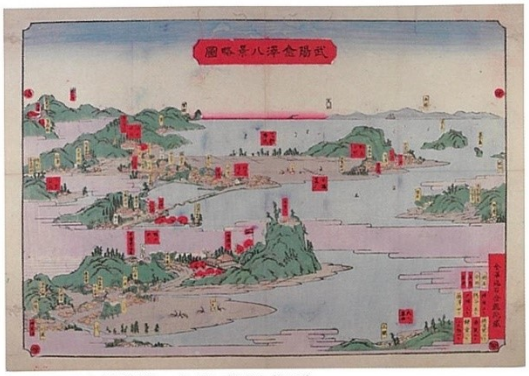
金澤八景之図
金澤飛石金龍院蔵　袋

東屋蔵板（明治20年頃）

金沢八景　東屋蔵板　袋

東屋蔵板（明治20年頃）

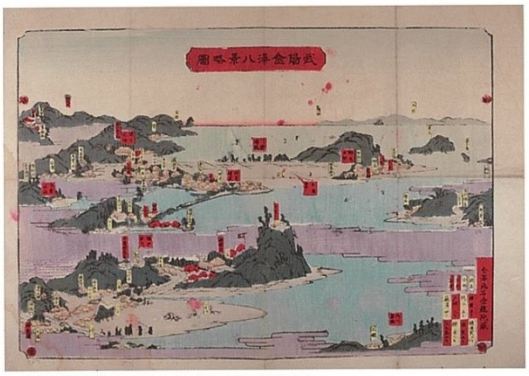
図 2-31　武陽金沢八景略図の異版いろいろ　（神奈川県立金沢文庫, 1993）



金沢飛石金龍院蔵　立祥（明治年間）

金沢飛石金龍院蔵　立祥（明治年間）

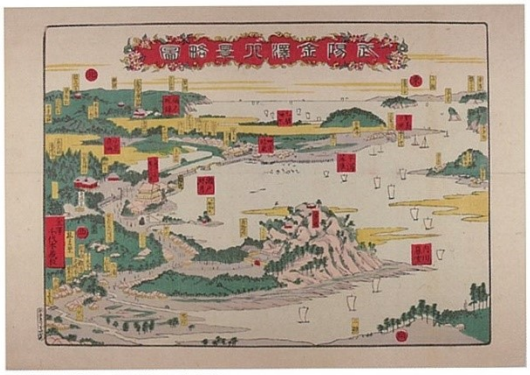
西野屋蔵板



金沢飛石金龍院蔵　立祥（明治年間）

西野屋蔵板　袋

千代本蔵板　袋

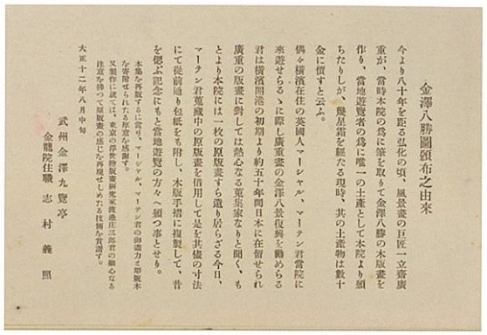


千代本蔵板（明治20年頃）

金澤瀬戸米元（昭和6年）

金澤瀬戸米元（昭和6年）

図 2-32　武陽金沢八景略図異版いろいろ　（神奈川県立金沢文庫, 1993）



金澤八勝圖頒布之由來

今より八十年を距る弘化の頃、風景畫の巨匠一立齋廣重が、當時本院の爲に筆を取りて金澤八勝の木版畫を作り、當地遊覽者の爲に唯一の土產として本院より頒ちたりしが、幾星霜を經たる現時、其の土產物は數十金に價すと云ふ。

偶々横濱在住の英國人マーレヤル、マーチン君當院に來遊せらるゝに際し廣重畫の金澤八景復興を勸めらる君は横濱開港の初期より約五十年間日本に在留せられ廣重の版畫に對しては熱心なる蒐集家なりと聞く、もとより本院には一枚の原版畫すら遺り居らざる今日、マーチン君蒐藏中の原版畫を借用して是を其儘の寸法にて從前通り包紙をも附し、木版手摺に複製して、昔を偲ぶ記念にもと當地遊覽の方々へ頒つ事とせり。

本集を再版するに當り、マーレヤル、マーチン君の御協力と即版本を寄贈せられたる原主な故御子、又製作に就ては、東京の伊藤御覽御愛家後藤庄三郎君の御心なる注意を待つて原版畫の悉に再現せしめたる技術に賞讃す。

大正十二年八月中旬

武州金澤九覽亭
金龍院住職　志村義照

金澤八勝図頒布之由来（大正12年　復刻）

金澤八勝図　袋　武州金沢金龍院蔵

小泉夜雨

瀬戸秋月

野島夕照

内川暮雪

図 2-33　金澤八勝図　（神奈川県立金沢文庫, 1993）

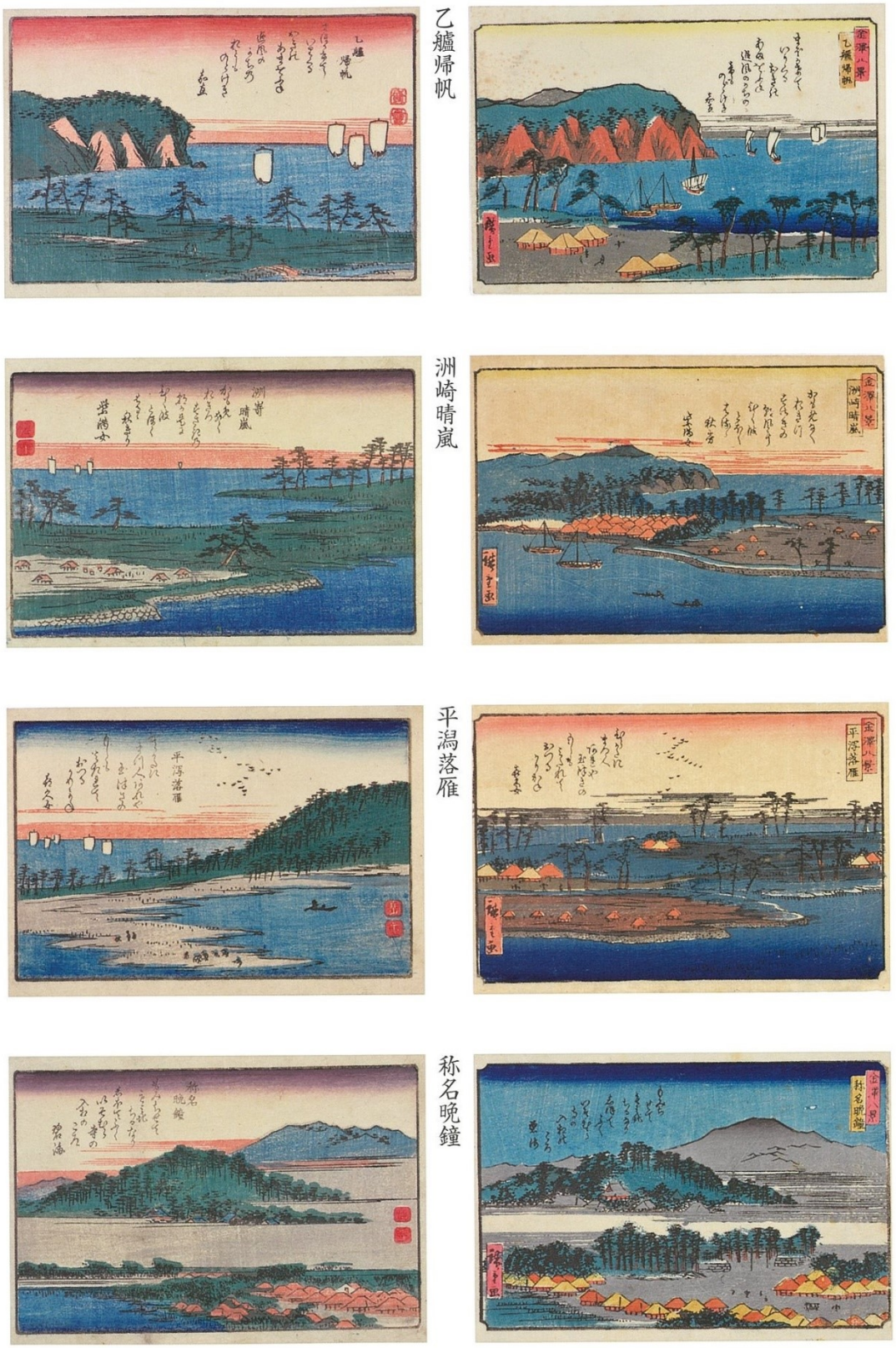


図 2-34　金澤八勝図　　（神奈川県立金沢文庫, 1993）

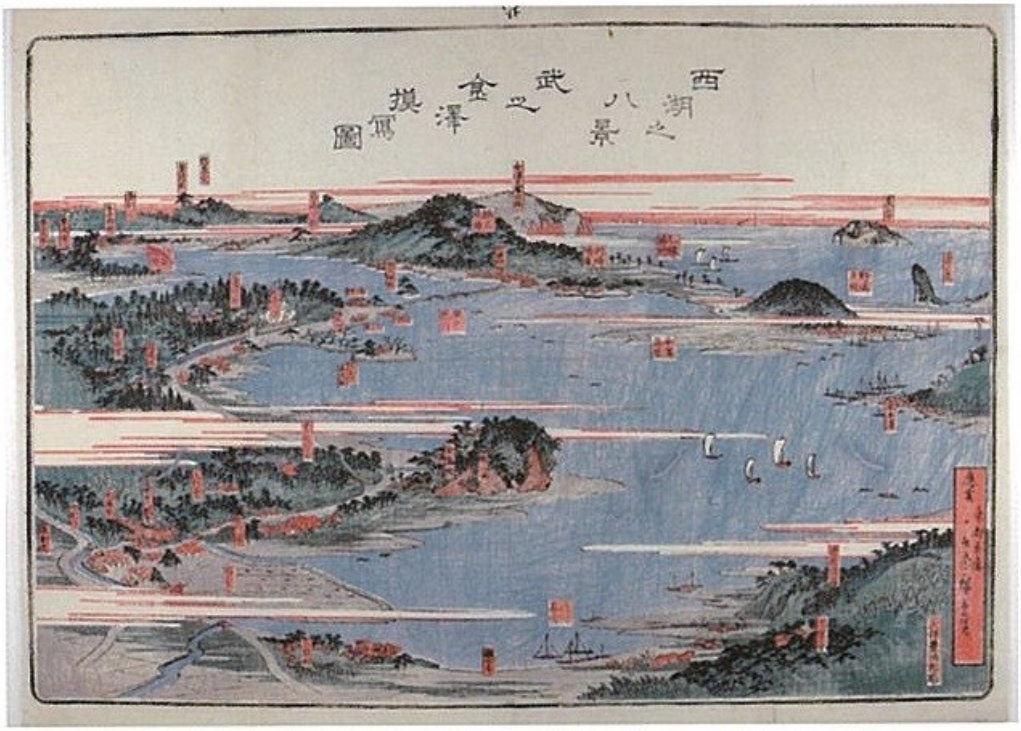


図 2-35　西湖之八景之金沢模写図(歌川広重/嘉永 6 年頃)　(神奈川県立金沢文庫, 1993)

図 2-36　金沢八景之図(歌川広重/嘉永年間?)
(神奈川県立金沢文庫, 1993)

図 2-37　名勝八景・金沢帰帆―従瀬戸橋野島之図―
(二代歌川豊国) (神奈川県立金沢文庫, 1993)

図 2-38　本朝名所・武州金沢風景
(歌川広重/天保 9-10 年頃) (神奈川県立金沢文庫, 1993)

図 2-39　諸国名所記・武陽金沢一覧山
(歌川広重/天保中期) (神奈川県立金沢文庫, 1993)

図 2-40　武陽金沢八勝夜景　（神奈川県立金沢文庫, 1993）

図 2-41　武州金沢能美堂八景之画図（一川芳員/元治元年）　（神奈川県立金沢文庫, 1993）

こうした浮世絵は風景描写には非常に優れているが、版元の意図が多分に介入し、実際の景観より誇張して描かれたりしている箇所があるため、絵図に描かれている自然環境だけが“金沢八景”を形作っているわけではない、ということを理解しておかなければならない。

2.3　写真類

1899（明治 32）年の軍事保護法・要塞地帯法によって金沢周辺の写生、写真撮影が制限されるようになると、もともと浮世絵に代わって製作されはじめた絵はがきが多種多様に発展していく。これらの絵はがきは厳しい検閲を受けながらも作成された(神奈川県立金沢文庫，2012)。題材は浮世絵のように“金沢八景”に限ったものではなく、寺院や金沢文庫関連の文化財、様々な角度からみた平潟湾などの風景写真が使用され、作者の脚色が加えられていない当時の金沢の風土を知れる材料である。

幕末から明治初期にかけて撮影された古写真の数は少ないものの、彩色が施してあるものなどは海と山地に囲まれた土地の人々の暮らしぶりが伺える。また、幕末に来日したイギリスの写真家 F. ベアトが撮影した写真も残されている。ベアトが来日していた期間は軍事保護法が布かれる前だったので、おそらく能見堂あたりから平潟湾の遠望なども撮影している。

・絵はがき

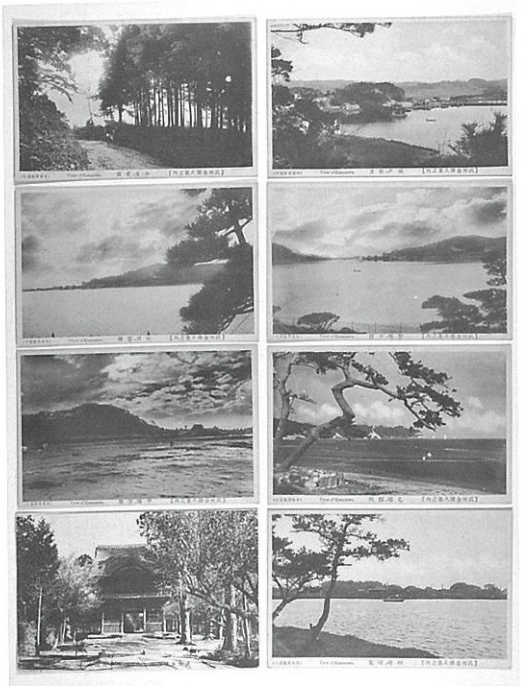


図 2-42　明治 40 年代の絵はがきセット
楠山永雄氏所蔵

図 2-43　大正 10 年代の金沢文庫の絵はがきセット　楠山永雄氏所蔵

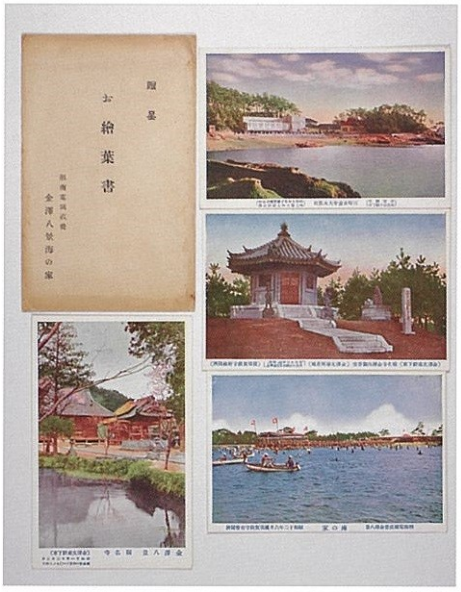


図 2-44　昭和 12 年のカラーの絵はがきセット
楠山永雄氏所蔵

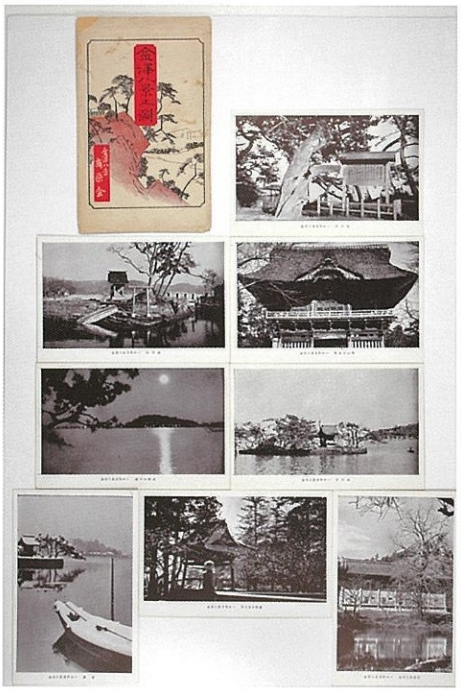


図 2-45　昭和 20 年代のカラーの絵はがきセット
楠山永雄氏所蔵

・古写真

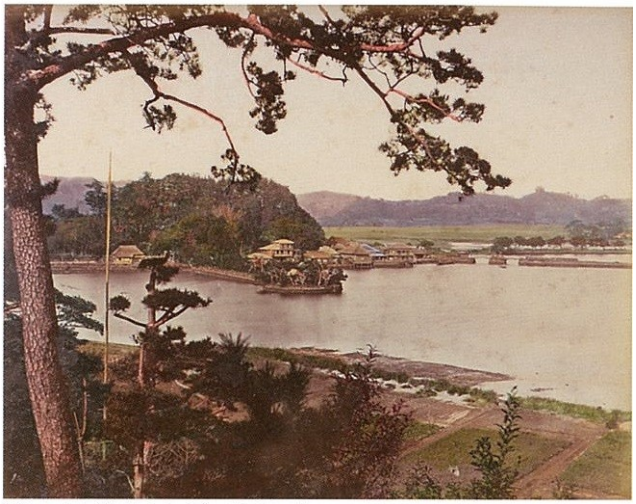


図 2-46　九覧亭より瀬戸橋方面を望む
楠山永雄氏所蔵

図 2-47　富岡の東の浜海岸
楠山永雄氏所蔵

図 2-48　朝比奈峠・荷駄　　楠山永雄氏所蔵

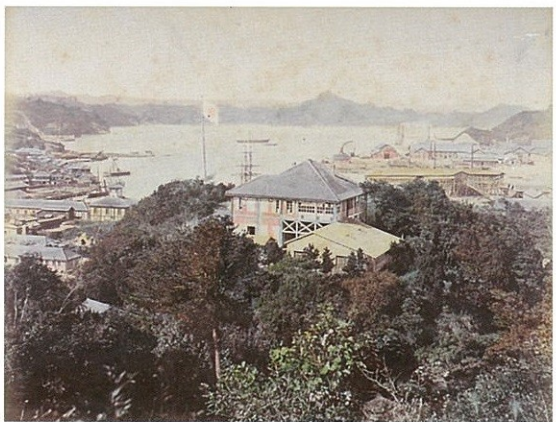


図 2-49　横須賀造船所／日の丸　楠山永雄氏所

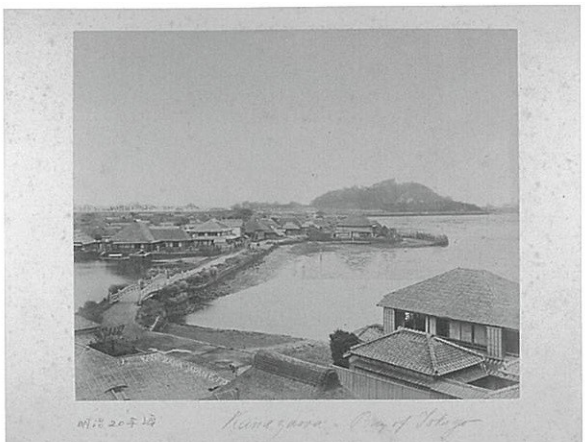


図 2-50　金沢八景　　楠山永雄氏所蔵

図 2-51　千代本 瀬戸橋　　楠山永雄氏所蔵

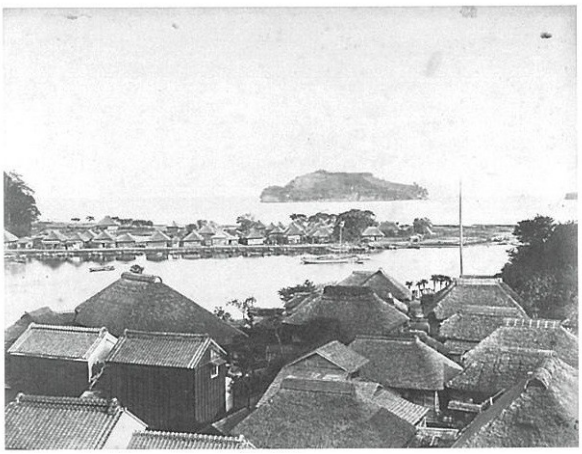


図 2-52　室の木から夏島を望む　　楠山永雄氏所

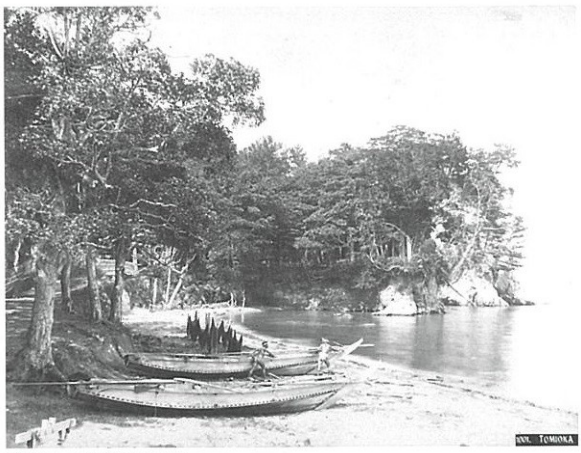


図 2-53　富岡　東の浜海岸　楠山永雄氏所蔵

図 2-54　九覧亭から夏島と烏帽子岩を望む
楠山永雄氏所蔵

図 2-55　F. ベアト撮影 能見堂から金沢八景を望む（横浜開港資料館, 1987）

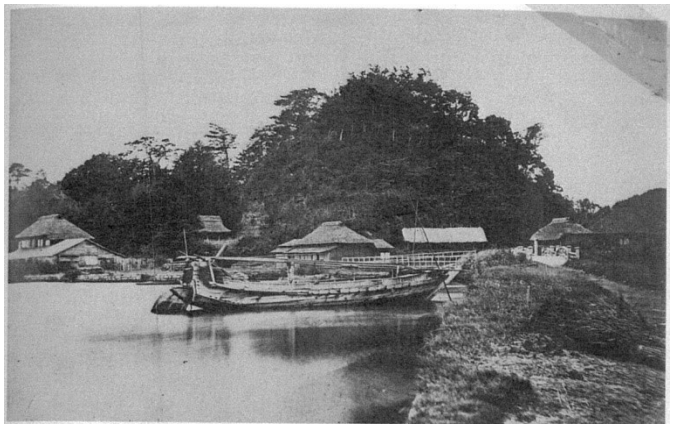


図 2-56　瀬戸橋からの眺め（横浜開港資料館, 1987）

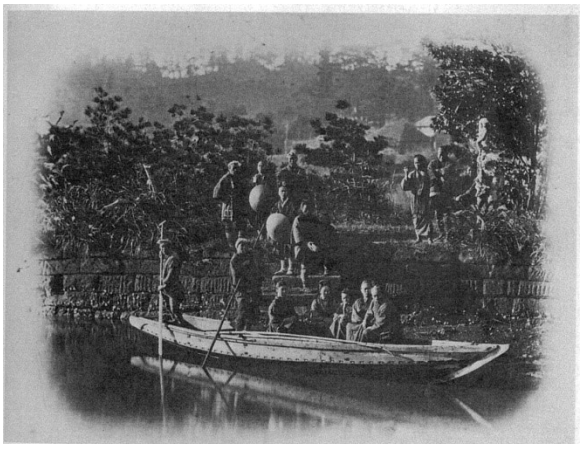


図 2-57　金沢の渡し船（横浜開港資料館, 1987）

第３章　“金沢八景”をめぐる自然環境史と社会文化史

3.1　平潟湾をめぐる自然環境史

平潟湾は東京湾を縁取るリアス式海岸の内陸に入り込んだ小規模な内湾である。東京湾をとりまく関東平野は山地・台地・低地から成り立っている。このような地形は主に地殻変動（大地形の変動）と氷期-間氷期の氷河性海面変動によって形成されたとされる（貝塚, 1987）。平潟湾の地形の成り立ちをとらえるには、隆起と沈降を伴う関東造盆地運動と氷河性海面変動による変遷を統合する必要がある。そこで本項では完新世・更新世（現在～約 180 万年前）を３つの時代に便宜的に分け、造盆地運動と氷河性海面変動による地形・地質の形成過程をとらえることにする。すなわち現在から同位体ステージ 5d までを古東京谷・東京湾時代（現在～約 12 万年前）、同位体ステージ 5e からステージ 21 までを古東京湾時代（約 86～12 万年前）、それ以前を大陸棚時代（約 200～86 万年前）に区分し（図 3-4）、平潟湾をとりかこむ関東平野、房総・三浦半島の山地形・台地地形・低地といった大地形が形成された過程を明らかにし、その中で平潟湾の位置づけを行う。

また、平潟湾周辺地域の植生については鎌倉市にある史跡永福寺跡および北条高時邸で実施された花粉分析の結果を踏まえ、植生史を概観する。

（１）地殻変動と気候変動によって形成された関東山地

大陸棚時代（約200～86万年前）は上総層群が形成された時代である。中新世末期から日本列島は圧縮場に転じはじめ、第四紀（前期更新世から完新世まで）には山の隆起が速くなった（竹内, 1981；貝塚・鎮西, 1995の８章など）。そのはじめが後期中新世の礫の分布であり、三浦層群上部、富岡層群などである。鮮新世-前期更新世の上総層群は葉山-嶺岡隆起帯の北側に生じた沈降部を埋め、東にいくほど深海域であり、東京湾には大陸棚が広範囲に広がっていた。平潟湾はこの頃、海底で発達した海成段丘である（貝塚, 2000）。

古東京湾時代（約86～12万年前）は氷期・間氷期を繰り返し、関東平野に相模層群が堆積した時代

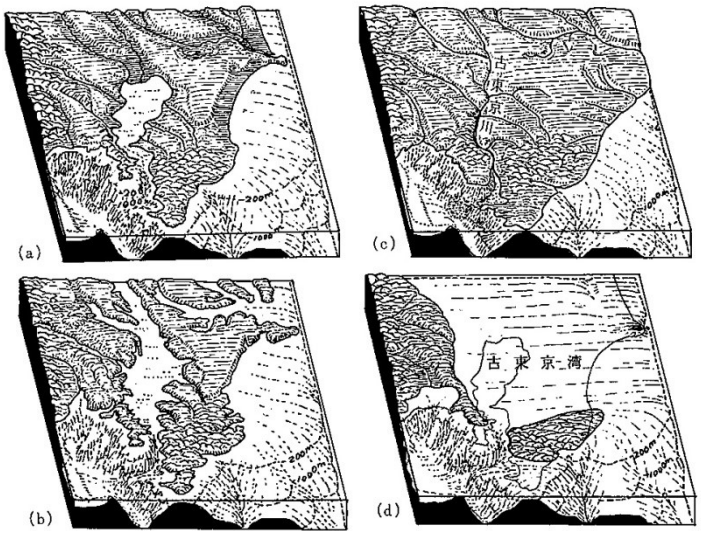


図 3-1　関東(南部)の地形変遷　（貝塚ほか, 1985a）
(a) 現在, (b) 縄文海進最盛期, (c) 最終氷期最盛期, (d) 最終間氷期最盛期

である。気候が寒冷化する氷期には、海面が低下し関東平野はほとんどが陸域となる。やがて気候が温暖な間氷期が移行すると、海面が上昇し関東平野に海が入り込む。しかし、平潟湾を中心とした山地丘陵は海進の際にも海に潜ることなく岩石海岸の形状を維持した。

最終間氷期最盛期のステージ5eに形成された段丘を下末吉面（S面）という。下末吉面は関東平野に広く分布している。この時の海進を下末吉海進といい、関東平野の大部分は海域であった。これを古東京湾と呼ぶ。

ステージ２の最終氷期最盛期には再び海面が低下する。この時の海面は少なくとも現在より80m以上低下していた。河川は古利根川に合流し、大河川をつくる。これを古東京川という（鈴木, 2000）。これらの河川は広域な分水界をもち、流された砂礫などが堆積し、平坦な地形を形成した。

約8000年前には縄文海進によって最終氷期に形成された地形に海が入り込み、奥東京湾を形成した。この時代までほとんど平潟湾は浸食や堆積に晒されることなく、古い上総層群の岩石海岸がそのまま維持されていたものと考えられる。

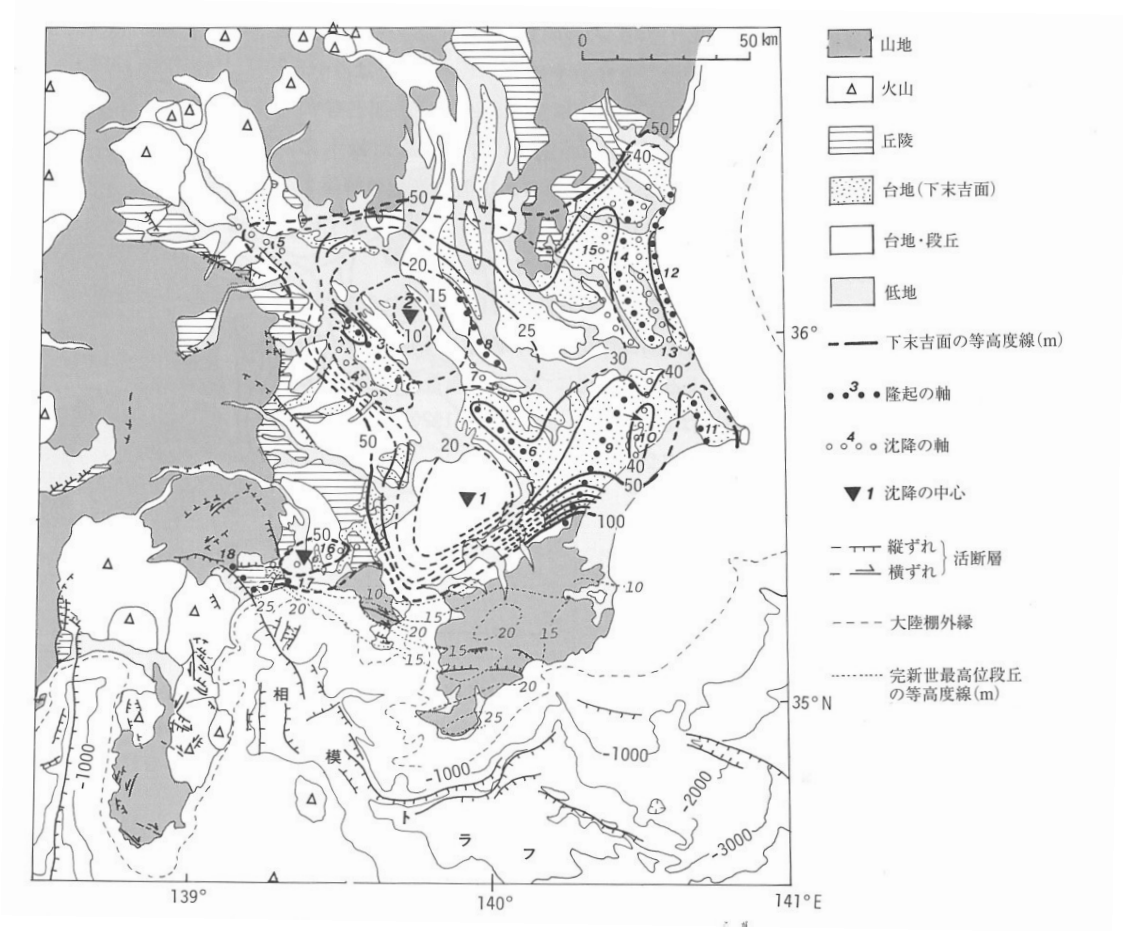


図 3-2　関東の第四紀後期の地殻変動　（貝塚, 1987）

図 3-3　横浜-横須賀地域の地質図　地質調査所（1982, 1998）

長沼不整合、上総層群、相模層群は筆者の加筆

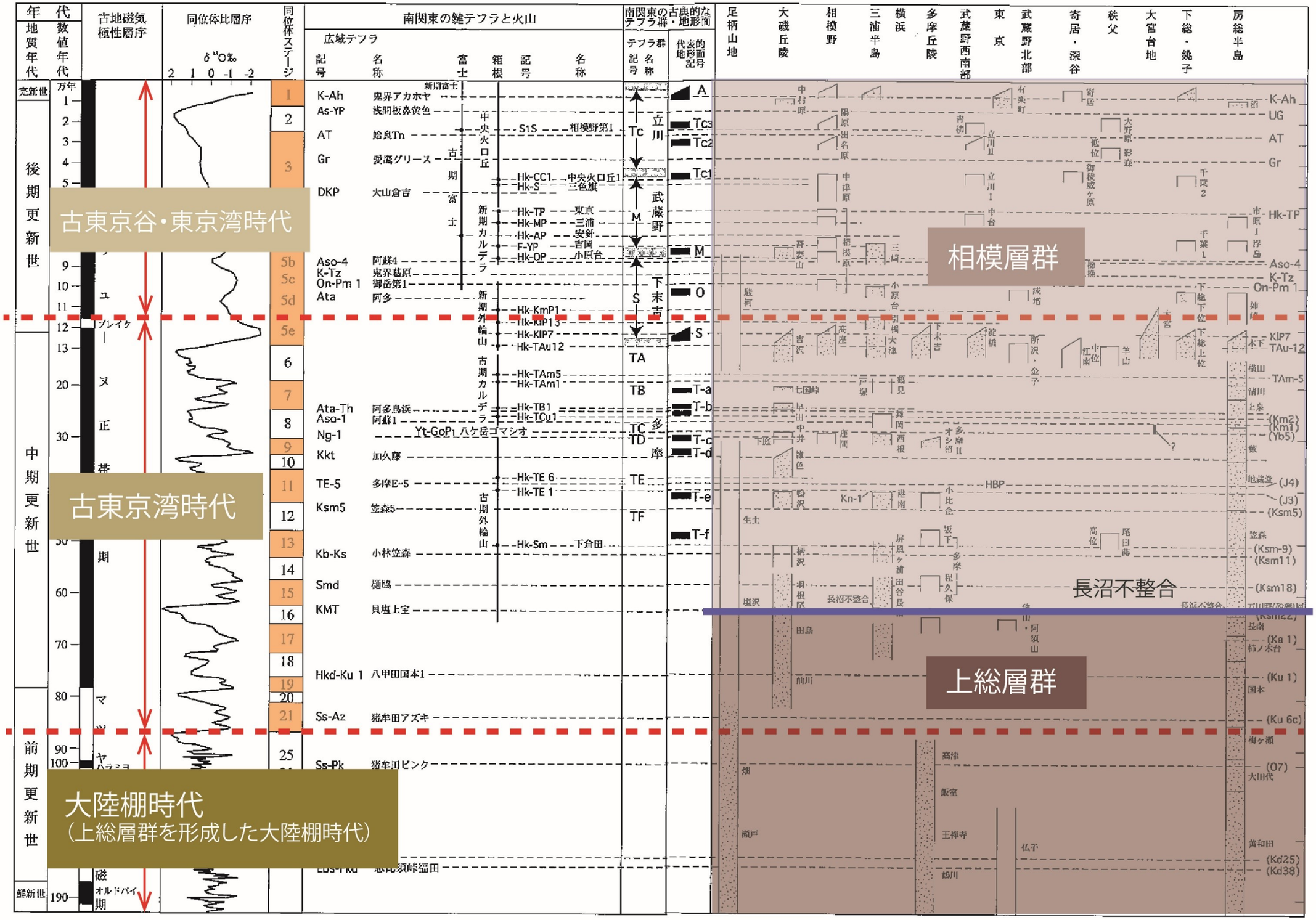


図 3-4　南関東の第四紀編年図（町田洋・鈴木毅彦原図）

時代区分、長沼不整合、上総層群、相模層群は筆者の加筆

（２）平潟湾周辺地域の植生

平潟湾の植生変遷についての研究成果はほとんどみられない。しかし、南西に位置する鎌倉については多くの成果が得られる。そこで、鈴木（1999）の史跡永福寺跡と北条高時邸跡の花粉分析の結果より得られた鎌倉の植生変遷を平潟湾周辺の植生をみる手掛かりとする。

史跡永福寺跡と北条高時邸跡の花粉化石分布図は図3-5と図3-6のとおり。二つの史跡の花粉分析の結果、鎌倉においてはスギ林・照葉樹林からニヨウマツ林へと交代したことが明らかになった（鈴木,2000）。交代の時期は13世紀中頃とみられる。13世紀中頃の鎌倉では

都市整備が盛んに行われており、急激な人口増加も伴って建築材や燃料材としての木材需要が高まった。スギ材が多く使用された痕跡の残っていることから、スギ林の伐採が進み、代わりにアカマツやクロマツなどのニヨウマツ類の二次林が形成された（鈴木，2000）。 以上のことから、平潟湾周辺地域においても13世紀初頭まではスギ林を中心とした照葉樹林帯を形成していたものと思われる。

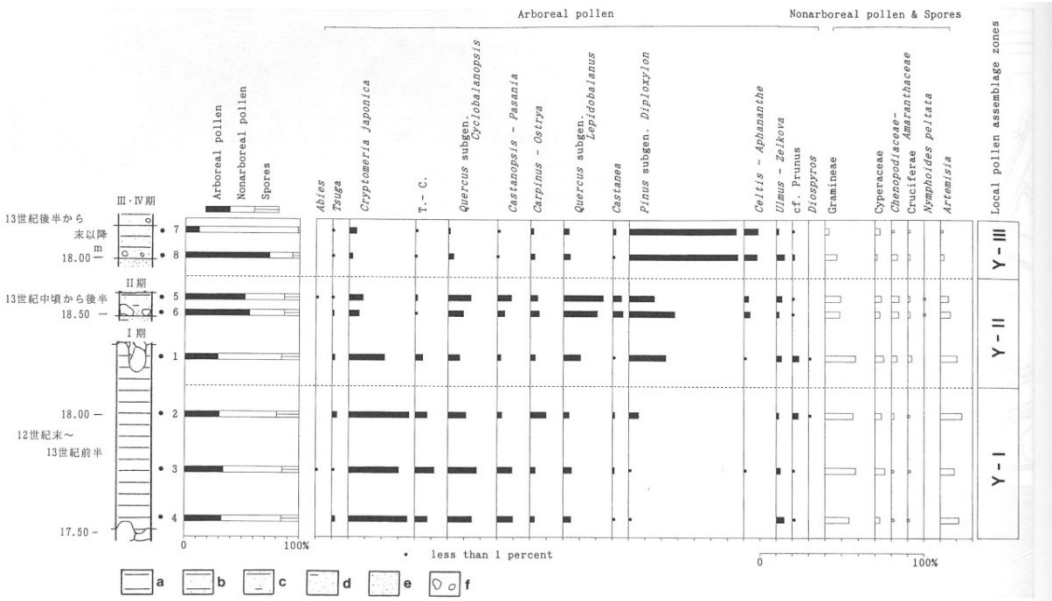


図 3-5　史蹟永福寺跡の主要花粉化石分布図（鈴木，2000）

図 3-6　北条高時邸跡の主要花粉化石分布図（鈴木，2000）

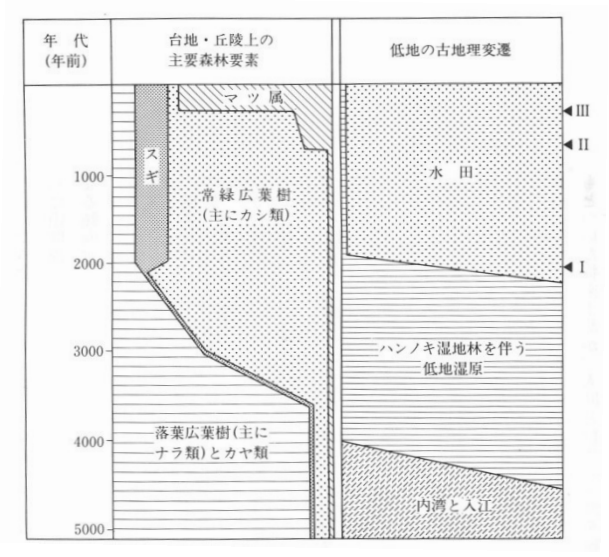


図 3-7　関東平野における縄文時代以降の植生史と弥生時代以降の集中的な植生改変　（辻，2002）

3.1.1　平潟湾の成り立ち

“金沢八景”を生み出し、この地の都市としての役割を決定づけたのが平潟湾という類まれな内湾環境である。平潟湾は侍従川と宮川の二つの水系から形成される。江戸末期以降の新田開発や埋め立てにより河川の長さ・河口の位置などが大きく変わったが、近世江戸時代には侍従川は現在の六浦から大道方面へ、宮川は釜利谷から北の保土ヶ谷方面へと延びる河川であった。二つの河川流域は異なった植生単位が成立し、この植生に規定されてそれぞれの昆虫相・鳥相が育まれている（川瀬，1987）。

山地は戦後の宅地造成が行われ、現在では急峻な土地に家々が軒を連ねる。この地域の地質は地質調査所の 1/50000 の地質図幅（地質調査所，1998）によれば、低地はほとんどが沖積層で、洲崎などは広範囲にわたって沖積低地が広がっている。一方、山地は野島層が多くを占め、北部に大船層・小柴層、南は浦郷層などがみられる（図 3-3）。これらの地層は上総層群に含まれ、堆積したのは今から約 200 万年前のアウストラロピテクスが出現した時代という、非常に古い地層である。野島層、大船層、小柴層はいずれも凝灰質砂岩という特徴を持つ。凝灰質砂岩は火山活動による噴出物が深海で泥流状にうねるように堆積したもので、急峻な地形を作りだす（川瀬，1987）。これが、平潟湾の深い海の内湾を形成しているのである。

平潟湾の古環境の分析は瀬戸神社旧境内地遺跡の考古学的分析（広瀬，1989）や松島の研究（1979，1991，1996 など）によるところが大きい。松島は貝類群集変遷と貝化石の ^{14}C 年代測定による絶対年代の決定など、自然科学と考古学の視点から平潟湾や夏島貝塚など、金沢の古環境の解明を試みている。しかし、松島の分析は約 10000～9000 年前の縄文時代草創期からにとどまり、平潟湾の古地理の変遷を明らかにはしているが、どのように平潟湾が形成されてかについては言及されていない。また縄文海進最盛期を約 6500～5500 年前に設定、発掘調査における年代判定が判明しなかった箇所があることなど、年代決定に関してはやや疑問が残る。そこで本章では、最終氷期最盛期と縄文海進最盛期という二つの大きな環境変動に焦点をあて、いかにして平潟湾が形成されたかを明らかにする。

3.1.2　最終間氷期最盛期の平潟湾

約 10 万年前の最終間氷期に形成された下末吉面は、海進によって広い範囲が海域となっていた。一方、平潟湾周辺の地域は房総半島南部と同様、山地丘陵の地形を保ったまま古平潟湾を形成した。なお、松島（1991）は縄文海進最盛期に古平潟湾が誕生したとしているが、最終間氷期には平潟湾の原形である古平潟湾は形成されていたものと推測される。

図 3-8　最終間氷期の平潟湾

3.1.3　最終氷期最盛期の平潟湾

最終氷期最盛期（約３万年前）では世界的に少なくとも現在より 80m 以上海面が低下していたといわれている。東京湾は全域が陸地となり、関東の主要な河川は古東京川に合流し、沖積低地に基底礫層が堆積した。当時の平潟湾も東京湾と同様にほとんど陸地で（図 3-9）、現在は沖積層に埋没している古侍従川と古宮川という二つの河川が合流し、古平潟川を形成した。二つの河川は急峻な海成沖積層により形成された地形から流れ込み、また分水界が非常に狭く限られていたものであったため、砂礫などの堆積物が少なく、浸食により深い谷を形成したのである。

図 3-9　最終氷期の平潟湾

3.1.4　縄文海進最盛期の平潟湾

縄文時代草創期以降の平潟の変遷については松島の研究(1991)が基礎資料となり得よう。松島は現在の横浜市金沢区の京浜急行金沢八景駅前にある瀬戸神社旧境内地内遺跡において調査を行っている。瀬戸神社旧境内地内遺跡の裏手にある金沢山は野島層が露出した崖地となっており、縄文海進により浸食された埋没波食台とみられる（広瀬、1989）。この調査で松島は波食面の年代測定を試みるも、正確な年代を示す資料が得られなかったとし、金沢区に隣接する港南区上大岡で明らかになった資料（4.8m，6370±140yBP.　松島，1973,

1984b）から年代を推定している。また、縄文海進最盛期を約6500～5500年前としていたが、近年の研究では縄文海進最盛期は約8000年前とすることが通例である。このように、松島の分析には精度にやや疑問が残るが、縄文時代草創期以降から古墳時代までの、基本的な地形の変遷は変わらないものとして分析を行う。

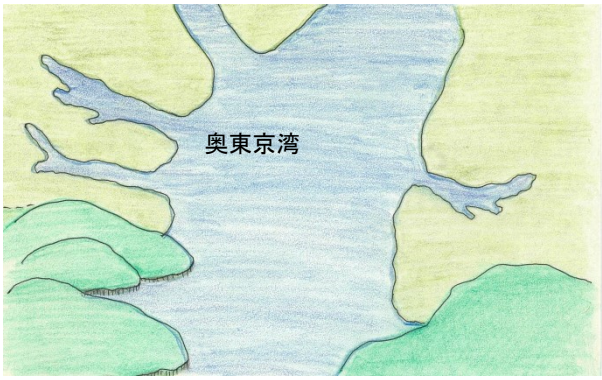


図 3-10　縄文海進最盛期の平潟湾

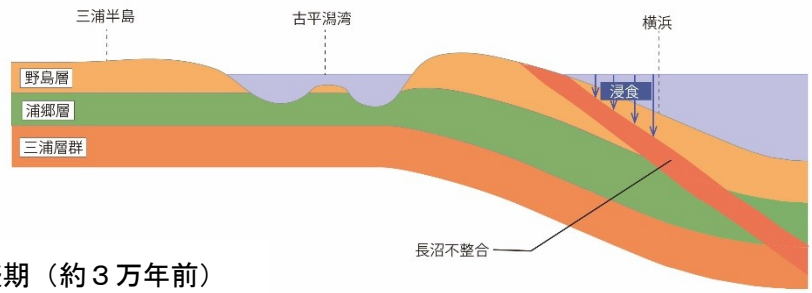
縄文海進最盛期は海面が現在より３ｍ程高く、気候の温暖化も最高となった。最終氷期最盛期に陸域となっていた古東京川流域まで海が入り込み、古東京湾を形成した。平潟湾でも同様に、最終氷期最盛期に形成された深い谷に海が入り込み深い内湾となり、古平潟湾が誕生した（松島，1991）。野島、夏島は完全の島となり、湾に流れ込む大きな河川がないため、泥などの細かい堆積物が沈積した。

3.1.5　古墳時代以降の平潟湾

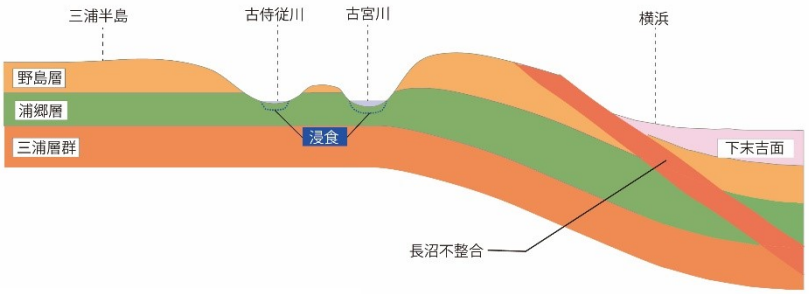
縄文海進のピークが過ぎ、縄文時代後期に海退が起こると古平潟湾は徐々に縮小し、寺前付近から洲崎、野島にかけて砂州が形成された。この砂州が自然の囲いとなって沿岸水の侵入を防ぐ役割を果たし、深い内湾と泥質の入り江という特殊な内湾環境が明治初期頃まで存続した。この閉塞的な内湾環境が、近江八景ほど規模が大きくない比較的小規模な内湾に“金沢八景”の八つの景観が凝縮された要因であると考えられる。

図 3-11　古墳時代の平潟湾

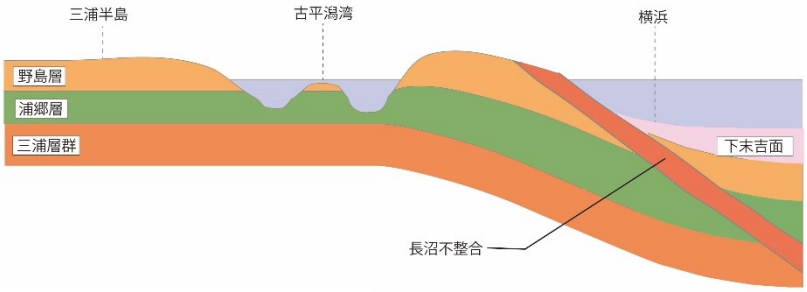
最終間氷期最盛期（約 10 万年前）



最終氷期最盛期（約３万年前）



縄文海進最盛期（約 8000 年前）



古墳時代（約 1500 年前）

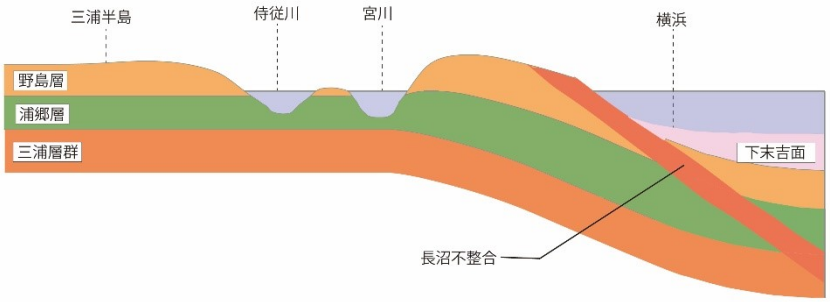


図 3-12　　関東平野南部の南北異質断面と氷河性海面変動との関係

3.2　中世の金沢

3.2.1　荘園としての六浦庄

現在の金沢区一帯は、中世における武蔵国六浦庄（むつらのしょう）と呼ばれた荘園に相当する。中世の土地支配系統は大きく公領と荘園に分かれる。古代律令制を引き継ぎ税収が国に収められ、地方においては国衙の直接支配を受ける地域を公領または国領と呼び、そのような支配系統を嫌い有力貴族や大寺社に寄進し、国に税収を納めない地域のことを荘園と呼んだ。荘園は中央権力と繋がる独自のルートを持ち、国家権力の介入を排除する形で全国に広まった。六浦庄が荘園として成立した正確な年代は不明だが、平安時代後期には武蔵の国六浦庄として独立し、国衙の支配を受けない地域となっていたと推測され、確実に知られるところでは 1277（建治３）年まで仁和寺勝宝院の所領であった。当時の勝宝院の院主は、関東申次であった西園寺実氏の子息・道勝である。先代の院主は貞暁という人物で、彼は実は源頼朝の子息であった。しかし庶子であったため正妻・政子に疎まれ、高野山に出家して生涯を終えている。『吾妻鏡』に 1231（寛喜３）年、貞暁の遺領を道勝に譲渡した旨の記載がある。遺領には後に六浦庄と交換される備中国（岡山県西部）の荘園が挙げられている。貞暁の所領は母・大進局が鎌倉を去る際に頼朝から与えられたもので、源家が相伝した関東御領として顕著なものの一つであった。六浦庄と貞暁を直接結び付ける史料を残されていないが、少なくとも何らかの形で鎌倉幕府と六浦庄と係りがあったことがみられる（金沢区制五十周年記念事業実行委員会，2001）。

六浦庄は中世には四つの郷に分かれていた。正確な場所を示す史料はないが、おおよそ大道から瀬戸神社までの一帯を六浦本郷、朝比奈切通しが開かれる以前の古道が通じ、初代金沢北条氏である実泰が領したとされる釜利谷郷、二代目金沢氏の実時が領し六浦本郷と瀬戸を挟んだ対岸にある砂州の一帯を金沢郷、金沢郷から山を隔てた北側を富岡郷と称していたようである（福島, 1997）。

図 3-13　六浦庄の郷区分　（久良岐郡統計書, 1913）当時の郷域は筆者加筆

3.2.2　鎌倉幕府と六浦庄の統治

六浦庄の統治権を与えられたとされる最も古い人物は、茨城県史編纂の過程で発見された「大中臣氏略系図」によって判明した。「大中臣氏略系図」よると 1157（保元２）年に大中臣実経という人物が相州六浦庄を与えられている。石井進（1986）は、実経はおそらく源義朝（源頼朝の父）の子息義平から六浦の地を与えられたのではないかと推測している。網野（2007）は実経の祖父頼継が上総介の官途を持っていた点に着目し、上総の国と深い結びつきのある実経であったからこそ鎌倉の東の要所となりうる六浦庄を与えられたのではないかとし、石井（1986）の指摘する鎌倉の位置づけにおける南北ではなく、内と外を結ぶ東西の線の重要性を決定づけるものとしている。この東西とは鎌倉と房総と三浦半島を指し、六浦はこれらを結ぶ役割を担っていたとされる。1180 年、三浦半島の有力御家人・三浦氏の支族である和田義盛が、鎌倉の侍所別当に任じられた。上総国の伊北庄に所領を持っていた

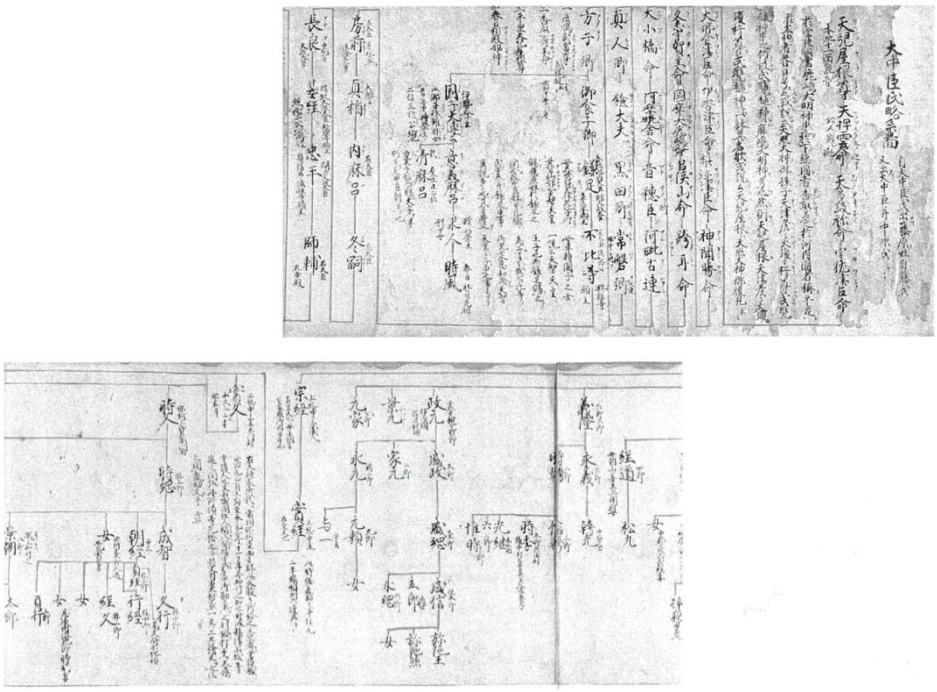


図 3-14　桐村家本大中臣氏略系図 桐村典兒氏蔵
（金沢区制五十周年記念事業実行委員会，2001）

義盛は、1211（建歴元）年に源頼朝の子息・実朝に上総介の地位の受領を申し出ていることが『吾妻鏡』の記事から明らかになっている網野（2007）。こうして六浦庄は鎌倉と房総を結ぶ要所として和田氏の支配下に置かれることとなる。しかし、和田氏の統治も 1213（建保元）年の和田合戦で和田氏が北条義時に敗れたことで終わりを告げたとされる。明確な年代は不明だが、和田合戦で義盛与党に平姓の六浦氏がみえることから恩賞として義時が六浦庄を給わり、1224（元仁元）年に北条実泰が所領を相続したとみられる（神奈川県立金沢文庫, 2009）。六浦庄を与えられた北条氏はのちに館を構えた金沢郷の地名から金沢北条氏と呼ばれるようになる。

3.2.3　金沢北条氏による六浦庄の統治

金沢北条氏は二代実時が館を構えた金沢郷を長く本拠地としていた。若くして幕政から退いた初代実泰の後を継いだ実時は、称名寺や金沢文庫を設立し、金沢の瀬戸入海での殺生禁断令を布くなど、その後の金沢の基盤をつくった人物である。称名寺は実時が金沢に構えた館内に建てた母親の菩薩を弔うための持仏堂か起源とされ、1267（文永４）年に妙性房審海を開山に

図 3-15　北条貞時像
（神奈川県立金沢文庫，2009）

迎えて真言律宗の寺院に改められた。

四代貞顕の時代には七堂伽藍を備える大寺院となっていた。また、実時は称名寺創建と同時期に金沢文庫を設立している。金沢文庫では歴代金沢氏が管理してきた書籍等が保管され、図書館のような形で当時の知識階級に活用された。鎌倉幕府が滅亡し金沢北条氏が衰退すると、称名寺の管轄となった。実時の孫・四代貞顕の時代が金沢北条氏の最盛期となる。貞顕は称名寺の大改修を行ったほか、瀬戸と金沢を結ぶ瀬戸橋の架橋工事を着工し、瀬戸橋開通によってそれまで分断されていた金沢郷と六浦郷が一つの地域としてまとまり始めたが（神奈川県立金沢文庫，2000）、六浦庄と金沢という荘園と公領という複雑な地域区分は近代まで残ることとなる。

1333（正慶２）年、二度の元寇での恩賞について、幕府に対する御家人の不満が高まりついに鎌倉幕府は終焉を迎える。これにより金沢北条氏による六浦庄の統治も終わり、足利氏が実権を握るようになる。

図 3-16　現在の称名寺

図 3-17　現在の金沢文庫

1455（享徳３）年、鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を殺害し享徳の乱が始まると成氏は下総国古河（茨城県古河市）にうつり、公家方の人々も古河へ移り住んだ（神奈川県立金沢文庫,2009）。鎌倉には上杉氏が残ったもののかつての中央集権都市としての求心力はなくなり、衰退の一途をたどる。再び鎌倉人々の関心を集めるようになるには近世に入ってからのことである。六浦庄の支配は戦国時代には実質を失い「金沢領」として再編されたが（金沢区制五十周年記念事業実行委員会，2001）、鎌倉の衰退とともに六浦もまた荒廃していった。

3.2.4　中世の港湾都市・六浦

六浦庄は大きく入り込んだ内湾を囲む地形を利用した港町であった。港としての六浦は「六浦津（むつらのつ）」という名で文献に表記されていることが多い。「津」とは古代から海や河を問わず、船の停泊する機能持つ港を指す言葉である。六浦津がいったいいつから置かれたのかというはっきりとした年代は不明だが、おそらく 1063（康平６）年、鎌倉を拠点としていた源頼義が鶴岡八幡宮を建設したのが一つの契機と考えられる。鎌倉と南関東を結ぶ六浦道が鎌倉へ運ぶ物資の輸送路として発展すると、海路による物資の陸揚げ場として六浦津も発展していったものとみられる。1180（治承４）年に源頼朝が鎌倉幕府をしき鎌倉の都市整備を始めると、鎌倉と房総を結ぶ東西の道が一層重視されることになる。『吾妻鏡』には 1241（仁治２）年に北条泰時が朝比奈切通の工事に着工したという記録が残されている。朝比奈切通の開通によって六浦道は鎌倉と六浦を結ぶ幹線道路となり、六浦津は鎌倉の外港として発展していったと思われる。

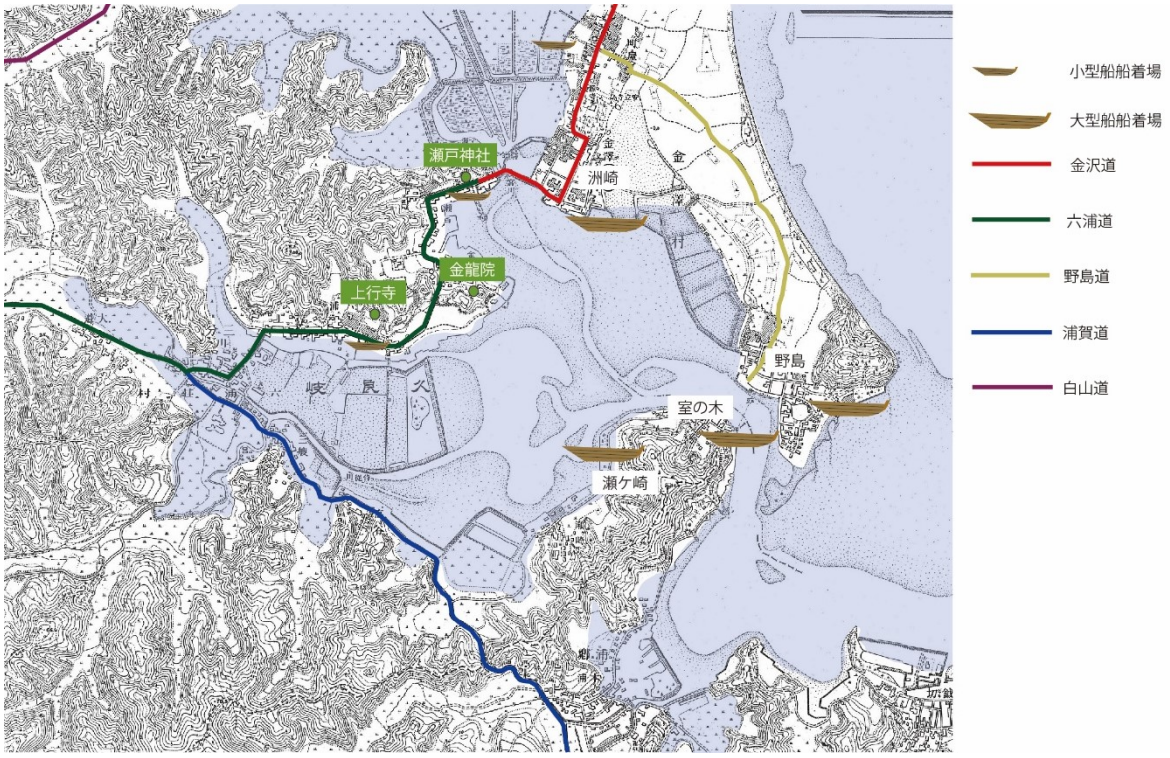


図 3-18　明治 36 年の地形図（国土地理院）
当時の海域と六浦庄の古道と主要な船着き場は筆者加筆

実際に六浦津がどの程度の規模と施設を持つ港であったかは定かではない。『吾妻鏡』には 1224（元仁元）年に当時の鎌倉幕府の執権北条泰時が、伝染病の厄払いのために四角四境祭を行ったという記事が残されている。これは将軍御所四隅（四角）と都市鎌倉とその外界を隔てる境界域（四境）で悪疫を祓い、将軍家と鎌倉の安泰を願う祭祀である。その際に鎌倉の町境として選ばれたのが山内（鎌倉市山ノ内）・小坪（逗子市小坪）・稲村（鎌倉市稲

村ケ崎）・六浦であった。当時はまだ六浦郷と金沢郷を結ぶ瀬戸橋が架けられていなかったので、おそらく六浦郷の中心部である瀬戸周辺までが鎌倉の一部として認識されていたのだろう。

鎌倉への物資の輸送には六浦津の他に和賀江島の二つの湊があった。和賀江島は太平洋を航行する船が着岸する湊、六浦津は房総半島さらには東京湾へ流れ込む利根川・荒川・入間川などの大河川を通じて関東平野の奥、東北地方からもたらされる物資を輸送する船を受け入れる湊としての機能が分担されていた。六浦津の正確な位置は様々な推測がされており特定することは難しいが、称名寺が建立される以前までは広い意味での瀬戸辺りが六浦津として主要な港であり、北条実時が金沢郷へ館を移し、貞顕が瀬戸橋を架けて六浦郷と金沢郷が結ばれて以降は、平潟湾と瀬戸入海の大小様々な渡船場を総称して六浦津としたのではないかと思われる。ウォルフ極氷期（1280～1340 年）の影響を受けて始まった小氷期（1294～1900 年）に入り海面が低下すると瀬戸入海は港として使いにくくなり、大型船は野島か瀬ケ崎に着岸し、瀬戸入海へは小型船に乗り換えるなど船の規模によって使われる港が分けられていたと考えられる。称名寺への物資は小型船を使って瀬戸を通り寺前八幡社の前に着岸してから運び込まれていたのであろう。

称名寺には六浦津で中国との貿易が行われていたことを証明する文書や伝来品が多数残されている。金沢北条氏の四代目・貞顕はとくに唐物に対して高い関心を持っていたようで、六波羅探題として在京していた際に称名寺長老剣阿に宛てて、元に派遣した唐船が無事帰還したことを喜んで報告した書状や、父・三代目顕時の骨壺に中国製の青磁器（元は酒を入れる壺とみられる）が使われていたりと、唐物に対する愛着も窺い知ることが出来る。当時、鎌倉大仏などの寺社の造営用途が貿易船の利潤によって賄われる状態は勧進と同一とみなされており、人々に負担を賦課するよりは負担を軽減することも出来るという発想もあったことから（国立歴史民俗博物館，2005）、中国との貿易に対する幕府の関心も高かったものと思われる。

中国との貿易では焼き物の他に、木製の仏像や宋版一切経（宋で印刷された、仏教の経典を百科事典のように集めて一セットにしたもの）、仏画や墨など多種多様な輸入品が取引されていた。これらの品物は中国・浙江省の寧波から東シナ海を越えて九州は博多に入り、瀬戸内海を通って紀伊半島を抜け、和賀江や六浦津にもたらされたとするルートが有力である。

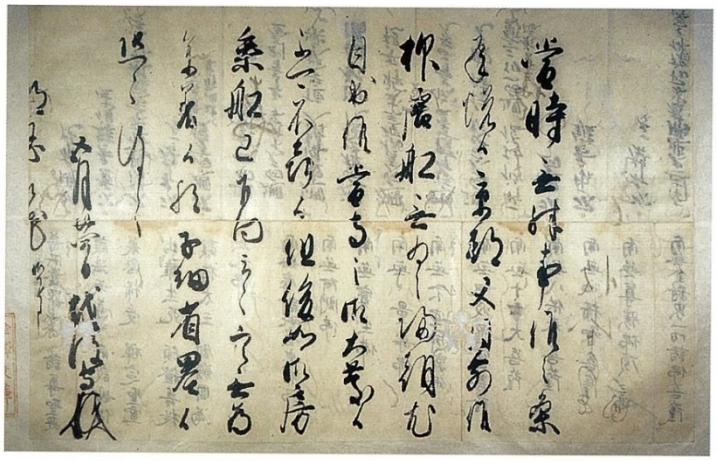


図 3-19　金沢貞顕書状 1306 年頃 称名寺蔵 （国立歴史民俗博物館，2005）

図 3-20　観音菩薩半跏像（滝見観音　横須賀・清雲寺）
（神奈川県立金沢文庫，2000）

港湾都市としての六浦の重要性について、網野（2007）は非常に興味深い考察を行っている。網野は金沢北条氏が鎮西探題就任に触れ、「六浦を根拠として上総介という官途を持ち、伊勢・志摩という東海道の海の拠点の国の守護を押さえ、瀬戸内海航路の入り口を扼する周防・長門の守護であり、さらに豊前から鎮西探題として博多を掌握し、さらに海の民の国ともいうべき肥前に手をのばしている金沢氏の鎌倉時代の後期における立場から、まさしく九州から六浦・上総に至る海上の道を掌握しようとする意図が、そこに透けて見えるといってもいい過ぎではない」（網野，2007）という考えを示している。唐物の伝来ルートや、鎮西探題としての顔を持つ金沢北条氏という史実から、房総や東北だけでなく、紀伊半島や瀬戸内海、果ては九州を越えて中国とも繋がる六浦は、鎌倉幕府の外交の拠点として非常に重要港湾都市として栄華を極めた。結局、鎌倉幕府の滅亡により北条氏も没落し、室町～戦国時代にかけては三浦半島を中心とした合戦の上陸地として軍記などに登場するものの、港湾都市としてはほとんど機能していない凡庸な港町と変貌を遂げていくのである。

図 3-21　宋版一切経 称名寺蔵
（金沢区制五十周年記念事業実行委員会，2001）

3.2.5　中世の六浦庄の人々の暮らし

六浦津では港湾都市として海と関わる様々な産業が発展した。特に重要であったのは鎌倉に住む領主のもとに年貢を届ける陸揚湊としての役割である。12 世紀中頃までの荘園では、毎年定められた量の米・絹・特産物などを年貢として領主のもとへ届けていた。鎌倉時代になると京都のほかに武士の住む鎌倉にも年貢納めなければならなくなった。しかし、鎌倉時代初期に年貢は納められる時期までに量が揃っていればわざわざ領主のもとまで運ばなくても良いとする京済（納入地決済）が行われるようになると、都市近郊型の商業都市が各地にみられるようになる。京都周辺には淀や大湊、鎌倉では六浦津や和賀江島がそれにあたる。鎌倉時代も中頃になると為替による年貢納入が可能になり、船で現物や貨幣などを運ぶ場合、

途中の国府や湊で開かれる市場で売買を繰り返しながら目的地へと向かった。こうした年貢京済と貨幣制度の発達により六浦津は鎌倉へ納める年貢を揃える最終の市場として発展していったのである（神奈川県立金沢文庫，2000）。六浦津には、船主（船を航行させる人）・問丸（港湾荷役や輸送など物流面の総称）・為替（決済や送金といった金融部門）がいたことが確認されていることからも、港湾都市としての基本機能が備わっていたことを示している（神奈川県立金沢文庫，2009）。

室町時代には富岡は鎌倉公方の家臣大草氏に台所料所として預けられていた。大草氏は鎌倉府に必要な食料を管理する台所を担っており、富岡から鎌倉へ海産物を輸送していたと考えられる。また、称名寺の寺領である洲崎や町屋には塩垂場がつくられ鎌倉や六浦津で売買される換金性の高い商品の一つであった（神奈川県立金沢文庫，2000）。他にも六浦にも塩田があり、室町時代後期には鎌倉の明月院の管理下にあった。また、称名寺領の町屋はその名の通り商店が立ち並ぶ場所であったと思われる。

図 3-22　釼阿書状 鎌倉時代（神奈川県立金沢文庫，2000）

関靖は『かねさは物語』（関,1984）の中で金沢の地名について、鎌倉へ供給するための農具類を製作する鍛冶匠が住んでいたことからこの地が「かねさハ」と呼ばれるようになったこと由来すると述べている。このことから、六浦庄には鍛冶匠のような職人が多数いたのではと推測される。

不思議なことに、中世の六浦庄には漁業の記録はほとんど残されていない。北条実時によって瀬戸入海の殺生禁断令が出されたが、平潟湾内や東京湾まで行けば漁獲は可能であったはずである。鎌倉時代に称名寺長老釼阿の手紙に「野島磯海苔」を伝えるものはあるが（図3-22）、特産品として扱うことは出来ても流通の状況まで推測するのは難しい。いずれにしても六浦庄での漁業の痕跡が見られるのは、江戸時代に入ってからのことである（神奈川県立金沢文庫，2000）。

3.3　近世の金沢

3.3.1　江戸時代の旅の概念の変化

近世宗教史と中世宗教史の決定的な違いの一つに寺社参詣の大衆化がある。江戸幕府は庶民の移動を厳しく制限していたが、信仰のために霊地をめぐる寺社参詣に対しては簡単に許可した（原,2013）。彼らの旅は中世のように、一部の職能人や知識階級が各地を漂白するようなものではなく、中世末より次第に定住化がすすむことで一つの文化として見出された新しい概念の「旅」であった。「旅」の発展には民衆の生活レベルの上昇、交通環境の整備、御師・宿坊の発達、参詣講の発展が挙げられるが、とくに重要であったのは情報文化の発達である。名所記、名所案内記類、旅を題材とした滑稽本、絵図などによって日本全国の観光名所の情報が手に入るようになり、人々はまだ見ぬ憧れの地に思いを馳せた。

図 3-23　東海道五十三次細見図会
（国立国会図書館デジタルコレクション）

近世は非常に多くの地誌が編纂された時代でもある。地誌とは、「ある特定の地域を対象に自然、地形、歴史などさまざまな要素をもとにその地域性を述べたもの」（原、2013）である。知識階級にとっては、その土地の詳細な情報を得るためには地誌がなければ歌集や歴史書などを読破し断片的に情報を得るしかなく、地誌のように特定の地域に特化した情報誌は重宝されたものと思われる（原,2013）。

3.3.2　景勝地から観光地へ

江戸時代になると金沢領として再編されていた六浦・金沢周辺は江戸幕府直轄の天領となり、代官所は金沢八幡社近くに置かれたと伝えられている。1722（享保７）年、徳川氏の旗本であり下野国都賀郡皆川（栃木県栃木市）に陣屋を構えていた米倉保教が、武州金沢藩（六浦藩）藩主として陣屋を皆川から瀬戸に移し、米倉氏の多くの家臣たちも瀬戸へ移り住んだ。武士が常駐するようになった瀬戸は治安が良くなり、流通の拠点として復興していった（神

奈川県立金沢文庫、2000）。なお、藩の名称については当初は武州金沢藩としていたが、加賀の金沢藩との差別化を図るために六浦藩することもあるが、正式には明治維新後の版籍奉還で六浦藩となった（内田、1987）。以下では「金沢藩」とは「武州金沢藩」のこととする。

さて、“金沢八景”の由来については『2.2　“金沢八景”とは』で述べているとおり、徳川光圀によって招聘された明の亡命層東皐心越が詠んだ八景の漢詩によってどの地を“金沢八景”とするかおおよその位置が定まったとするのが定説であるが、これを証明する文献史料はない。“金沢八景”の比定については後に述べるとして、“金沢八景”が最初に登場する文献は三浦浄心の『順礼物語（名所和歌物語）』である。心越が八景の漢詩を詠んだとされるのが1694（元禄７）年とされているので、多少の開きはあるものの、江戸時代初期には“金沢八景”のある地として金沢（あるいは六浦）の名は知られるようになっていたと思われる。

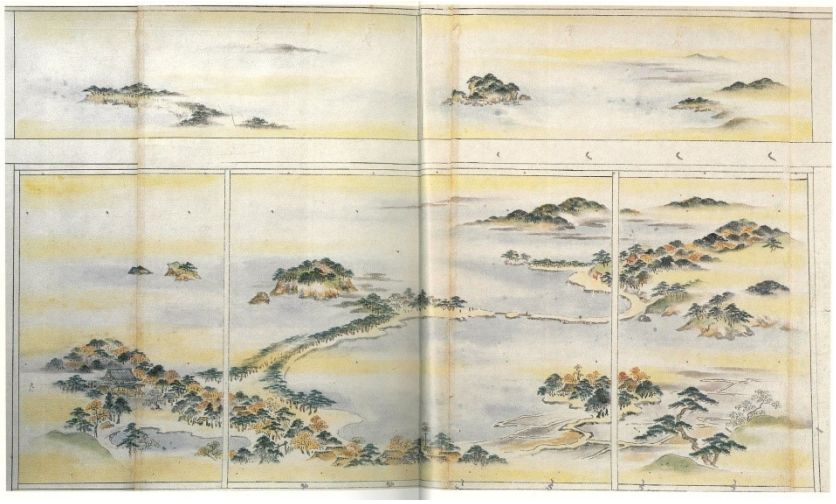


図 3-24　本丸御殿〔中奥・休息の間・上段の間〕
（神奈川県立金沢文庫, 1993）

前田（1986）は武州金沢の地を遊覧の地として有名にしたのはかの徳川家康ではなかったかとしている。家康は1600（慶長５）年の上杉討伐に行くときに金沢に立ち寄っていて、その際におそらく称名寺に宿泊したのではないかと推測される。家康はその後江戸城内に富士見文庫を設け金沢文庫所蔵の資料を取り寄せ、さらに江戸城内の襖絵には金沢の風景を描いた「金沢の間」を設けていたことも明らかになった（図3-24）。「金沢の間」を見た各大名、とくに西側大名は金沢を一目見てみたいと非常に興味を持ったであろう。参勤交代のため江戸を訪れた帰り道、事前に届け出ていたコースでは保土ヶ谷宿から真っすぐ藤沢へ向かうところ、密かに自分は金沢道へ入って金沢、鎌倉、江ノ島を遊覧した後、藤沢から再び隊列に合流するという手法をとって金沢の地を訪れていた（前田、1986）。

参勤交代で江戸を訪れた大名たちによる金沢遊覧の流行や、1659（万治２）年刊『鎌倉物語』（中川, 1979）、1685（貞享２）年刊『新編鎌倉志』（河井〔執筆〕, 2003）、正徳元（1711）年にはじまる度々の『鎌倉名所記』（出版者，出版年不明）の出版などの名所案内書による“金沢八景”の江戸市民への周知にもかかわらず、江戸時代初期の金沢には遊覧者の受け入れ態勢はほとんど整っていなかったことが、金沢を訪れた旅人の道中日記からもうかがえる。『鎌倉物語』では、“金沢八景”を見るのであれば江戸の旅行者は保土ヶ谷宿から金沢道を抜け鎌倉に至り、江ノ島を見て藤沢から江戸に帰るコースが記されている。なぜ

このようなコースが出来たかというと、当時の金沢には旅籠屋、つまり旅行者が泊まるための場所がほとんどなかったのである。数々の紀行文からも、その閑散とした様子がみて取れる。米倉氏が陣屋を構え、金沢藩の中心地であった瀬戸橋周辺には宿泊できるような旅籠屋はなく、旅人は町屋村や六浦の名主の家に宿泊していた（前田, 1968）。

この頃の金沢の中心地は米倉氏の陣屋が置かれた瀬戸であった。金沢に度々訪れていたとされる十方庵敬順の紀行文『十方庵遊歴雑記』（神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会, 3969）によれば、彼が13歳の頃（1772・安永２年）に母親と一緒に金沢の地を訪れた時には４、５軒ほどだった料理茶屋が、50余年後の1821（文政４）年には20余件と約５倍にまで増えたという。金沢を代表する茶店と言えば瀬戸橋近くの東屋、千代本、扇屋などがあるが、十方庵敬順は1814（文化11）年頃迄は、たいした造作もなく、給仕が２人ほどの普通の茶店であったと記している（前田, 1968）。僅か７、８年の間にこれほどまでに茶店が増えたのには、江戸庶民の人気の観光コースであった大山詣の流行がピークを迎えたことが要因の一つと考えられる。『増訂武江年表』には、1749（寛延２）年以降、1857（安政４）年まで江戸市民の江ノ島弁財天開帳参詣が多かったことを報じている。落語の『大山詣り』にあるように、鎌倉・江ノ島、金沢を巡るコースは、行程や資金の手軽さから江戸市民に非常に人気の高いコースであり、それに比例して金沢も活気が見られるようになった。しかし、たった数年で賑わいを見せる金沢の繁昌が大山詣にのみ起因するとは考えられない。1810（文化７）年から1828（文政11）年にわたって編纂された『新編武蔵風土紀稿』によれば、金沢町屋村の項で金沢遊覧者が瀬戸橋周辺にも劣らない活気があったことを伝えている。このことから、町屋村が金沢の宿駅の中心地であったのではないか（前田, 1968）、と推測される。町屋村が宿駅となった正確な時期は不明だが、しかし『新編武蔵風土紀稿』には「…近き頃より当村（町屋村）を宿駅に定め、…」とあることから、おそらく19世紀の初めには町屋村が宿駅と認識されていたのであろう。ここではじめて町屋村に旅籠屋や出現してくる。東屋をはじめとした瀬戸橋周辺の旅亭がいくら豪勢な様相をみせようと、旅籠屋といわず旅亭といったのは、この地が駅場ではなかったからである。では、なぜ町屋村が宿駅となったのか。その要因を、前田（1968）は黒船襲来に伴う三浦半島沿岸防備に関係しているのでは、と分析している。

辻善之助の『大日本年表』（1942）によれば、1793（寛政５）年、1808（文化５）年、1810（文化７）年と幕府による三浦半島の沿岸防備が開始される。そしてついに1853（嘉永６）年、アメリカ東インド中国艦隊司令長官ペリー提督率いる４隻の艦隊が浦賀沖に姿を見せる。このいわゆる「黒船騒動」で会津藩や彦根藩が海岸防備を命ぜられ、三浦半島に配置されたが、その中継基地として町屋村に旅籠屋ができた。それが人々の目に留まり、金沢遊覧のために金沢を訪れた旅行者のための泊まり場所になったのだ。宿泊所が出来ることで、これまでの遊覧コースが変わって、これまで保土ヶ谷宿→金沢→鎌倉・江ノ島→藤沢→江戸となっていたコースが、保土ヶ谷宿から金沢ではなく藤沢へ向かう保土ヶ谷宿→藤沢→鎌倉・江ノ島→金沢→江戸というルートに変わっていった。なぜそのように遊覧コースが変わっていっ

たのかと言えば、金沢の地が精進落としの地として適正を備えた場所であったからである。

寺社参詣・物見遊山の徒にとって、精進潔斎しての参拝が終われば現世に戻るための精進落としの場所が欲しくなるのは、今も昔も変わらないだろう。しかし、江ノ島は弁財天を祀る浄域で、古来より聖地として旅籠屋に酌婦や遊び女を入れることを禁じられており、また鎌倉は古刹名跡の地とはいえ遊興の地としては今一つ雰囲気に欠ける所がある。金沢に旅籠屋が出来る以前は、藤沢が精進落としの地であった。こうして江戸末期の文化文政の時代には、精進落としを兼ねて東屋や千代本でおいしい料理を食べ潮干狩りをし、夜が更ければ千代本から金龍院のあたりにかけて、海岸縁の赤提灯が並ぶ茶店で酌婦とどんちゃん騒ぎをして江戸に帰るという新たな観光ルートが誕生し、金沢は“金沢八景”の地としての繁栄を極めた（前田, 1986）。1836（天保７）年に刊行された『江戸名所図会』にある金沢の貢は、遊覧地として金沢が最も栄華を極めた頃のものであろう。

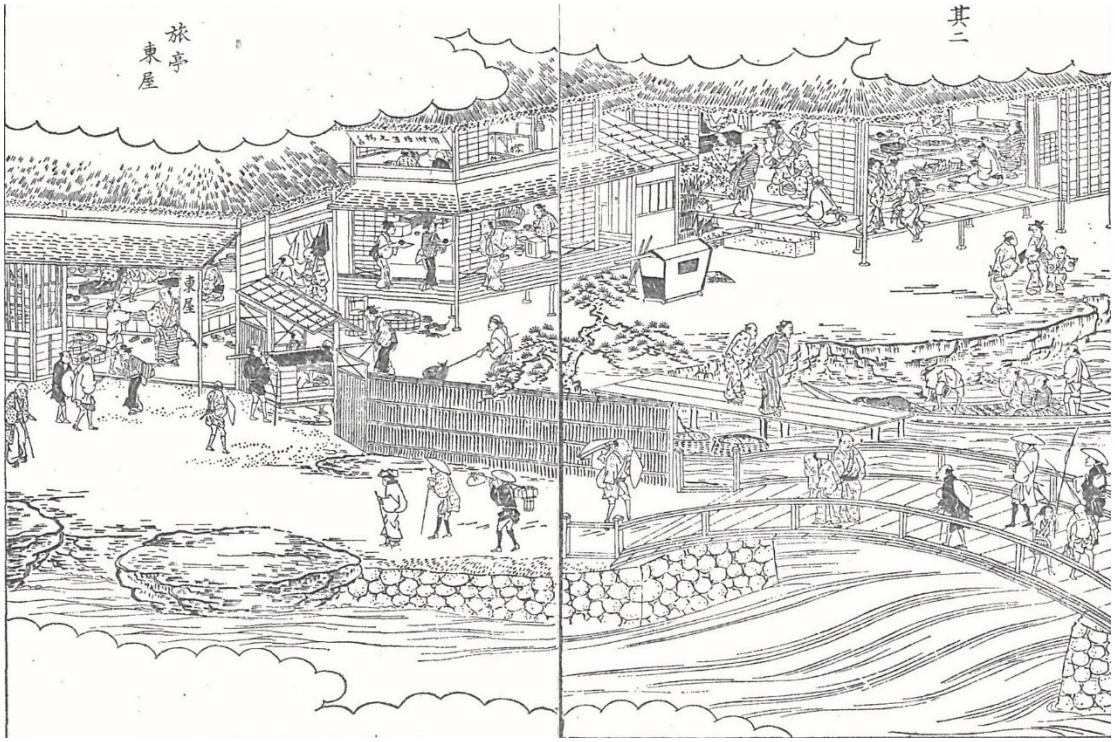


図 3-25　東屋　（『江戸名所図会』, 1967 年）

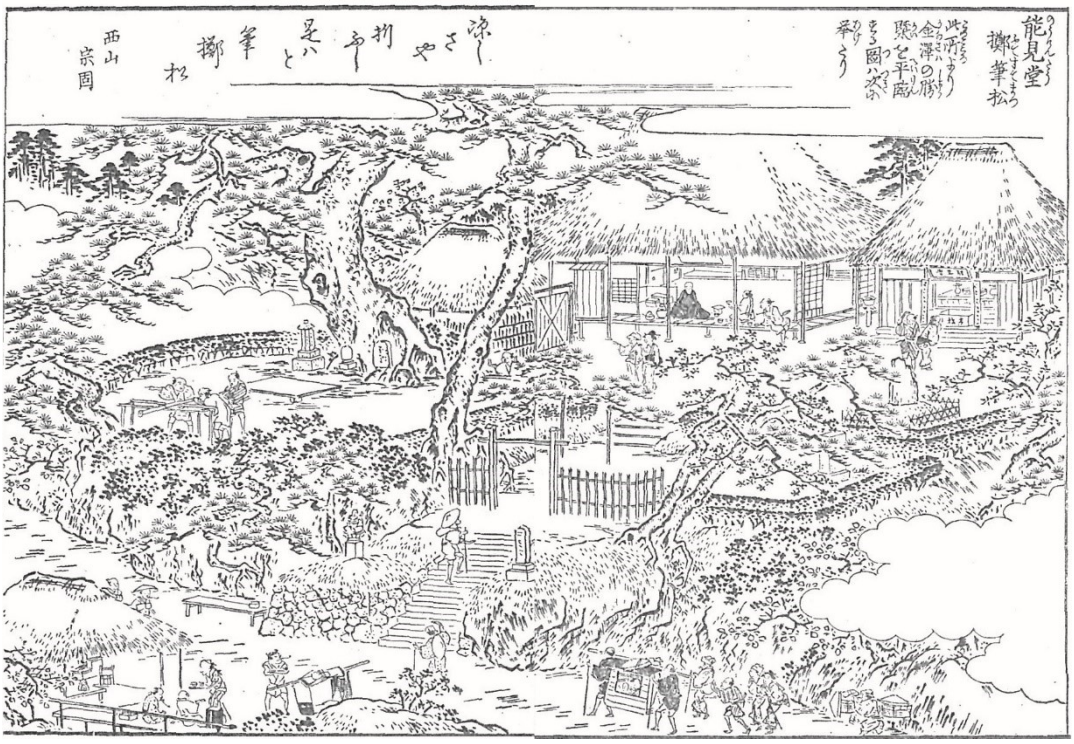


図 3-26　能見堂捨筆松（『江戸名所図会』, 1967 年）

3.3.3　“金沢八景”をめぐる出版闘争

“金沢八景”の名所構造は瀬戸橋を挟んだ二つの入り江を中心に成り立っており、瀬戸周辺には東屋・千代本・扇屋という茶店が並び、八景遊覧の船も出ていた。この入り江の最北端にあるのが能見堂、瀬戸よりやや南へ進んだ西端の小高い山にあるのが金龍院であった（原, 2013）。能見堂は保土ヶ谷宿を蒔田→上大岡→中里→能見堂→称名寺→瀬戸→朝比奈→鎌倉へと抜ける「金沢道」の中途の休憩地点にあり、能見堂からは平潟湾が一望出来た。寛文の頃（1661～72年）に地頭の久世大和守広之が江戸の増上寺から子院を移し、地蔵菩薩を本尊として再興した地蔵院である。金龍院は号を昇天山とし、臨済宗鎌倉建長寺末であった。創建は不明だが、中世末頃か、それ以前と言われている。本堂裏にある山の頂は九覧亭と呼ばれる、見晴らしの良い場所であった。“金沢八景”をみるにはこの能見堂か金龍院のほかに、平潟湾の南端室の木にあった四望亭（一覧亭）も眺望の大変素晴らしい場所であったが、19世紀に入り金龍院が出版活動など通じて宣伝を始めるまでは、金沢で最も眺望の良い場所と認識されていたという（原, 2013）。“金沢八景”を比定する動きは先にも述べたように、1614年に発行された三浦浄心の『名所和歌物語』が最も古いとされるが、近世初期まではさまざまな書物等で“金沢八景”として名は挙がっても、正確な位置を定めるに至らなかった。その後“金沢八景”の地を固定化したのは明僧東皐心越とされているが、原(2013)はこの説は能見堂と金龍院の熾烈な “金沢八景”をめぐる権力争いによって生まれたもの

であると指摘している。原（2013）は心越起源説を唱えたのは18世紀以降、八景詩歌・八景縁起などの出版活動に乗り出した能見堂によるものとしている。原（2013）は一方で、心越説とは別近世末まで根強く生き続けた説があるという。それが新編鎌倉志説である。「『新編鎌倉志』は藩主徳川光圀自ら鎌倉へはいり現地調査した上（『鎌倉日記』）、その後数年調査を重ね、過去の文献を多量に収集し編纂したもので、当時としては実証的な手続きを踏んだものである。“金沢八景”についても、決してひとつに断定することなく、『鎌倉名所物語』など当時既刊の書物の収集、実地調査をへて、その中で候補となっていた場所を

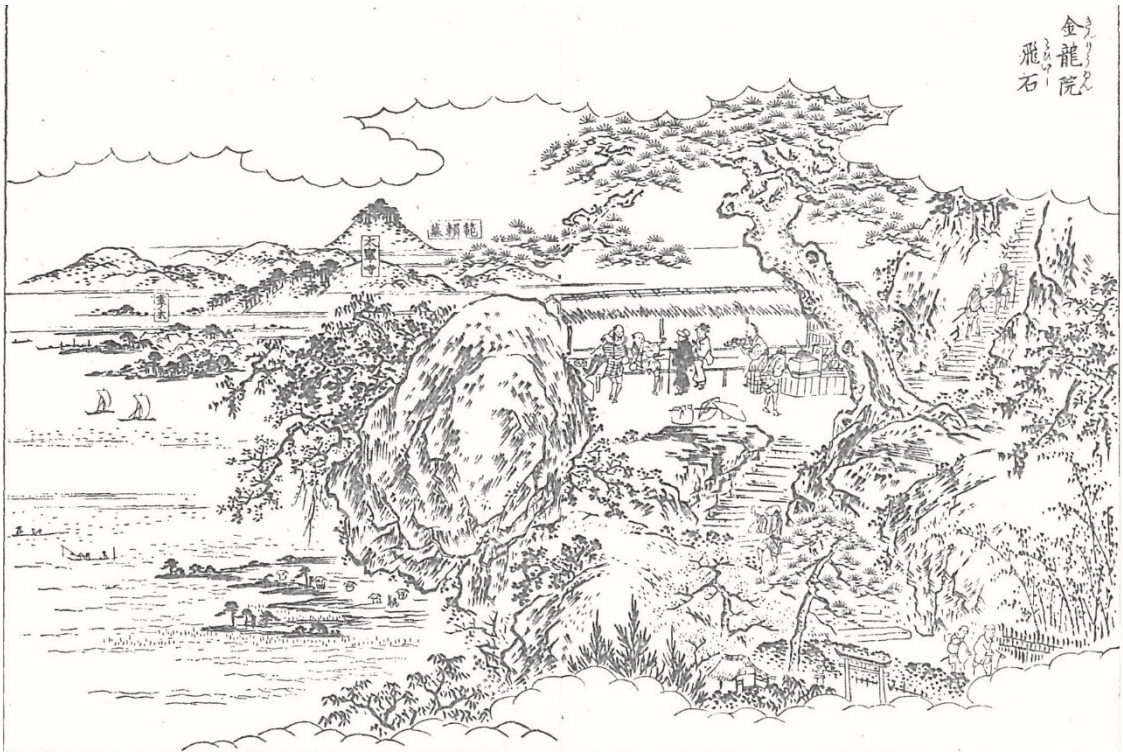


図 3-27　金龍院飛石（『江戸名所図会』, 1967 年）

すべて租借・選別した上で編纂がなされている」（原, 2013）。新編鎌倉志説が長く残ったのには、膨大な文献収集とフィールドワークに裏打ちされた信頼感があったこと、もう一つに中世以降の中国趣味の残骸とそれへの対抗意識があった。しかし、知識階級に根強く残る中国崇拝はとくに無用の長物を重んじる文人界へ影響を色濃く残しており、次第に心越説が既定路線として受容されていったと思われる（原, 2013）。

“金沢八景”の縁起や場所が定まりつつある中で、原（2013）はさらに“金沢八景”に関する在地出版は、次の四つの時期に区分できるとしている。

第一期（明暦・万治期）：鎌倉絵図が京・江戸より出版された。当時の金沢は『新編鎌倉志』において江ノ島とともに鎌倉の一部として掲載されていたことから、鎌倉・江ノ島と共にひとまとまりの地域と認識されていた。

第二期（寛文期以降）：鎌倉絵図の出版が京・江戸から在地出版に移行した。万治・寛文期には、金沢絵図も刊行されはじめ、雪ノ下の富田版のように鎌倉出版元によるものもあった。

第三期（享保期）：金沢絵図・縁起・八景詩歌が金沢の版元（主に能見堂）から出版される。

第四期（天保期）：金龍院は歌川広重、能見堂は金幸堂と、それぞれ江戸書肆・江戸絵師との接近をみせ、同時に在地とは無関係の江戸資本が参入し、江戸独自の金沢八景絵図がさかんに出版される。

ここで金龍院、能見堂、江戸を版元とした出版活動を下記に整理する（原，2013）。

■金龍院版元

出版物

①米倉藩伊藤景山（旭松堂）『金沢名所杖』（文政 6 年）唐僧瑩玉詩、藤原為相卿歌

②『西湖八景詩歌』（19 世紀前半）南宋瑩玉詩、冷泉中納言為相卿歌

③室木村小上馬氏『金沢八景詩歌』（年代不明）相模国戒珠庵慧光道士詩、武蔵国豪徳寺東流禅師歌

④『金沢金石録』（年代不明）

絵図

①『里俗相傳而西湖之八詠在金沢云其景光如図』（文化初頭、単色、瀬戸版あり）

②馬坰『金沢八景之図』（文化 11 年、単色）（別に嘉永 3 年の単色刷の着色図あり）

③歌川広重作『金沢八勝図』（天保期、甲乙本あり）

④多気斉原画カ、歌川広重画『金沢飛石金龍院山上八景眺望之図』（年代不明）

⑤歌川広重作『西湖之八景武之金沢模写図』（年代不明）

⑥多気斉原画、歌川広重画『武陽金沢八景略図』（嘉永 4～安政 6 年）（昭和まで使用）

⑦島田南谷『武昌金沢八景之図』（安政頃、単色）

■能見堂版元

出版物

①『金沢八景詩歌案内子』（心越禅師詩、京極高門歌）（天明 4 年再刻、天保 12 年再々刻）

②『金沢能見堂八景縁記』（天明年間、天保年間の再刻あり）

絵図

③『八景安見図』（享保 16 年～）・『武州金沢擲筆山地蔵院能見堂八景之画図』（天明元年～嘉永 5 年）（天明元年・高倉宗寿画、天保 7 年・江戸歌川国宜、嘉永 5 年・歌川重宜）（単色、室の木から見た構図）

④『武州金沢能見堂八景之画図』（元治元年再版、一川芳員画）（多色刷、室の木から見た構図）

■江戸版元

絵図

①諸国名所記・武陽金沢一覧山（天保中期）……室ノ木から見た構図

②大錦判「金沢八景」（天保 7 年頃）大横八枚揃

③本朝名所・武州金沢風景（天保 9・10 年）……能見堂筆捨松から見た構図（瀬戸橋・野島）

④小版「金沢八景」（天保末～嘉永期）

⑤金沢八景之図（嘉永期）……能見堂方面から見た構図（瀬戸橋・野島）

⑥金沢（嘉永期）……能見堂方面から見た構図（瀬戸橋・野島）

⑦武相名所旅絵日記・武相名所手鑑・金沢八景（嘉永 6 年）……能見堂から見た構図（瀬戸橋・野島）

⑧武陽金沢八勝夜景（安政 4 年、蔦屋）、大判三枚続……能見堂方面から見た構図（瀬戸橋・野島）

⑨諸国名所図会・武蔵金沢（安政初期）……瀬戸から野島・九覧亭を望む構図

⑩諸国名所・武州金沢八景……能見堂方面から見た構図（瀬戸橋・野島）

こうした出版活動は、鎌倉・江ノ島・金沢をまわる寺社参詣の流行もピークを迎える江戸時代末期にかけて盛んになった。鎌倉-金沢の参詣形態が維持される一方、金龍院や能見堂などの寺社が個別に行った宣伝活動により、それぞれが江戸との結び付きを強め、江戸資本独自の金沢八景図も生み出した。初代歌川広重は多くの金沢八景図を残しているが、実際に彼が金沢の地を訪れそれらの絵を描いたかどうかの確証はない。ともすれば、江戸が版元の絵図はほとんどが広重の影響によるもので、現実には存在しない（あるいは既に失われた）景観であったかもしれない。

表 3-1　金沢八景と浮世絵版画　（鈴木，1999）

	題　　名	年　代	絵　師	版　元	形　状
1	金沢八景　小泉夜雨　三	延享頃	西村重長	江見屋版	大短冊縦１枚
2	浮世絵源頼朝公金沢遊覧之図	享和頃	雪　嵩	山田屋版	大錦横１枚
3	西湖之八景武之金沢模写図	文政頃	二代　重政		大錦２枚掛
4	西湖之八景武之金沢模写図〈後摺〉	文政頃	二代　重政		大錦２枚掛
5	金沢八景　内川暮雪	天保	初代　広重	越平版	大錦横１枚
6	金沢八景　小泉夜雨	天保	初代　広重	越平版	大錦横１枚
7	金沢八景　瀬戸秋月	天保	初代　広重	越平版	大錦横１枚
8	金沢八景　野島夕照	天保	初代　広重	越平版	大錦横１枚
9	金沢八景　称名晩鐘	天保	初代　広重	越平版	大錦横１枚
10	金沢八景　州崎晴嵐	天保	初代　広重	越平版	大錦横１枚
11	金沢八景　乙艫帰帆	天保	初代　広重	越平版	大錦横１枚
12	金沢八景　平潟落雁	天保	初代　広重	越平版	大錦横１枚
13	金沢帰帆　従瀬戸橋野島之図	天保初期	二代　豊国	伊勢利版	大錦横１枚
14	武陽金沢八勝夜景	安政４年	初代　広重	蔦屋版	大錦３枚続
	三番続金沢八景之内				
15	平潟落雁　州崎青嵐　乙艫帰帆	天保６・７年	初代　広重		団扇絵１枚
16	諸国名所記　武陽金沢一覧山	天保中期	初代　広重	山口屋版	半切横１枚
17	乙艫の帰帆之図	天保	貞秀		団扇絵１枚
18	日本八景づくしの内　武州金沢八景	天保末期	貞秀	山口屋版	大錦３枚続
19	野島夕照之図	天保末期	貞秀		団扇絵１枚
20	州崎晴嵐之図	天保末期	貞秀		団扇絵１枚
21	金沢八景　内川暮雪	弘化頃	初代　広重		八ッ切横１枚
22	金沢八景　小泉夜雨	弘化頃	初代　広重		八ッ切横１枚
23	金沢八景　瀬戸秋月	弘化頃	初代　広重		八ッ切横１枚
24	金沢八景　野島夕照	弘化頃	初代　広重		八ッ切横１枚
25	金沢八景　称名晩鐘	弘化頃	初代　広重		八ッ切横１枚
26	金沢八景　州崎晴嵐	弘化頃	初代　広重		八ッ切横１枚
27	金沢八景　乙艫帰帆	弘化頃	初代　広重		八ッ切横１枚
28	金沢八景　平潟落雁	弘化頃	初代　広重		八ッ切横１枚
29	金沢八景　内川暮雪	弘化頃	初代　広重		四ッ切横１枚
30	金沢八景　小泉夜雨	弘化頃	初代　広重		四ッ切横１枚
31	金沢八景　瀬戸秋月	弘化頃	初代　広重		四ッ切横１枚
32	金沢八景　野島夕照	弘化頃	初代　広重		四ッ切横１枚
33	金沢八景　称名晩鐘	弘化頃	初代　広重		四ッ切横１枚
34	金沢八景　州崎晴嵐	弘化頃	初代　広重		四ッ切横１枚
35	金沢八景　乙艫帰帆	弘化頃	初代　広重		四ッ切横１枚
36	金沢八景　平潟落雁	弘化頃	初代　広重		四ッ切横１枚
37	金沢八景全図	弘化２・３年	（無款）		半切縦１枚
38	武陽金沢八景略図	嘉永	初代　広重	金竜院蔵版	大錦２枚掛
39	金沢八景之図	嘉永	初代　広重		菓子袋１枚
40	金沢	嘉永	初代　広重		半切縦１枚
41	諸国名所図会　武蔵金沢	安政初期	初代　広重	伊勢惣版	団扇絵１枚
42	武州金沢名所一覧之図	安政５年	三代　豊国	山田屋版	大錦３枚続
43	諸国六十八景　武州金沢	文久２年	二代　広重	蔦吉版	半切縦１枚

3.3.4　永島泥亀による新田開発

近世初期には多くの新田開発が始まった。家光の時代の大飢饉、家綱就任後の佐倉宗五郎一揆、1660（万治３）年の諸国風冷害などにより、安定した年貢米確保が難しくなり、当時幕府は開発奨励策として鍬下年期（２、３年から７、８年の間無年貢）を設けるなど、開発に苦心していた（永島，2015）。金沢では17世紀末頃から新田開発が行われた。開発の先導は切ったのは江戸の湯島聖堂の儒官・永島裕伯であった。裕伯の父・長島徳元は京で医業をしていた両親の跡を継ぎつつ､江戸の将軍家の重臣の家を出入りし往診などもしていたとみられる（永島，2015）。徳元は諸大名から藩医として仕えるよう懇請されてきたが、あくまで自立した医者として士官を固辞してきた。幼年から懇意にしていた酒井忠清はとくに思い入れが深く、1663～1664（寛文３～４）年の頃、還暦を迎えた徳元の隠居地として、領地に近い六浦近郊の地の提供を推挙した。これを快く受けた徳元は裕伯を連れ武州金沢の地を訪れ、野島山の麓にその居を定めた（永島，2015）。徳元は金沢の荒れ地の状況と近在の百姓たちとの交流を通じて、忠清への報恩のため、周辺地の開拓と新田造成の意思を伝えた。これを実行したのが儒官として仕えていた息子・裕伯であった。果たして1664（寛文４）年、裕伯は士官を捨てて忠清より与えられた金沢の地に老父・徳元と共に入り、同地での父の新田開発の意向を受け継ぎ、実行に移す。裕伯40歳の頃のことである（永島，2015）。

1666（寛文６）年前後のこと、忠清は当時の金沢の領主久世広之に了解を取り、いよいよ新田開発は開始された。最初に着手されたのは走川（現在の寺前一丁目の一部）と平潟湾の一部であった。土地の選択にあたっては、名主か有力な百姓の助言があったと永島（2015）は指摘している（「裕伯金沢に住し、初め近隣地船越に於いて新田を拓き、ついでその地鹹土多きを見て平潟湾及び走川の二所を相して開発し」〈赤星直忠「永島泥亀とその子孫『金沢文庫古文書、永島家文書』解説」〉）。船越とは追浜から南下した長浦港の沿岸にある村だが、地理的に野島山に構えた居宅に近い走川・平潟の開発を優先していった（永島，2015）。こうして永島裕伯が最初に開拓した新田は彼の号をとって「泥亀新田」と総称され、1668（寛文８）年に完成する。なお、本項では走川新田および平潟新田を「泥亀古新田」と総称する。

泥亀古新田完成から12年後の1680（延宝８）年、台風によって走川・平潟の新田の二汐除堤が破壊された。しかし、裕伯以下一族の健闘の結果短期で修復し、当地での地盤を着実に築いていった。その後の新田の開拓は、裕伯の孫にあたる金七郎正仁に委ねられた。1703（元禄16）年、房総半島南部、相模湾を含む相模トラフ沿いの大地震（関東大地震）が発生し、江戸湾口から乙舳・野島浦を越えて平潟湾を襲った津波により、再び泥亀古新田は壊滅状態となった。元禄地震から４年後の1707（宝永４）年、東海・関西・四国・九州を席巻した宝永大地震が発生。余震が続くさなかわずか１カ月後には富士山が噴火し、季節風にのって金沢の地まで火山灰が降り注ぎ、多くの被害が発生した。永島家の四代目

金七郎と五代目元義の手によって泥亀新田の復興に力が注がれたが、その生計の基盤となったのは平潟湾で作られる塩の収穫であった。平潟湾での塩業については中世から記録がある。金沢周辺の村々はその生活のある程度を塩生産へ依存しており、『新編武蔵風土記稿』によると、とくに寺前村や町屋村などは塩焼き・薪伐を「生活の糧」としていた（金沢区制五十周年記念事業実行委員会、2001）。裕伯の新田開発の際には地元の有力地主や百姓など、海に面した地理的条件や昔からの経験に即した教示・指導によって、米生産よりむしろ製塩業を主眼とした開発が行われた（永島，2015）。

金七郎・元義の死後、泥亀古新田再興および内川入江の干拓計画は元義の後妻の子、嗣子豊亀と弟成郷に委ねられた。彼らの金沢の新田開発推進は、裕伯の血筋の交代の節目ともなった。彼らは1743（寛保３）に年塩除堤の普請（修理）、1766（明和３）年に石垣の普請を行った。さらに、大雨による防潮堤の決壊から再興を果たした吉田新田（現在の横浜市中区伊勢佐木町界隈）の資料や当時の最先端の土木・工学技術の情報を集結し、新田開発および水門の設計計画書を提出した。こうして1779（安永８）年、ようやく内川入江の干拓が開始され、７年の歳月をかけて完成した。この新田は1785（天明５）年、「金沢入江新田」と命名された。ところが翌年の７月、関東全域を襲った暴風雨による洪水で金沢入江新田が冠水、「数年の丹精一朝水泡に帰して」（神奈川県立金沢文庫，1960）しまった。ようやく水の引いた翌年1787（天明７）年から、金沢入江新田の復興計画が始まる（永島，2015）。

1791（寛政３）年、江戸湾を直撃上陸した台風による高潮で入江水門を破壊、新田囲い・塩除堤などを流出し、もはや再興の策もないほどの壊滅状態となった。立て続けにやってきた洪水・台風の被害は広範囲におよび、地主・百姓に至るまで苦難の時代が続いた。1795（寛政５）年、成郷が死去。跡を継いだのは段右衛門道賢であった。しかし、1805（文化２）年道賢が亡くなり、弟・嘉十郎が泥亀新田・金沢入江新田の名主・地主として泥亀永島９代を継いだ。嘉十郎の子・段右衛門忠篤の時代、待望の新田再開発の機会が訪れる。ところが坂本村の故障（異議）申し立てにより、1845（弘化２）年３月、忠篤は江戸の幕府・勘定奉行に訴えを起こした。訴訟は２年におよび、貴重な時間を割いた忠篤は一気に再開発工事に着手するが、その直後、瀬戸明神３代目神主・千葉主殿介胤通により再び故障を申し立てられる。結局、瀬戸明神の境内の一部の姫小島を永久借地とすることで合意し、1849（嘉永２）年、金沢入江新田は再建された。同時に入江新田の東北端に位置する走川新田も整った。さらに1851（嘉永４）年、平潟新田を整備し野島浦側へと新塩場を拡張した。こうして長きにわたる泥亀永島家の新田開発はようやく安定し、1853（嘉永６）年に新たな割付状が出されてここの泥亀新田は完成した（永島，2015）。

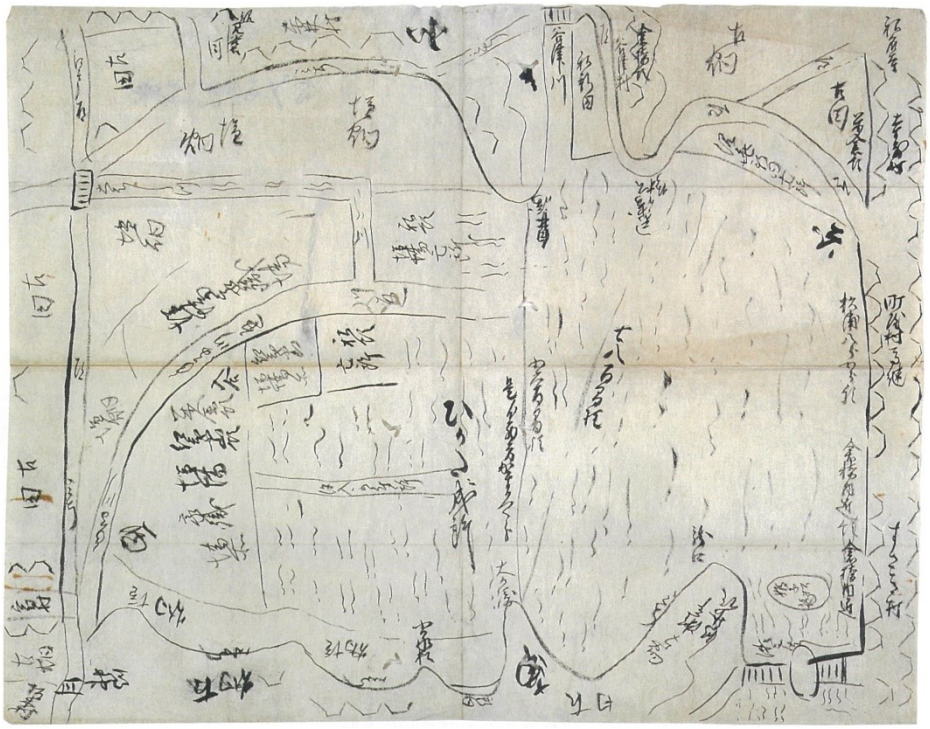


図 3-28　武州金沢入江図 明和 6 年頃 川崎市市民ミュージアム蔵
（横浜市歴史博物館，2010）

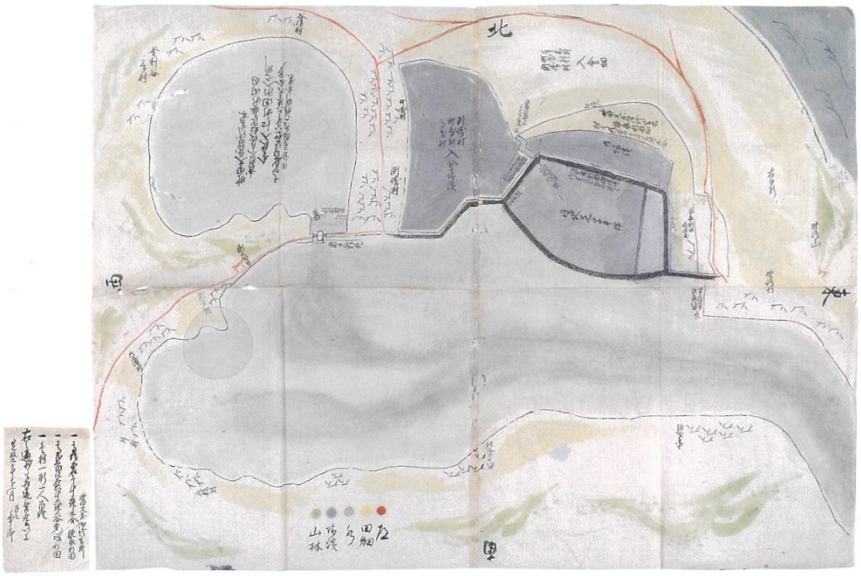


図 3-29　泥亀新田 1797 年 神奈川県公文書館蔵（横浜市歴史博物館，2010）

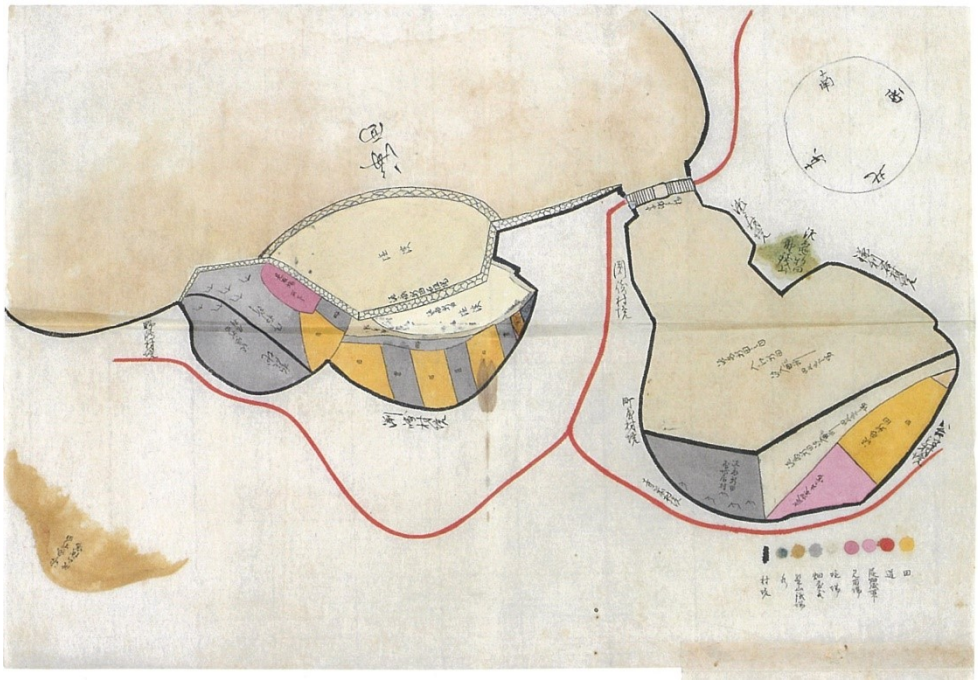


図 3-30　泥亀新田 1843 年 神奈川県公文書館蔵（横浜市歴史博物館，2010）

図 3-31　泥亀新田 不明 神奈川県公文書館蔵（横浜市歴史博物館，2010）

3.4　近代以降の金沢

3.4.1　幕末から近代への金沢のあゆみ

（１）黒船来航と横浜港開港

1853（嘉永６）年６月３日、ペリー提督率いるアメリカ合衆国海軍東インド艦隊が浦賀沖に来航した。大統領の国書を持って江戸幕府に国交樹立を求めたペリーは、幕府の返答を待つ間に東京湾の測量を実施、小柴沖に姿をみせた。六浦藩は幕府から海防を命じられ、平根山台場の麓（横須賀市長瀬）に陣を布いていた。小柴にペリー艦隊が現れた時、国元は手薄になっていた。陣屋に残っていたのは事務や財政をあずかる役方の人々で、武士たちは慌てて乙舳海岸に陣を張り、野島の山頂に見張所を設置し、艦隊の動きを監視した（神奈川県立金沢文庫，2000）。

1858（安政５）年、日米修好通商条約によって横の開港が決定し、居留地と遊歩区域が設定された。翌 1859（安政６）年には外国人居留地と商人町が設けられるとこのニュースはたちまち話題となり、横浜案内の図や横浜の風物を描いた浮世絵が出版された。居留地に住む外国人は本国の文化を日本に伝え、横浜の商人は彼らと接することで新しい文化を吸収していった。新しい文化とは、別荘や海水浴に象徴される観光文化であった（神奈川県立金沢文庫，2000）。

（２）金沢の行政の移り変わり

1867（慶応３）年 10 月、15 代将軍徳川慶喜は大政を奉還し、12 月、王政復古が宣言されて翌年 1868（明治元）年、明治政府が樹立した。新政府は 1869（明治２）年６月に神奈川府を置き、横浜町とその周辺が管下となり、同年９月、神奈川府は神奈川県と変わり、次第に県域を広げていった（内田，1987）。

1869（明治２）年、市域内で唯一の大名・米倉氏領の宿、赤井、寺前、平分、寺分、社家分の六か村は六浦藩に編成され、米倉昌言が六浦藩知事に任命された。1871（明治４）年、廃藩置県によって六浦藩は廃止され、六浦県と変わったが県知事は同じく米倉氏であり、同年 11 月、神奈川県に合併した（内田，1987）。

明治維新の時、幕府代官江川太郎左衛門の支配下にあった泥亀新田（『金沢文庫古文書』永嶌家文書・下　478「泥亀新田沿革略」）、町屋、洲崎、野島、柴（松本ナミ家文書「辰〔明治元年〕十月村高家数人別書上帳」）の各村は 1868（明治元）年、韮山県を経て神奈川県管轄に入った。その他の村々は 1868（明治元）年 12 月までに神奈川県の管轄に入り、六浦県は 1874（明治４）年 11 月、神奈川県に合併した（内田，1987）。

1889（明治 22）年４月、町村制により各村は合併して、下記のように金沢村、六浦庄村が誕生した。

金沢村：富岡村、柴村、谷津村、泥亀新田、寺前村、町屋村、洲崎村、野島浦

六浦庄村：三分村、釜利谷村、泥亀新田飛び地

その後金沢村は 1926（大正 15）年１月、町制を布いて金沢町となった。

1936（昭和 11）年 11 月１日、金沢町と六浦庄村は横浜市に合併し、横浜市磯子区に属することとなった。1948（昭和 23）年５月 15 日、磯子区から独立して金沢区が誕生する。この金沢区はかつて中世の頃に六浦庄と呼ばれた地域に相当する。

金沢区の行政の変遷については内田（1987）が表にまとめている（図 3-32）。

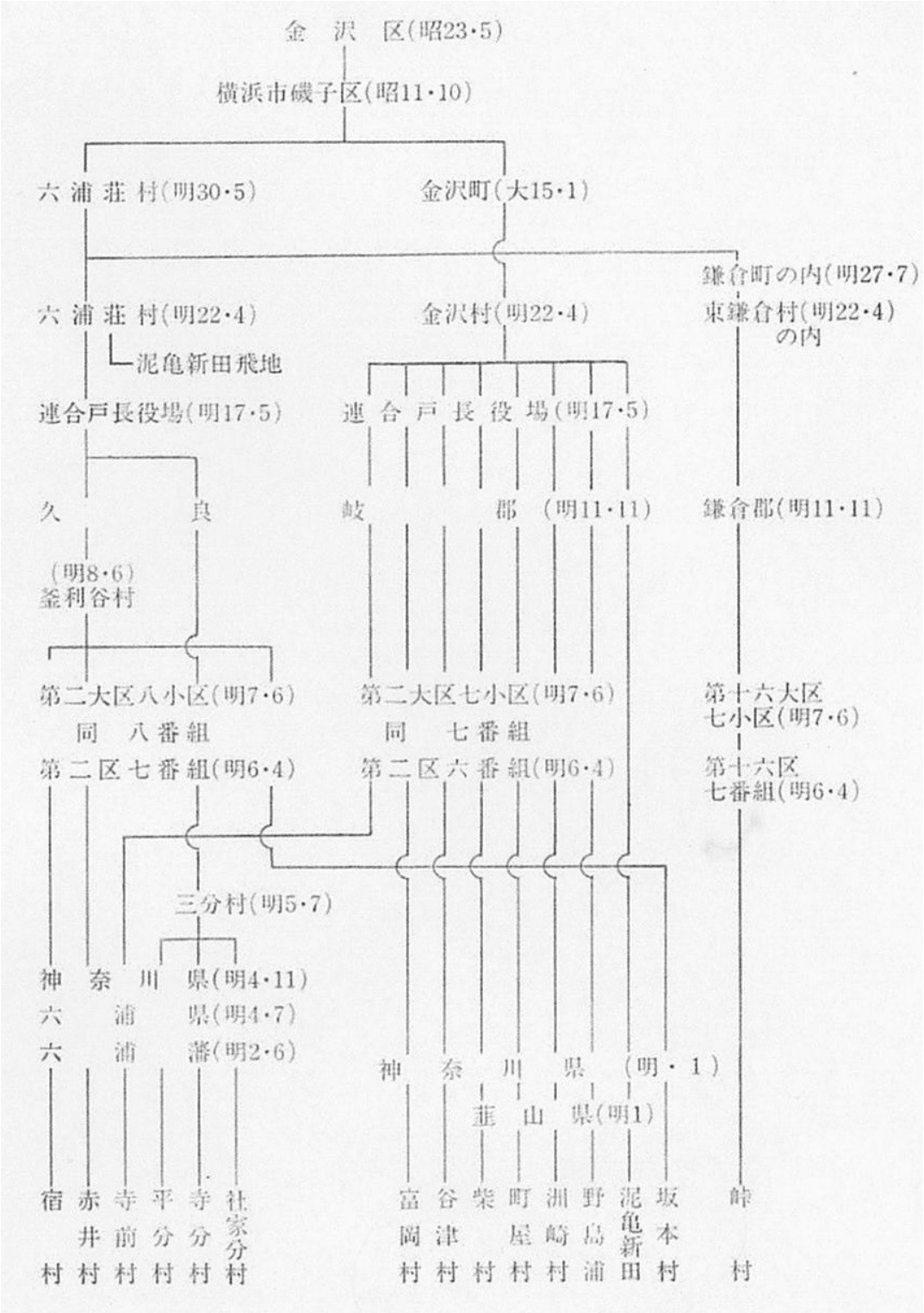


図 3-32　金沢区域行政の変遷　（内田，1987）

3.4.2　明治時代の金沢

（１）戸数と人口

1868（明治元）年 10 月の各村の家数と人口は表 3-2 のとおりである。村とは米に換算した各村の標準生産高であり、藩などの支配役所から割当ての基準として使われた(内田, 1987）。表 3-2 は 1889（明治 22）年の町村制により金沢村と六浦庄村に分かれた後の明治 30～44 年までの戸数人口の推移である。この表をみると金沢村は戸数で約 16%、六浦庄村では約３％の増加となっている。

表 3-2　明治元年 10 月の各村宗教・人口・高・支配一覧（松本ナミ家所蔵文書目録）

村名	家数（軒）	人口（人）	村高（石）	支配
町屋村	70（社1、寺3、堂2）	386（男 197、女 186、僧3）	242.587	江川太郎左衛門
泥亀新田	7	38（男 18、女 20）	15.139	同
入江新田	0	0	204.6665	同
洲崎村	114（寺5）	545（男 269、女 272、僧2）	332.014	同
野島浦	105（寺3）	673（男 347、女 325、僧1）	100.000	同
柴村	58（寺1、堂1）	364（男 179、女 184、僧1）	238.459	同
坂本村	34	172（男 92、女 80）	247.000	元紅葉山別当領
谷津村	22	146（男 73、女 73）	121.310	倉橋惣三郎元知行所
富岡村	116（寺6、堂1）	692（男 356、女 336）	363.490	稲葉主水元知行所
			57.00435	杉浦八郎五郎元知行所
宿村	79	384（男 205、女 179）	351.798	米倉丹後守領
赤井村	105	383（男 200、女 183）	360.838	同
寺前村	78	437（男 230、女 207）	219.284	同
称名寺領	24	130（男 68、女 62）	100.000	寺前村の内
平分村	142	852（男 438、女 414）	362.187	米倉丹後守領
社家分村	57	317（男 170、女 147）	189.945	同
寺分村	29	166（男 96、女 75）	83.121	同
瀬戸神社領	24	151（男 80、女 71）	100.000	寺分村の内

（ほかに平分村の内観音堂除地17.石277）

表 3-3　金沢村・六浦荘村戸数・人口推移（内田，1987）

	金沢村				六浦荘村			
	戸数	人口	男	女	戸数	人口	男	女
明治30年	690	4,618	2,409	2,335	563	3,693	2,041	2,016
31	692	4,639	2,371	2,268	565	3,663	1,820	1,843
32	696	4,909	2,506	2,403	565	3,786	1,880	1,906
33	706	5,118	2,605	2,513	565	3,784	1,895	1,889
34	705	5,226	2,653	2,573	571	3,783	1,905	1,878
35	713	5,402	2,751	2,669	573	3,833	1,919	1,914
36	747	5,091	——	——	573	3,934	——	——
37	735	5,131	2,665	2,464	573	3,998	2,049	1,949
38	735	4,947	2,562	2,385	576	4,132	2,134	1,998
39	746	4,958	2,568	2,385	576	4,199	2,178	2,021
40	745	5,167	2,638	2,529	577	4,265	2,213	2,052
41	750	5,280	2,727	2,553	577	4,224	2,133	2,091
42	765	5,358	2,762	2,596	577	4,294	2,171	2,123
43	792	5,493	2,852	2,641	580	4,405	2,249	2,156
44	800	5,546	2,765	2,781	580	4,494	2,292	2,202

（２）商業

明治に入ると 1871（明治４）年９月に田畑勝手作、翌 1872（明治５）年２月に土地永代売買解禁などがあり、各村々で自由な商売が行われるようになった（内田，1987）。表 3-4 は官庁の取り締まりを受ける業種で、明治初期には様々な商売が営まれていた。８小区には業種不明であるが、７小区と同じと推測される（内田，1987）。1914（大正３）年に刊行された平田恒吉『金沢と六浦庄時代』（平田恒吉，1984）巻末の広告欄に、酒類・米穀を商う安田平七と、質・穀商の大川五右衛門のビラがある（図 3-33、図 3-34）。

表 3-4　明治 10 年前後の六業結社連名簿（松本ナミ家所蔵文書目録）

７小区	
質屋	洲崎安田平七、町屋松本源左衛門、野島久保寺幾次郎、泥亀新田宇野保蔵、富岡鹿島源左衛門
鍛冶屋	町屋門倉駒次郎、同田村勘左衛門、富岡岡本伊右衛門
古道具屋	町屋柴田虎吉
古鉄買	寺前臼井平八、洲崎山口茂八
８小区	
	釜利谷森平四郎、森兵十郎
	三分相川勝蔵、小上馬伊八、佐藤善八、相川和吉、小上馬枡吉、相川太兵衛、長島半兵衛、山本清次郎、長谷川左吉、大川五右衛門、米本権四郎、下城達次郎、山田新五郎

表 3-5 をみると、明治 14 年に旅籠屋は計 11 軒ある。19 世紀初頭には町屋に宿場がおかれたとされているので（『新編武蔵風土記稿』より推測、前田，1986）、旧宿場町として旅籠屋の営業が続いていたものと思われる。野島や洲崎は両村が船着場で、房総方面の大山参詣のルートとして利用されていたことで、賑わいをみせていた。三分村の三軒は瀬戸の東屋や千代本へ行って八景遊覧や避暑を楽しむ観光客の需要があったものと思われる（内田，1987）。

表 3-5　明治 14 年 3 月の旅籠及び三類商売
（松本ナミ家所蔵文書目録）

	質	古道具	紙屑	旅籠	古着
町　屋	1	1	1	1	
洲　崎	質・古　着1			3	
泥　亀	1			1	
野　島	1			3	1
三　分	3	1		3	1
	質・古　着1	古道具・古着2		古金1	
釜利谷	2				
寺　前	古金・古道具1		1		

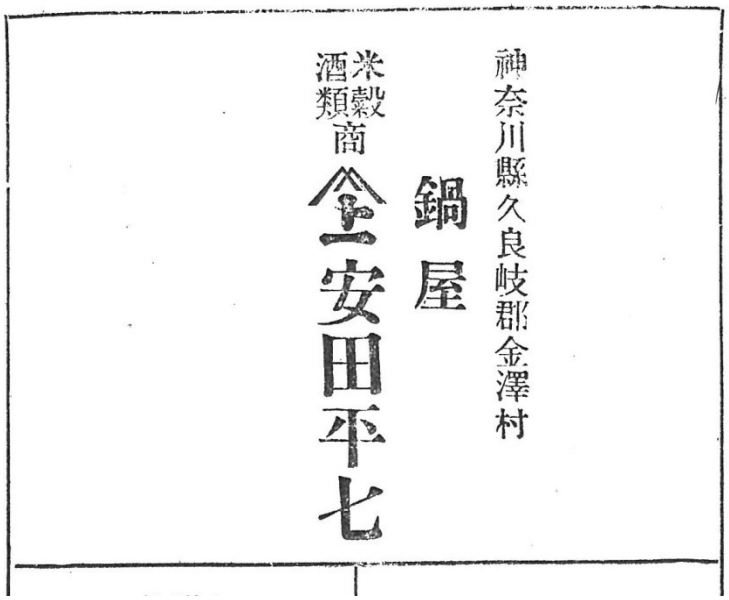


図 3-33　安田平七のビラ（平田，1984）

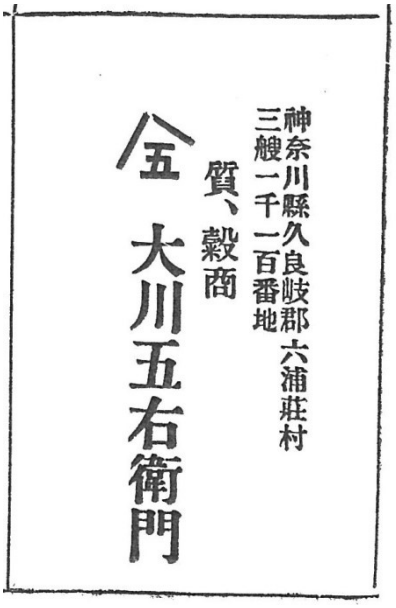


図 3-34　大川五右衛門のビラ
（平田，1984）

図 3-35　千代本のビラ（平田，1984）

図 3-36　東屋のビラ　（平田，1984）

図 3-37　白井館のビラ　（平田，1984）

図 3-38　荒井館のビラ　（平田，1984）

図 3-39　金波楼　（平田，1984）

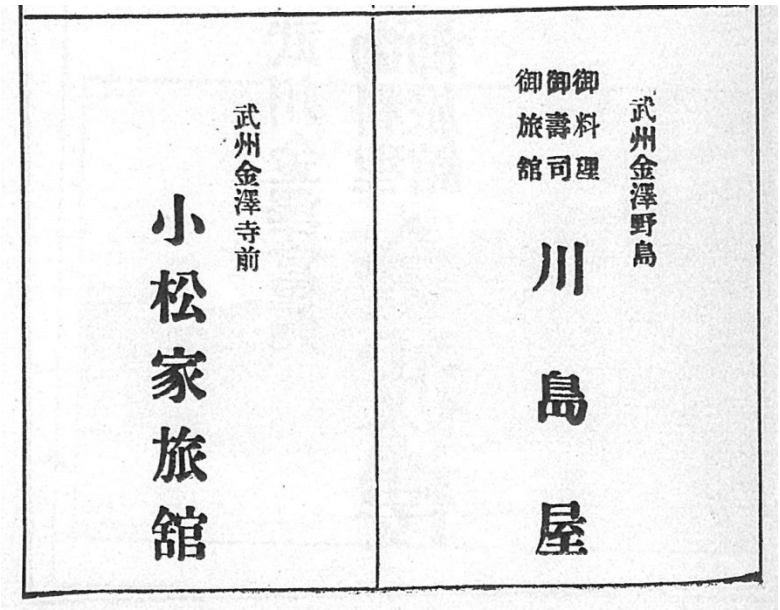


図 3-40　小松旅館・川島屋のビラ　（平田，1984）

表 3-6 は明治 10 年当時の三分村の経済状況である。三分村は幕末から引き続き薪や塩をつくっており、明治初期にはここでつくられた塩は東京や横浜方面へ輸出されていた。表 3-7 は釜利谷の経済状況である。釜利谷村ではとくに馬が 43 頭と多く、農耕のほか運搬用にも利用されていたものと考えられる。町屋村は近世末に宿場町に設定され幕末には人馬継立場として、地方内外の各地から多くの人々が訪れることで、この頃すでに町場的な要素の強い地域であったのだろう（内田，1987）。表 3-8 は明治 10 年頃の町屋の商売である。菓子屋のほか風呂屋、髪結い、そば屋、宿屋があり、早くも石炭などを扱う店もあった。また、表 3-9 より、1874（明治

表 3-6　明治 10 年 3 月における三分村の経済（内田，1987）

舟・車	日本形百石以上 1、百石以下 8、押込船 3、伝馬船20、漁船14、人力車 1 人乗 3
輸出貨物	内川湾は東西 9 町余、南北 6 町余、満潮の時深さ 9 尺に至る、干潮時ことごとく干潟となる、1 年の出入船およそ 100 艘、輸出の貨物は薪、塩。湾の修繕費は官と民で折半
物　産	明治 9 年産出の薪38,500束、塩 435 石
商　業	農間商を業とする者50戸
馬	牡 6 頭（明治 9 年 1 月調）
県税	明治 9 年 1 月～12月・12円32銭、船税16円16銭　（皇国地誌）

表 3-7　明治 10 年 3 月における釜利谷の経済（内田，1987）

物産	薪 550 束	炭 480 貫
	220円（明治 9 年調）	20円（同左）
民業	薪炭を業とする者 2 戸	女はおおむね縫を業とす
馬	牡43頭（明治 9 年 1 月調）	
県税	明治 9 年 1 月～12月・2 円56銭 4 厘	（皇国地誌）

7）年にはすでにそば屋やすし屋もがあった。表 3-10 によると、谷津村と町屋村に農労者や労力かせぎの者がおり、多くの賃金労働者が集まってきていたことがわかる（内田, 1987）。

表 3-8　明治 10 年 3 月における町屋村諸商売営業願（松本ナミ家所蔵文書目録）

菓子屋 5　洗湯 2　男髪結 3　そば屋 2
石炭・油 2　鍛冶屋 1　古道具 1　紺屋 1
宿屋 2　（松本ナミ家文書）

表 3-9　明治 7 年 1 月における町屋村旅籠・飲食業売上高（松本ナミ家所蔵文書目録）

職種	売上（6年7～12月） 円 銭	一月平均 円 銭	税金 (1/100)
旅籠屋A	15.50	2.58	3 銭
同　B	4.75	.79	1
同　C	19.68	3.28	3
そば屋D	6.28	1.05	1
すし屋E	10.12	1.69	2

表 3-10　明治 16 年 10 月における谷津村・町屋村物件表（松本ナミ家所蔵文書目録）

谷津村
　職業　農夫42　農労者32
　物産　米18石7斗3升4合　麦49石（15年・62石445）新5万束　炭500貫　駄馬4
町屋村
　職業　農夫110　労力業躰者7　農労者37
　　大工4　土工1　畳1　鍛冶1
　物産　米25石5斗3升（15年・85石1斗）
　　麦117石　塩139石5斗3升（15年・199石334）
＊ なお明治17年には売薬業（金明丹）1がいる

（3）農業

明治 10 年の各村の土地利用状況は表 3-11 の通りである。旧金沢町の八か村は泥亀新田をのぞいていずれも田より畑の方が多く、旧六浦庄村の三分村、釜利谷村ではともに畑の方が田より上回っていた。泥亀新田は入江を開いた場所なので田が 6 割以上を占めた。野島浦は漁業が中心で土地は少ない（内田, 1987）。この表からわかるように、明治時代のこの地域は農業を生業とするものが多く（「物件表」『松本ナミ家所蔵文書目録』）、これらの産物は金沢村・六浦庄村の各湊から各地に出荷されたが、特に多くの人口を抱える東京、金沢から最も近い市街地である横浜などに送られ、大量に消費された。つまり、明治時代の金沢は、東京や横浜の人々にとって食糧庫や燃料庫としての役割を果たしていたと言える（金沢区制五十周年記念事業実行委員会, 2001）。

大正から昭和にかけて市域で盛んに行われていた花の栽培は、明治中期からすでに始まっている（内田, 1987）。1892（明治 25）年、鉄砲ユリの栽培が杉田、中原（ともに磯子区）、富岡、金沢方面に普及していった。『金沢歴史年表』（金沢区役所, 1978）によると、明治 30 年代以降に町屋の柴田虎吉が静岡県浜名湖付近から蓮の種子を持ち帰り、泥亀新田に蓮根を植えたとされている。米作よりも蓮の栽培の方が地味にこの土地に合っていたようで、蓮田は第二次世界大戦後まで続いていた（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

1909（明治 42）年には杉田付近とともに富岡に温室フレームが普及しはじめ、フリージア、ユリ、バラ、チューリップなどと幅広い品種が栽培されるようになった『横浜の花の歴史を語る』（横浜市緑政局, 1973）。

表 3-11　明治 10 年前後の各村反別（内田, 1987）

野島浦	10町	8反	0畝	16歩				
	田 0	2	8	17	畑 2町	6反	3畝	9歩
	宅地 2	2	6	6	寄洲 1	4	6	10
	山 1	1	9	27				
谷津村	53	5	2	8				
	田 6	9	5	11	畑 7	2	0	20
	宅地 0	9	4	9	山38	9	4	9
柴　村	90	1	4	22				
	田12	6	0	29	畑16	9	9	11
	宅地 1	5	8	24	山58	2	4	21
富岡村	257	0	6	23				
	田35	2	8	15	畑41	4	1	8
	宅地 6	2	8	23	山171	5	3	10
町屋村	52	5	3	1				
	田 8	1	2	2	畑15	6	9	10
	宅地 3	2	3	14	製塩場 1	4	9	15
	山 2	1	9	3				
寺前村	101	3	1	29				
	田20	9	0	30	畑26	3	4	12
	宅地 5	0	2	15	製塩場 1	2	1	12
	山46	8	5	28				
洲崎村	72	1	4	19				
	田10	8	0	27	畑18	2	3	1
	宅地 3	8	7	22	製塩所 5	2	8	3
泥亀新田	71	0	9	27				
	田39	7	6	2	畑 2	7	0	20
	宅地 0	8	7	13	製塩場 5	2	8	13
	山 3	7	0	25	汐除悪 12	6	4	1
	荒田 3	7	5	1	水溜			
	（起返年期明治 9 年より同13年まで 5 ケ年期）							
三分村	田58	2	3	5	畑49	0	1	17
	宅地12	1	7	18	山89	1	1	10
	塩浜 2	6	3	17				
幸利谷村	田72	7	6	29	畑57	6	7	29
	宅地 8	4	9	29	山481	7	5	29
	山森	3	6	15	萱野 7	6	1	29
	藪	1	3	9				

（４）漁業

地域の漁業は東京湾内での出漁が主であった。平潟湾は非常に狭い海域であったため、江戸時代より漁業資源の問題が深刻化しており、伝統的な三十八職（漁法）の固定化が行われていた（内田, 1987）。とはいえ、海に囲まれた場所であったため漁業に関する古記録は多く残っている。金沢町の旧家布川隆義家には 1884（明治 17）年に作成された「漁業収益表」があり、これによると六浦庄内の漁民 288 人が同年に獲った漁獲物の内容はアイナメ・鰈・鯛・黒鯛・コチ・アナゴ・ハゼなどで漁獲高はゆうに 1000 円（現在の価値で数千万円）を大きく超えていた「漁業収益表」『布川隆義家文書』（横浜開港資料館, 2005）幕末の 1853（嘉永４）年２月、富岡、野島、小柴の三ヵ村は漁業について互いの利権を尊重し、滞りなく漁業が行えるように取り決めているが、経済拡大への意欲は強く、時代と共に内湾各浦々での利害はしばしば衝突を起こした（内田, 1987）。

1883（明治 16）年８月８日、海軍省の夏島砲台における試射「戸長役場村用掛関係資料」（松本ナミ家所蔵文書目録）、横須賀造船所（のちの横須賀海軍工廠）の増設、翌年の横須賀鎮守府の設置などにより通行禁止令が頻繁に出され、地域の漁業は大きな制約を受けるようになった（内田, 1987）。

1903（明治 36）年には下記のように漁業組合が設立せれる（『神奈川県統計書』「（内田, 1987）より転載」）

野島漁業組合	明治 36 年３月	組合員	148 人
柴漁業組合	明治 36 年５月	同	78 人
富岡漁業組合	明治 36 年６月	同	39 人
洲崎漁業組合	明治 36 年６月	同	110 人
三分漁業組合	明治 36 年８月	同	20 人

1908（明治 41）年４月には、平潟湾内の漁業について富岡・柴・野島の三漁業組合共同で、富岡漁業組合を代表として慣用漁業権を得た（内田, 1987）。

（５）平潟湾での製塩

平潟湾一帯では製塩が行われており、金沢を代表する特産品であった。とくに洲崎村と町屋村では中世には始まっている（神奈川県企画調査部県史編集室, 1975）。1865（慶応元）年 12 月の「御預所村々産物書上帳」（神奈川県立金沢文庫, 1960）によれば、各村一か年平均の生産は次のようになっている。

塩七千俵　泥亀新田、塩五千俵　洲崎村
塩二千五百俵　町屋村

これらの塩の多くは江戸市中へざるに入れて売り出す、と書かれている。

「泥亀新田では 1851（嘉永４）年に塩場二町五反三畝七歩を開発し、塩八十八石余の生産をあげていた（「嘉永七年割付上」（神奈川県立金沢文庫, 1960））。1876（明治９）年当時の各村の製塩場は以下の通りである（「八ヵ村土地利用書上」（松本ナミ家所蔵文書目録））。

町屋村	一町四反九畝一五歩	税金	五円八六六
寺前村	一町二反一畝一二歩	同	四円七五一
洲崎村	三町九反三畝二七歩	同	一五円六三五
泥亀新田	五町二反八畝一三歩	同	二二円〇五〇
三分村	五町五反九畝一六歩	同	一九円二二一

この頃、各地で開催されていた博覧会にも、地域の特産品として何度か出品された。1881（明治 14）年３月に上野の第２回内国博覧会（「博覧会書」（松本ナミ家所蔵文書目録）」）、1903（明治 36）年１月には大阪の第５回内国博覧会と相次いで出品し、「他地方の有名なものにくらべ劣らない」と評されている（「第五回内国勧業博覧会神奈川県出品要覧」（松本ナミ家所蔵文書目録）」）。

1905（明治 38）年６月の製塩売法が施行される。当時、三井・三菱といった財閥が海運会社を設立し瀬戸内海の塩を安く仕入れることが可能になると、瀬戸内海の製塩業者が増産をはじめた。当時の大蔵省は塩の過剰な生産を止めるべく、1910

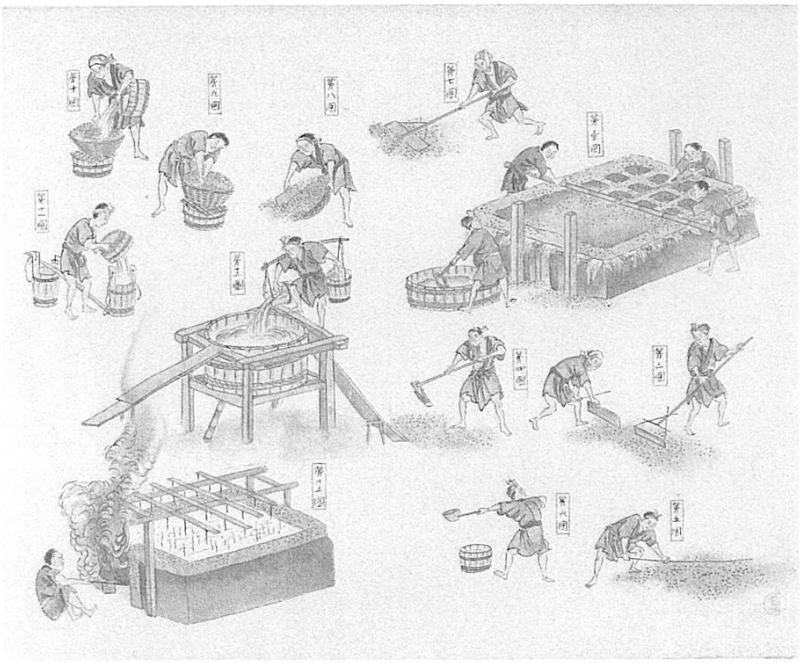


図 3-41　塩作りの方法を描いた絵
（金沢区制五十周年記念事業実行委員会，2001）

（明治 43）年、塩田の廃止計画をまとめた。この塩業整備事業によって東京湾の塩業は行徳（千葉県市川市）を残すのみで、金沢の塩田は姿を消した。

（６）横須賀と“金沢八景”

明治時代の金沢に最も影響を与えた事件は、横浜が国際貿易港として、横須賀が旧日本海軍の拠点として発展したことであろう。

1871（明治４）年、廃藩置県により六浦藩が廃止されたのち神奈川県に吸収合併されると、神奈川県の中心として笹下（現在の横浜市港南区）に郡役所が移動し、政治の中心地であった瀬戸も以前より活気がなくなったかのように思えた。しかし、明治時代になって庶民の移動の制限がなくなると、幕末の 1866（慶応２）年に開業した江戸・横浜・横須賀を直結させた汽船の定期航路を使い（神奈川県立金沢文庫, 2000）、横須賀軍港と“金沢八景”を組み合わせた周遊旅行が成立した（永井, 2009）。時代の最先端をゆく軍事設備や、海軍の需要に応じたハイカラな商品が並ぶ横須賀の街は、江戸時代の鎌倉・江ノ島に代わる新たな観光地として繁栄し、横須賀軍港に隣接する金沢もまた新たな発展をみせるようになった（永井. 2009）。

黒船来航によって開国された横浜には居留地が設定され、多くの外国人が横浜に滞在するようになった。彼らは海辺の街の観光文化である別荘地や海水浴などを横浜に持ち込んだ。海水浴については、横浜が開港する前の 1858（安政５）年には富岡海岸ですでに行われていた、云われることもあるが、海水浴の発祥については諸説あり、正確なころはわからない。いずれにせよ、富岡での海水浴の確実な記録があるのは 1875（明治８）年の頃のことである。ローマ字をつくり、日本初の和英辞典を編纂したジェームズ・ヘボン博士もその一人であり、ヘボンは「潮湯治」として海水浴を紹介したといわれている（神奈川県立金沢文庫, 2000）。

図 3-42　富岡　海水浴発祥の碑

図 3-43　夏島遠景 明治期 楠山永雄氏蔵（神奈川県立金沢文庫, 2000）

海水浴とともに伝わったのが別荘文化である。別荘文化は根岸湾から富岡に発展してきた。1882（明治 15）年、横浜の実業家田沼太右衛門が富岡に別荘を建てると 1884（明治 17）年には地元有志が共同で出資して金波楼が開業した。明治 20 年代、富岡に政府高官である三条実美・井上馨・松方正義。大鳥圭介らの別荘ができると、富岡の名は広く知られるようになる。この頃、富岡で発展した別荘文化が金沢にも持ち込まれるようになる。金沢には伊藤博文・井伊直安（越後国与板藩主）・大橋新太郎らの別荘が建設された。伊藤博文は 1887（明治 20）年、旧日本陸軍が砲台建設用地として購入した敷地を借り、夏島別荘の建設を始めた。伊藤博文が日々この別荘から瀬戸の東屋へ通い、明治憲法の草案を練ったことはあまりにも有名である。1889（明治 22）年、伊藤博文は明治憲法草案を完成させると小田原の滄浪閣にうつった。同年、夏島砲台の建設が始まった（神奈川県立金沢文庫, 2000）。

図 3-44　夏島砲台跡

1895（明治２）年、長浜検疫所が金沢村大字柴に設立された。眼前には金沢の海が広がり、この地を訪れた与謝野鉄幹・晶子夫妻もその景観を絶賛したといわれている。検疫所とは「伝染病の流行地から来航する船舶の消毒や患者の隔離を行う施設のことをいう。長浜検疫所は黄熱病の研究者として知られた野口英世博士が検疫医官補として勤務していたことでも知られている。彼は外国船の船員からペスト菌を発見した功績が認められ、アメリカ留学を果たす。野口が勤務していた当時の検疫所構内にあった細菌検査室は、現在「野口英世記念館」として創建当時の形で改修されている（神奈川県立金沢文庫, 2000）。

夏島砲台建設が始まった 1889（明治 22）年、横須賀線が開通する。瀬戸の南が横須賀軍港のため、別荘文化は西へ向かって広がっていく。横須賀に観光客を奪われつつあった鎌倉・逗子は再び賑わいを取り戻しはじめた。明治時代はこうした鉄道や汽船などの近代的な交通機関が観光客の人気をさらっていく。横須賀軍港にいる艦隊の演習は庶民の間で非常に人気が高く、観光客は汽船や横須賀線を使って横須賀に入り、横須賀から渡船で瀬戸へ来て“金沢八景”を楽しんだ。一方、横須賀線開通によって東京と横須賀を直結させた交通網が整備されはじめ、瀬戸の北側は観光地としてはほとんど寂れていく。1869（明治２）年に能見堂が消失した際には、ついぞ再建されることはなかった（神奈川県立金沢文庫, 2000）。

1899（明治 32）年７月 14 日、軍機保護法と要塞地帯法が公布される。これらの法制により、横須賀軍港や夏島砲台などの軍事施設に近接する金沢の測量・撮影・模写・録取することが禁じられた。角田武夫は軍当局や役所との煩雑な交渉を重ね、『金沢百景』『続金沢百景』『金沢巡礼』の三部の画帖を残している（神奈川県立金沢文庫, 1998）。

1910（明治 43）年、旧海軍横須賀鎮守府が夏島砲台周辺の埋立に着手する。この地が後に横浜市と横須賀市の間に勃発した市境争いの火種となる（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

1912（明治 45）年、横浜電気鉄道が八幡橋まで延長され、永島家の牡丹園が横浜からの日帰り客でにぎわうようになった。

図 3-45　瀬戸「永島泥亀の牡丹」

（神奈川県立金沢文庫, 2012）

3.4.3　大正時代の金沢

（１）戸数と人口

1912（大正元）年から 1925（大正 14）年までの金沢村・六浦庄村の人口の推移は表 3-12（神奈川県統計書より）の通りである。表 3-12 によると、金沢村の戸数約 18%増、六浦庄村は約 33%増と、金沢村に比べて六浦庄村の増加率が高い。

表 3-12　大正期の金沢村、六浦荘村戸数・人口推移（『久良岐郡統計書』内田, 1987）

年次	金沢村 戸数	金沢村 人口	金沢村 男	金沢村 女	六浦荘村 戸数	六浦荘村 人口	六浦荘村 男	六浦荘村 女
	戸	人	人	人	戸	人	人	人
大正1（明45）	803	5,622	2,829	2,793	585	4,529	2,269	2,260
2	805	5,472	2,770	2,702	590	4,584	2,299	2,285
3	810	5,296	2,657	2,639	590	4,587	2,295	2,292
4	856	5,380	2,719	2,661	620	4,639	2,320	2,319
5	856	5,470	2,733	2,737	653	4,684	2,347	2,337
6	881	5,630	2,819	2,811	655	4,791	2,408	2,388
7	919	5,179	2,680	2,499	682	4,132	2,113	2,019
8	900	5,300	2,738	2,562	668	4,051	2,043	2,008
9	910	5,260	2,718	2,542	683	4,160	2,077	2,083
10	914	5,500	2,801	2,699	696	4,217	2,107	2,110
11	—	—	—	—	—	—	—	—
12	939	5,364	2,801	2,563	740	4,603	2,352	2,251
13	932	5,435	2,884	2,551	743	4,603	2,356	2,250
14	949	5,448	2,845	2,603	779	4,337	2,172	2,165

（２）農業

種目別土地反別の推移は表 3-13 の通り。両村とも田は微減、畑は微増しているが、特に目立った項目はない。農家数は 1913（大正２）年に金沢村で 435 戸、六浦庄村で 418 戸、1925（大正 14）年に金沢村 517 戸、六浦庄村 483 戸と両村とも増加の傾向をみせている（『久良岐郡統計』「（内田, 1987）より転載」）。

1912（大正元）年、富岡で加藤喜助がキクのシェード栽培を行った。この年、富岡

表 3-13　種目別土地反別表
（『久良岐郡統計書』内田, 1987）

金沢村				
年別	2年	9年	12年	14年
田	1538反	1534反	1521反	1512反
畑	1482反	1546反	1561反	1547反
宅地	103,000坪	366反	114,985坪	115,225坪
山林	3647反	3587反	3555反	3551反
原野	53反	53反	255反	253反
その他	218反	196反		
六浦荘村				
年別	2年	9年	12年	14年
田	1484反	1473反	1349反	1320反
畑	1482反	1256反	1029反	1413反
宅地	87,000坪	299反	92,419坪	92,612坪
山林	8355反	8357反	8255反	8163反
原野	176反	168反	280反	174反
その他	137反	135反		

※注・反以下、坪以下は切捨、12年、14年は原野・その他は一括表示（『久良岐郡統計』より作成）。

に花の温室栽培が普及した。1923（大正 12）年４月、県下の花物の視察として富岡の加藤武平は西洋草花・スイートピー・カーネーションの部で紹介され、富岡の花卉栽培の優秀さが全国に宣伝された。とくにカーネーション・スイートピーについては県下でもトップの生産者の観があり、1925（大正 14）年 10 月に県農会から表彰された（『神奈川県農会』207 号「(内田, 1987）より転載」)。同年９月の関東大震災で大きな痛手を受けるが、1926（大正 15）年には富岡も含めた市域南部を中心に温室園芸がさかんになった（横浜市緑政局, 1973）。第一次世界大戦中、花卉栽培は換金作物として生産の促進がおこなわれた（神奈川県花き業界沿革史編纂委員会, 1967）。

（３）漁業

1913（大正２）年の漁業者数と漁船数は、金沢村でそれぞれ 435 人と 336 艘、六浦庄村で 53 人と 64 艘で、野島・柴・富岡・洲崎の四つの漁港をもつ金沢村が圧倒的に多い（『久良岐郡統計』久良岐郡役所, 1914(内田, 1987)より転載))。海岸線の延長は柴が一里一二町と最も長く、洲崎が九町三二間と最も短い。漁獲高では野島が群を抜いており、その純利益は一万三千五〇五円（現在の価値で約 5000 万円）であった。一方、漁業者数・漁船数ともに最少の三分村では、カキやノリの養殖が盛んであった（表 3-14)。

表 3-14　アサリ、カキ、ノリの養殖　（内田, 1987）

	種類	養殖場面積	養殖物種類	養殖高	価格	仕向地
柴漁業組合						
大正９年度	介類養殖	11,227坪25	アサリ	1,000樽	1,300円	土地並生麦
10年度	同	11,227坪25	同	1,000	1,500	土　地
11年度	同	11,227坪25	同	1,000	1,200	同
	ノリ養殖	2,100.00	ノ　リ	150貫	500	同
野島漁業組合						
９年度	介類養殖	2,500坪	アサリ	19,243樽	2,749円	横須賀
	ノリ養殖	4,000	ノ　リ	1,400	3,360	同
10年度	介類養殖	2,000	アサリ	8,589	1,200	同
	ノリ養殖	2,200	ノ　リ	1,100	2,640	同
11年度	介類養殖	2,000	アサリ	6,251	893	同
	カキ養殖	300	カ　キ	1,800	600	同
	ノリ養殖	2,200	ノ　リ	1,100	2,580	同
洲崎漁業組合						
９年度	介類養殖	2,400	アサリ	19,000	2,700	横須賀鎌倉
10年度	同	2,000	同	8,589	1,200	同「方面
11年度	同	2,000	同	8,000	1,100	同
	カキ養殖	500	カ　キ	2,400	800	同
三分漁業組合						
９年度	ノリ養殖	9,000	ノ　リ	2,450	7,600	横浜横須賀
	カキ養殖	8,500	カ　キ	23,400	12,800	京浜地方
10年度	ノリ養殖	11,500	ノ　リ	2,330	8,256	横浜横須賀
	カキ養殖	8,500	カ　キ	24,700	24,700	京浜地方
11年度	ノリ養殖	12,000	ノ　リ	1,960	8,900	横浜横須賀
	カキ養殖	12,000	カ　キ	54,600	27,300	京浜地方

（単位不明のものはそのまま）

各地の主な漁場は、柴と富岡はそれぞれ地先漁場で、洲崎は乙舳と平潟湾、三分は三分湾、野島は金沢沖合ほか第二、第三砲台付近、猿島および横須賀からさらに本牧沖合から南方面と広範囲にわたっていた（神奈川県水産会, 1925)。

1914（大正３）年、第一次世界大戦が開戦し旧日本軍がドイツに宣戦布告をすると、翌５月 27 日から 29 日までの三日間、東京湾中央部を発射区域として軍艦が高速力で航行中、水雷を発射するから危険につき立ち入らない旨の達しが出された（「漁船帆船取締ニ関ス

ル件通牒」鹿島市太郎家文書)。このようなことでこの地域の漁業は度々制約を受けた（内田,1987)。

（４）海軍による野島埋め立てと漁業組合の陳情

1920（大正９）年３月、横須賀鎮守府では野島地先の埋め立て工事の真っ只中であったが、工事によって周辺の漁業に重大な損失が出るとして、この地域と三浦郡の漁業組合共同で政府に陳情。その結果、海軍側から各漁業組合へ補償金を交付し、そのかわり漁業権の一部取消しを公告することで合意した。この海域の埋め立てに関しては軍事機密になっており、詳細については明らかにされてこなかった部分が多い。1920（大正９）年あるいは1921（大正10）年頃、海軍から一世帯当たり46円ほど支払われた（鉈切にも分配の由）が、軍の権力によりほとんど涙金と言ってよい程の金額で片づけられてしまった（内田,1987)。

結局、1934（昭和19）年に戦争が激化して工事続行が困難となるまでに、野島地先約45万坪が埋め立てられた（横浜市港湾局臨海開発部,1992）。

（５）交通の発達と観光

1919（大正８）年、東京都横須賀鎮守府を結ぶ国道31号線（現在の16号）の建設がはじまった。この国道は軍事車両の通行を目的として一車線の舗装が計画され、要塞地帯法の適用によりコンクリート橋への架けかえが行われた。1921（大正10）年、この国道を相武乗合自動車が杉田-逗子間のバス路線運行がはじまった。杉田から金沢への所要時間は約20分、金沢から逗子へ約15分、杉田-逗子間は所要時間35分の道のりである。この頃はまだダイヤグラムがなく、始発の停留所に人がある程度集まってくると出発した。横浜市電や横須賀線からの乗り換えにより、東京から金沢までの日帰りの条件が整った。こうして海軍などの埋め立てによって“金沢八景”消失で観光業に陰りが見え始めていた金沢は、バスや鉄道の開通によって海水浴を楽しむ観光客によって活気を取り戻していく。

周辺海域の漁業に大打撃を与えた横須賀軍港の拡大だが、金沢の旅館や料亭では海軍軍人をターゲットにするなどして客の確保を図った。戦前の金沢には横浜方面からバスや鉄道で来て日帰りの旅を楽しむ観光客と、海軍という二つの客層によって観光業がにぎわった（神奈川県立金沢文庫,2000）。

3.4.4　昭和戦前期の金沢

（１）人口と横浜市合併

1926（昭和元）年から 1935（昭和 10）年までの金沢村（町）・六浦庄村の人口の推移は表 3-15 の通りである（内田, 1987）。昭和戦前期の金沢は、1932（昭和７）年の海軍基地と航空産業の進出により軍人と航空産業の技術者が流入し、1932（昭和７）年から 1943（昭和 18）年のわずか 11 年で人口統計に表れる数字だけでも５倍強に増加した。実際の人口は、統計に３万人以上の上乗せが必要とされている（神奈川県立金沢文庫, 2000）。1936（昭和 11）年 10 月、金沢村と六浦庄村が横浜市に編入、磯子区に属した。

表 3-15　金沢村(町)、六浦荘村の人口推移(内田, 1987)

	金沢村（昭２、金沢町となる）				六浦荘村			
年　次	戸数	人口	男	女	戸数	人口	男	女
大正14年	949	5448	2845	2603	779	4337	2172	2165
昭和元年(大正15)	956	5452	2874	2578	735	4342	2175	2167
2	965	5532	2845	2687	739	4357	2210	2147
3	970	5599	2865	2734	772	4473	2262	2211
4	1007	5646	2896	2750	772	4481	2265	2216
5	1050	6037	3135	2902	872	4611	2314	2297
6	1070	6223	3222	3001	875	4621	2328	2293
7	1266	6494	3313	3181	918	4739	2403	2336
8	1293	6613	3382	3231	947	4820	2464	2356
9	1367	7319	3952	3474	981	4956	2532	2424
10	1646	8371	4453	3918	1139	5780	2955	2825

（２）農業

1937（昭和 12）年７月の日中戦争以来、全国的な農業従事者の労力不足となっていた。さらに追い打ちを掛けたのは農家子息の離村による農業離れで、とくに金沢においては京浜工業地帯や横須賀の軍施設方面に吸収されていった。戦争によりこれらの傾向は一層強まったとされている（横浜市総務局市史編集室, 1990）。

1928（昭和３）年と 1934（昭和９）年の農業の概況は表 3-16 の通りである。昭和３年より９年に小作農業の増加がみられる。

大正末期から昭和初年にかけて、富岡などの市域南部を中心に温室園芸が全盛期を迎え、1930（昭和５）年までに市域各地で温室新設ブームが続いた。1933（昭和８）年 12 月、富岡花卉園芸組合（昭和９年、組合員 38 人）が結成された（『横浜の花の歴史を語る』（横浜市緑政局, 1973）、『農政要覧』（横浜市農局, 1934 年））。富岡の花卉栽培の成果はめざましく、数々の品評会で入賞を果たし、高い評価を受けていた（内田, 1987）。

表 3-16　金沢町花卉栽培概況　（内田，1987）

		昭和３年	昭和９年	開花期（９年）
バラ	作付反別	1,550坪	58畝	６月下旬
	収穫高	186,000本	150,800本	４期咲
	価額	1,302円	905円	灌木
ボタン	作付反別	120坪	15畝	４月下旬
	収穫高	2,800本	3,600本	灌木
	価額	207円	180円	
キク	作付反別	1,555坪	245畝	夏冬秋
	収穫高	77,750本	24,500本	灌木
	価額	1,088円	1,715円	
カーネーション	作付反別	1,500坪	168畝	７月中旬
	収穫高	450,000本	604,800本	宿根
	価額	4,500円	4,838円	
水仙	作付反別	795坪	100畝	12月、４月
	収穫高	28,750本	160,000本	球根
	価額	792円	960円	
チューリップ	作付反別	660坪	36畝	４月下旬
	収穫高	27,700本	54,000本	球根
	価額	267円	540円	
アネモネ	作付反別	210坪	20畝	４月中旬
	収穫高	13,650本	120,000本	球根
	価額	425円	360円	
グラジオラス	作付反別	963坪	49畝	７月上旬
	収穫高	48,150本	98,000本	球根
	価額	240円	392円	

		昭和３年	昭和９年	開花期（９年）
ダリア	作付反別	450坪	43畝	７月下旬
	収穫高	54,000本	103,200本	塊根
	価額	180円	309円	
矢車草	作付反別	1,470坪	23畝	５月下旬
	収穫高	10,290本	3,450本	一二年草
	価額	467円	138円	
翠菊	作付反別	3,000坪	27畝	７月、９月
	収穫高	120,000本	4,860本	
	価額	1,200円	243円	
百日草	作付反別	872件	42畝	７月下旬
	収穫高	7,849本	10,080本	一二年草
	価額	235円	302円	
段菊	作付反別		41畝	９月上旬
	収穫高		6,150本	一二年草
	価額		307円	
鈴蘭	作付反別		6畝	５月
	収穫高		36,000本	宿根
	価額		360円	
その他とも総計	作付反別		1,242畝	
	収穫高		—	
	価額		14,609円	

＊六浦荘村　３年＝菊577円、その他300円、９年＝菊210円、カーネーション172円、水仙106円、葉ボタン94円などあり、総計で作付63畝、681円。

（３）漁業

1928（昭和３）年２月、横須賀市猿島沖で英国トムソン会社所有のシルバガバー号が座礁し重油が流失した。この重油流失で沿岸の海産物に被害がでて、沿岸漁業組合との間に補償問題が勃発、金沢のカキが全滅の危機を招いた（横浜毎朝新聞）。この被害は金沢方面にもおよび、養殖中のカキは大損害を被った。重油の除去作業は金沢周辺地域の漁港にとって死活問題とし、代表者が各方面に陳述した結果、翌３月に金一万円を会社から被害各漁業組合に交付することで無事解決した。

表 3-17　昭和 5-13 年、各 11-翌 4 月におけるノリ生産額（内田，1987）

	富岡	野島	柴	洲崎	三分
5年	10,000円	27,000円	27,000円	15,000円	9,000円
6年	3,500	14,400	22,044	1,200	3,840
7年	10,103	21,000	24,300	600	432
8年	3,912	4,600	9,720	2,000	825
9年	23,635	16,000	46,092	250	750
10年	27,950	13,000	29,890	2,100	2,800
11年	53,790	25,000	99,870	5,600	9,100
12年	39,248	27,000	60,000	10,000	3,456
13年	69,300	44,174	54,000	12,250	5,775
平均	26,826	21,520	41,468	5,444	3,997

この時期は、金沢ではノリの生産が盛んだった。昭和 13 年度（1938 年９月～1939 年４月）の各漁業組合別のノリの生産高は表 3-17 の通りである（横浜市産業部農政課，1940）。漁業者は総数で 822 人、そのうち漁業を主業とするのは１/３だった。業者は野島が最も多く、次いで柴の両者で全体の半数以上を占めていた。各漁業組合別のノリの生産額はおおむね９年以降に好調となり、13 年以降は柴を除いていずれも最高額となっており、地域の漁業収入の中でもノリの比重が高かったことがわかる。

この地域の漁業は大正期から続く海軍の大規模な埋め立てにより、強制的な漁業権の剥奪、海流の変化、漁場や航行範囲の設定などさまざまなことが制限され、大きな打撃を受

けた。第三期・四期野島地先の埋め立てが行われた。これも軍事機密のため、いつ、どの辺りが埋め立てられたか正確な所は不明である。1934（昭和９）年８月、富岡地先埋め立て工事が着工する。

戦雲が濃くなるとともに、各種工場の沿岸進出や人口増による各河川の悪排水などによって各種水族は著しく減少し、漁業は衰退の一途をたどる（内田, 1987）。

（４）交通網の発展

1930（昭和５）年、湘南電気鉄道開通すると、この路線を使って海水浴目的の観光客が三浦半島へ押し寄せた。同鉄道会社は沿線の海水浴場の宣伝だけでなく、春には花見とハイキング、夏には海水浴、秋には紅葉とハイキングといった季節折々の観光パンフレットを配布し、集客に努めた。しかし、敗戦が色濃くなると一般住民の海水浴は禁止されてしまったので（内田, 1987）、戦前の金沢が海水浴でにぎわったのは、わずか10年足らずのことだった（神奈川県立金沢文庫, 2000）。

図 3-46　京浜 湘南電鉄沿線案内
（神奈川県立金沢文庫, 2012）

1933（昭和８）年に湘南電気鉄道が京浜電気鉄道と相互乗り入れをはじめると、東京府は電鉄直営の乙艫海岸に海の家をもうけた（神奈川県立金沢文庫, 2000）。同年、品川-浦賀間の直通運転が開始すると（『京浜急行百年史』京浜急行電鉄株式会社, 1999）、湘南電気鉄道沿線への企業進出が盛んになり、湘南電気鉄道は軍港や軍需関連施設で働く人々の通勤の足となった（神奈川県立金沢文庫, 1998）。

海水浴　湘南電鉄　昭和10年頃

湘南秋の行楽　湘南電気鉄道株式会社　昭和5年

我は海の子　京濱・湘南電鉄　昭和15年

図3-47　湘南電鉄が発行したパンフレット
（神奈川県立金沢文庫, 2012）

湘南電気鉄道に併走する形となった相武乗合自動車の杉田-逗子間は、1930（昭和５）年以降も

通勤や観光の足としてにぎわい、湘南乗合自動車（京急バスの前身）の稼ぎ頭となった（神奈川県立金沢文庫, 2000）。

（５）相次ぐ埋め立て

平潟湾の埋め立てと埋め立て地の宅地化は着々と進められた。1927（昭和２）年10月、湘南電鉄株式会社が六浦庄村高谷海岸6000坪を埋め立て、変電所と社宅を建てる問題で、沿岸住民の反対運動がおきた。1930（昭和５）年６月、泥亀および野島地先海面埋め立て829坪余、野島地先埋め立て約211坪が野島住人５人から出願され、金沢町評議会は異議なしと回答している（松本ナミ家所蔵文書目録）。「金沢八景六浦庄埋立地図」（松本ナミ家所蔵文書目録）（図3-48）には、関東大震災により隆起した平潟湾の一部を埋め立て住宅地として販売する旨が書かれている（内田, 1987）。

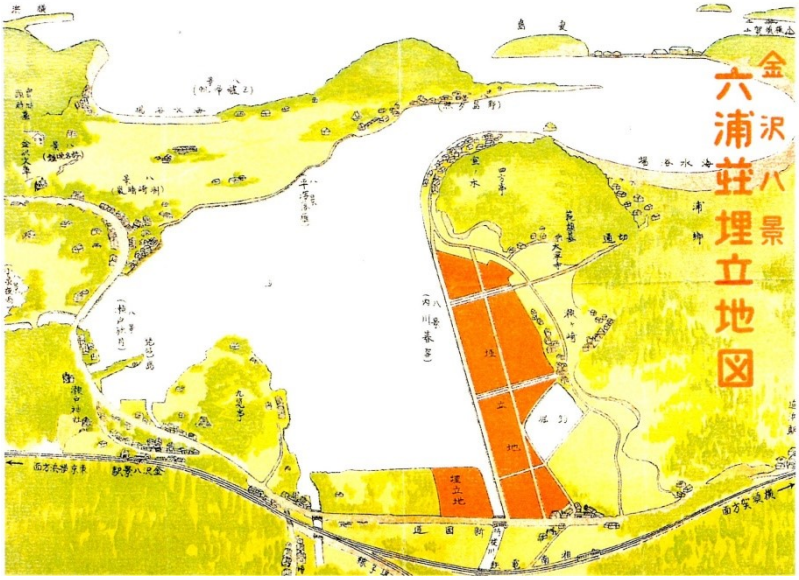


図3-48　金沢八景六浦庄埋立地図

1934（昭和９）年６月中旬、山梨県会議長が平潟湾18000坪の海面を埋め立て住宅地とする計画に対し、“金沢八景”の景観が破壊されるとの理由で六浦庄村住民のあいだに反対運動がおきた（横浜貿易新報, 1934年６月17日付）。かくして平潟湾は東西北の三方向から次第に埋め立てられ、大正時代の富岡同様、宅地化が進んでいった（内田, 1987）。

海軍による金沢周辺の海域の埋め立ては依然として続いており、周辺海域での漁業にも甚大な被害がでた。野島地先の埋め立ては最終の第三・第四期に入ったが、第四期工事未完のまま中止となっている（内田, 1987）。なお、富岡地先については1934（昭和９）年８月横須賀鎮守府から県知事に連絡があり、金沢町宛てには10月４日までに意見答申すべしとの通達があったが、この時すでに工事は着工しており、ほとんど事後承諾のような形を強要されたようなものであった。

金沢は小山にかこまれた遮蔽性の地形で、横須賀軍港と隣接し湘南電鉄の開通により交通の便が良くなったことで、各種の軍需産業が進出し、風光明媚な観光地から一変して兵

器生産の工業地帯となった。これに伴い、横須賀海軍工廠その他の海軍施設と合わせて工場従事者が増え、1936（昭和 11）年には六浦庄村の全戸の３割にのぼる 325 戸が軍関係の職工であった（横浜貿易新報）。そこで人口の増加により住宅難も次第に生じたため、県が委託して同潤会が工場従業員アパートを建設した。

海軍関連施設も進出し、軍事基盤化の色彩が強まってくると、富岡に横浜海軍航空隊が設置されることになった。1936（昭和 11）年３月、横須賀海軍航空隊の拡張計画により、野島地先と飛行場南側水路が埋め立てられた（内田, 1987）。

大正～昭和戦前にかけて、金沢周辺の海域では埋め立て工事が盛んに行われ、“金沢八景”という風光明媚な景観は、称名寺周辺と乙艫・洲崎地区を除いてほとんど失われてしまった。見えるものが海軍の飛行場と工場ばかりとなった金龍院九覧亭は閉鎖され、1943（昭和 18）年には海水浴も禁止された。1932（昭和７）年からはじまった軍事基地化と埋め立て地の宅地化によって、金沢は観光地から職住接近型の工業地帯に変わった（神奈川県立金沢文庫, 2000）。

図 3-49　現在の九覧亭からの眺望

3.4.5　昭和戦後期以降の金沢

（１）金沢区の誕生と人口

1946（昭和 23）年５月、旧金沢町および旧六浦庄村に該当する地域は新生・金沢区として磯子区から独立し、新たな区政を布いた。当時の面積は面積 23.48 ㎢、人口約５万人、19 か町である（金沢区 HP『金沢のあゆみ』より）。1936（昭和 11）年以降の昭和期の金沢区の人口の推移は表 3-18（金沢区役所）の通りである。戦時中の軍需産業の進出による工場従事者の流入、平潟湾の埋め立て地の宅地化に加え、非戦災地であったことで戦後、京浜の人々が一時おしかけ人口は５万人を超えた（『月刊よこはま』横浜市文化政策委員会, 1950）。

表 3-18　昭和期の区域世帯数と人口推移　（内田，1987）

	世帯数	人　口		世帯数	人　口
昭和11年	—	—	昭和36年	18,122	73,224
12	—	—	37	19,340	76,314
13	—	—	38	20,754	79,442
14	4,188	20,885	39	22,402	82,285
15	—	—	40	23,063	86,251
16	6,860	39,727	41	24,086	88,768
17	8,431	43,737	42	25,591	91,825
18	8,575	60,597	43	27,892	95,589
19	8,474	57,569	44	30,122	100,666
20	8,293	39,565	45	31,310	108,693
21	10,310	47,650	46	33,748	115,239
22	11,158	50,172	47	35,419	121,343
23	11,694	51,765	48	36,923	126,506
24	12,281	54,575	49	38,705	131,316
25	12,783	56,040	50	40,898	135,349
26	13,242	58,398	51	41,567	137,763
27	13,404	59,788	52	42,056	139,343
28	13,895	62,037	53	43,414	143,566
29	14,373	63,097	54	44,899	148,096
30	14,266	63,974	55	50,388	154,687
31	14,687	65,326	56	52,036	159,464
32	15,098	66,450	57	53,942	165,096
33	15,615	67,966	58	55,301	168,639
34	16,053	69,211	59	56,491	171,477
35	17,568	71,291	60	57,191	176,058

（１）根岸湾第２期ハ地区（富岡地先）埋立計画

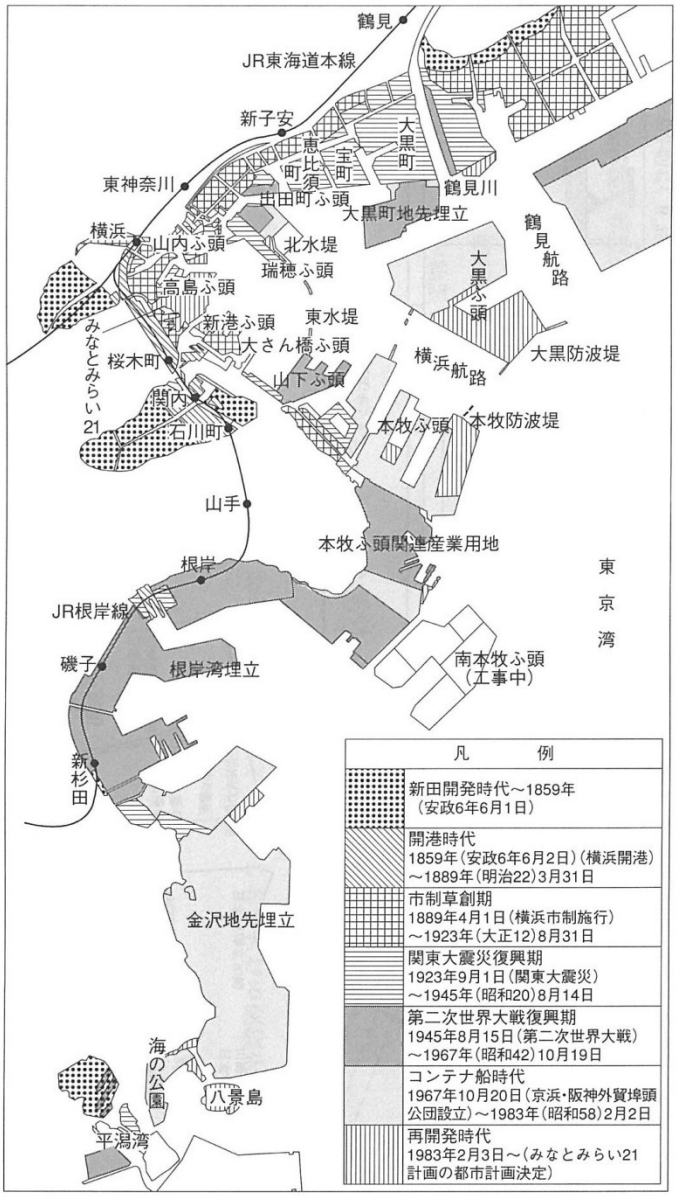


図 3-50　横浜のみなとづくりと埋め立て地（若林, 2000）

１）計画の概要

戦後の横浜では、臨海部の埋め立てによって京浜工業地帯の骨格基盤づくりがダイナミックに動き出す（横浜港湾局企画課, 1989）。臨海部に集中した主たる目的は、資源に乏しい我が国にとって、海外との貿易によって得られる資源は大変貴重なものであり、それらの集積地として臨海部に産業を集中させることにあった。

根岸湾埋立事業の妥結は 1959 年である。その２年後の 1961（昭和 36）年、根岸湾第２期ハ地区（富岡地先）埋立事業が「第一次港湾整備５か年計画（1961～’66 年）」、および「横浜港改訂港湾計画（1961 年４月１日運輸大臣承認）」で示された。根岸湾埋立第２期計は東京電力と東京ガスなど、埋め立て地のエネルギーをまかなう施設の誘致が計画されていた（若林, 2000）。根岸湾埋め立てはまさに工場用地のための埋め立てであり、この第２期ハ地区は大型車両工場、精密機械工場を誘致する予定であったが、1963（昭和 38）年４月の市長選挙で当選した飛鳥田一雄候補の当選で、大企業誘致から中小企業団地造成による市街地改造への方向転換が示された。また、1965（昭和 40）年５月 17 日に、この地区に関連する富岡・柴・金沢の三漁協との間で漁業補償交渉が妥結し、1967（昭和 42）年、工事着手。２度の設計変更を経て 1971（昭和 46）年に竣工許可が出た。以下に主な内容を記す。

１．埋立面積　　145 万㎡、

２．埋立高　　＋3.6m（基準面：TP－1.079m）

３．埋立土量約 1700 万㎥
４．工事費 31 億 7500 万円

２）採土計画と反対運動

ハ地区埋立計画では、埋立予定区域背後の金沢区富岡町国有地の丘陵を土取場としていたが、この国有地が米軍接収地の「富岡倉庫地区」であったことから、横浜市は接収解除を各方面に陳情していた。しかし、防衛庁からこの地区の自衛隊駐屯地の計画があることが明らかにされたため、市は接収地前面の埋め立てに関する米軍の了解を得る方向で動き出した。その結果、代替物揚場および連絡道路の建設と連絡道路の適切な規制等の措置を持って合意に至った。代替物揚場および連絡道路の工事は 1969（昭和 44）年に完成している（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

図 3-51　根岸湾「ハ地区」埋立土地利用計画図
（横浜市埋立事業局, 1970）

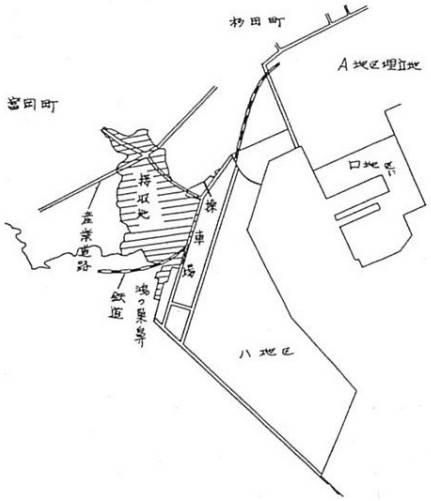


図 3-52　富岡町接収地及びハ地区埋立計画参考図
（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）

図 3-53　称名寺史跡の指定（横浜市教育委員会，1988）

ハ地区埋立で使用する土の採土に関しては、もう一つの計画があった。1966（昭和 41）年１月、西武鉄道㈱不動産部はすでに着工済みの金沢区西柴、谷津町方面の宅地造成を、さらに称名寺結界図にのっている日向山、稲荷山、金沢山の三山を含む一帯にまで拡張する計画を決めた。称名寺は 1921（大正 11）年 10 月に史跡指定を受けたが、指定されたのは中心地のみで、称名寺裏にある山林は寺院の一部として景観上も重要であったにもかかわらず、史跡指定の対象外となってしまった。史跡指定外になるという指定領域の狭さ故に、当時の称名寺の住職が寺院経営の苦しさから寺領の一部を西武鉄道㈱に売却してしまうという事態に至ったのである。これに異議を唱えたのが横浜市である。横浜市教育委員会と建築局は史跡および環境保全の立場から計画の変更を求めた。しかし、この変更には、ここから出る土丹岩をハ地区埋立工事用として、造成地からベルトコンベアで仮設桟橋に運び出し、船で埋め立て区域まで運搬するという目論みがあった。その結果、1967（昭和 42）年５月７日、横浜市はこれ以上の宅造許可延長は不可能と判断し、西武鉄道㈱に前期修正案による宅地造成を許可してしまった。これに異を唱えたのは「称名寺保勝会」（宇野忠夫会長）などの地元住民でつくるグループであった。さらに、横浜市立大学の歴史学科の学生が、称名寺結界図に基づいて三山の史跡としての重要性を主張し、宅造反対運動を行った。そして 1968（昭和 43）年６月、飛鳥田市長は宅造工事の中止を勧告し、国・県・市 vs 西武鉄道㈱の交渉は佳境を迎えた。交渉の結果、①現状の確保②三山稜線の取崩しを山の法尻で凍結する③実時公墓の前面道路は認めない。道路は三山の法尻の北部とする、との三つの条件で行為に達した。結局、ハ地区埋立工事では。ポンプ式浚渫船によ

る浚渫土砂とともに、この開発地の山土が使用された（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

（３）平潟湾埋立計画（現金沢区柳町）

１）泥亀新田（蓮田）埋立

金沢区の泥亀新田（蓮田）地帯は早くから宅地開発が望まれていたにも関わらず、戦後の食糧難によって農地改良事業が行われ、しばらく営農地として継続してきた。その後、経済復興が順調に進み区内の人口が急激に増加すると、この地帯を宅地造成し、かつ国道16号の改良を行いたいとする動きが起こった。こうして1959(昭和36)年４月、建設省告示第1051号により、都市計画決定されるに至った。実は、泥亀新田地区の農地転用許可を最初に取り付けたのは京浜急行系京急興業㈱（後に京急興業㈱として発展的に解散）であった。京急興業㈱は1966（昭和43）年までにその22haの埋め立てを完了させていた。しかし、この事業に対して横浜市が大幅に介入してきた。1960（昭和35）年３月、蓮田の農地転用許可がおりたが、翌年６月の台風６号により周辺に洪水被害が出たため、このままでは蓮田の埋め立ては困難として、横浜市からの提案もあり、京急興業㈱は従来の計画を変更し、蓮田と寺前・町屋・洲崎町との間に溝をつくり、低地の水を揚水ポンプで汲み出すという方法を取り入れて工事は再開された。1966（昭和41）年３月、約22haの埋め立て工事が完成。同年７月15日、横浜市はここに当時ハス田を迂回するように作られていた国道16号を貫通させ、泥亀バイパスが開通した。埋め立て地の中には、八景団地が造成されたほか、金沢区役所、公会堂、警察署、消防署、郵便局などの公共施設や、銀行、ショッピングセンターなどが設置された（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

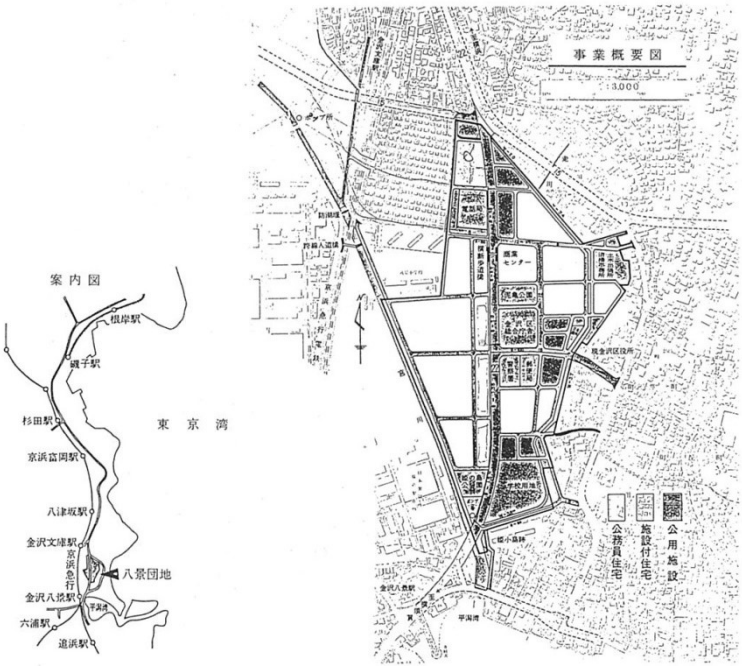


図 3-54　八景団地事業概要図（横浜市計画局, 1966）

２）平潟湾埋立事業

1962（昭和 37）年９月 27 日、平潟湾埋立事業の基本計画が横浜市会に提案された（横浜市会会議録,1962 年９月 27 日）。同年４月 10 日には市と京浜急行鉄道との間で埋立売却仮契約が締結された。平潟湾埋め立ての最大の目的は、人口増加による住宅不足の解消である。また、宅地造成とともに道路、緑地、当該水域およびその周辺を整備することによりこの地域の風致の向上と効果的利用を図るとしている。計画の内容は以下に記す。

１．施工位置　　平潟湾水域（金沢区洲崎町、平潟町、乙舳町、野島町および六浦町によって囲まれた水域）
２．埋立面積　　23 万 2,280 ㎡（約７万坪）
３．埋立土量　　96 万㎥
４．埋立計画高　　＋3.00m～3.20m（横浜港基準面上）
５．護岸延長　　2,345m
６．工事期間　　２年６ヶ月（1962 年 10 月～1965 年３月まで）
７．埋立地の利用　　道路、緑地に充てるほか、周囲の風致に即応した住宅等
８．事業費総額　　11 億円

なお、この埋め立てによって造成された地区は新しく「柳町（やなぎちょう）」として編成された（横浜市港湾局臨海開発部,1992）。

平潟湾の埋め立て工事では、湾の半分の泥をさらい、あとの半分を、その浚渫土砂と山地で陸地にする、という工法がとられた。浚渫土とともに埋め立てに用いられた山土の土取場は、当時並行して進められていた宅地開発事業などで、根岸湾第２期ハ地区埋立計画でも用いられた金沢区長浜および釜利谷町であった。

埋め立て地の利用については、主たるものは住宅地であった。住宅地に関しては京浜急行電鉄㈱により、金沢八景平潟ニュータウンとして建設された。概要は以下のとおりである。

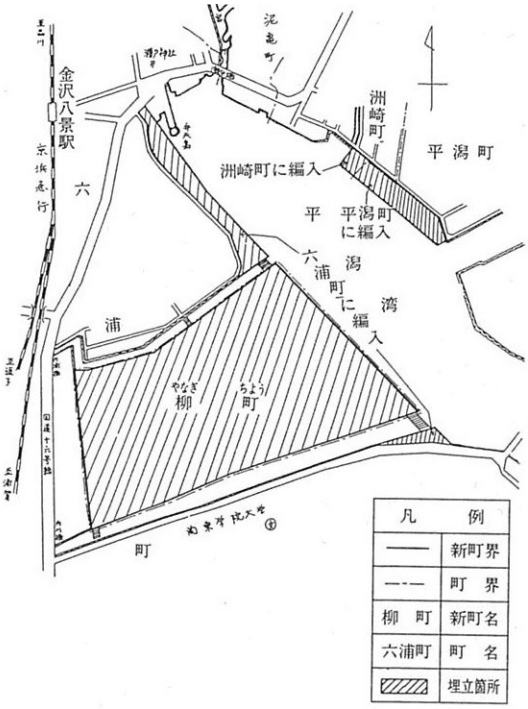


図 3-55　平潟湾埋立位置図
（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）

１．総面積　　181722.1 ㎡,
２．宅地区画数　　435 区画
　　最大 883.65 ㎡、最小 188.81 ㎡、平均 317.35 ㎡
３．道路総延長　　4857.3m
４．緑地　　602.64 ㎡

また、金沢八景公園、洲崎公園という二つの公園が新たに造営された。金沢八景公園の中には青少年のための図書室、結婚式場等をそなえた施設として金沢八景記念会館が建設された。しかし、近年における公共結婚式場の利用率低下に伴い、1986（昭和 61）年３月より老人利用施設「晴嵐荘」として衣替えされた（横浜市福祉文化事業団, 1987）。

３）反対運動

平潟湾埋立事業埋め立て計画の策定にあたっては、地元六浦町にキャンパスをもつ関東学院大学は市長および市議会議長宛に埋め立て反対の旨の陳情を行っている。その理由としては①古来よりの名勝の地を著しく縮小させ、原形を失わしめるものである②今後ますます必要となる青少年のスポーツ・レクリエーションの場を失う③大都会における水の中の公園としての機能を著しく損壊し、都市計画の将来案に逆行する、などが焦点となった。一方、1962（昭和 37）年 11 月８日には、六浦町民有志からも反対陳情が出されている。景勝地が失われる恐れがあること、というのは関東学院大学と共通の事項だが、もう一点、豪雨の際の調整池としての機能が低下することであった。なお、当該地域に漁業権をもつ金沢漁業組合との漁業補償交渉は、1963（昭和 38）年３月 26 日にまとまっている（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

（３）金沢地先埋立計画

１）計画の経緯

1966（昭和 41）年に策定された横浜国際港都総合計画では、金沢地先を都心再開発用地として、埋め立て地を造成し、土地利用の強化、郊外の防止を図るため、市内の工場を組織化させて収容することを目的としていた。そのため、横浜市では金沢地区埋立事業準備費を計上し、数年前から富岡町町地先地質調査、富岡町地先水際線協会測量などを行っていた。しかし、この事業は従来の工場誘致ではなく、都心再開発を目的としていたため、分譲土地代金の予納形式は取れず、市は工事費の調達に苦心していた。そんな中、民間の開発企業が金沢周辺海域に漁業権を持つ富岡・柴・金沢の３つの漁業協同組合に対して、埋め立て造成の同意を得るべく交渉に入ったとの情報がもたらされた。仮にこの交渉が成立してしまえば、市が構想を練っていた都心再開発計画は無となるため、財源確保のために奔走した。幸い、ドイツマルクの導入に成功し、財源確保の見通しもついたため、1968（昭和 43）年、金沢地区埋立事業準備から本格的な事業の実施段階に入った（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

表 3-19　金沢地埋立計画の経緯概要（横浜市港湾局臨海開発部，1992）

横浜国際港都総合基幹計画改訂案	横浜の都市づくり	横浜国際港都建設総合計画	6大事業としての金沢地先埋立事業
1963年3月	1965年10月	1966年5月	1968年7月
1.臨海工業用地造成 造成面積　331 ha 工場用地　264 ha 公共用地　67 ha 2.金沢地先埋立地に関連する宅地造成 造成面積　463 ha 住宅用地 435.28 ha 公園用地　27.72 ha	〔目的〕 市街地再開発のための工場移転用地の造成. 〔埋立面積〕 660 ha (200万坪) 〔利用計画〕 工場用地　約100坪 産業関連住宅用地および公園用地　約100万坪 その他，埋立土砂採掘のあとの富岡台に約100万坪の住宅団地造成. 埋立費用　約300億円 団地造成地　約160億円	〔目的〕 既成市街地の合理的改造を図る. 〔面積〕 埋立面積　462 ha 住宅用地　132 ha 都市再開発用地 295 ha 交通機関用地　35 ha 〔事業費〕 276億円	〔目的〕 工場用地，住宅用地，公共用地の造成注. 〔埋立面積〕　660 ha 再開発用地　430 ha 公共用地　65 ha 住宅用地　100 ha 公園用地　65 ha 〔事業費〕 約412億円 〔事業年度〕 '68～'72年度 〔マルク債〕 288億円発行予定 ('68～'71年度) 〔護岸延長〕 約8 000 m 〔埋立土量〕 6 000万m^3

（注）　工場用地は，都市再開発のための工場移転用．公共用地は，海の公園など．

２）計画の前身

この計画には前身となった出来事がある。この地域は戦前から軍の司令によって埋め立てがすすみ、軍事施設などが建設されていた。戦後まもなくは米軍の占領下にあったが、1949（昭和24）年、富士自動車㈱が米軍追浜航空隊の車両再生業務を行うことによって、野島地先の帰属をめぐる横浜市と横須賀市の対立が始まったのである。これは、富士自動車㈱の課税配分が問題となったからであった。1959（昭和34）年、神奈川県知事の斡旋

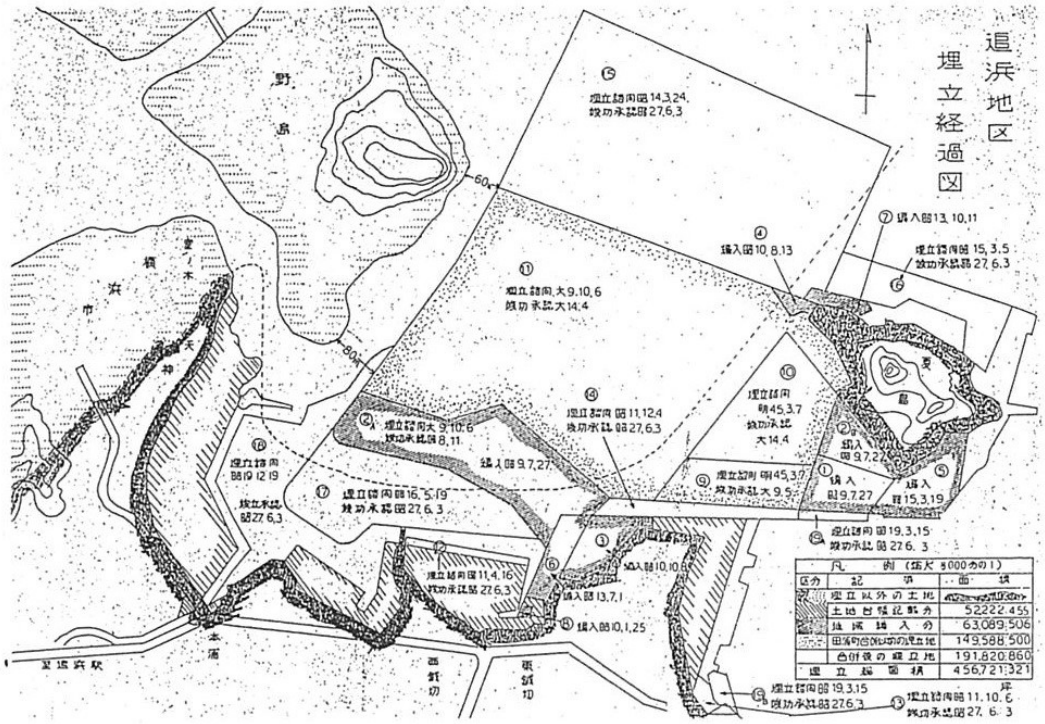


図 3-56　追浜地区埋立経過図（神奈川県，1959）

により、両市の間で協定書が結ばれた。この協定書によって、同地区が横須賀市に編入されることになり、横浜市にとっては不満が残る結果となった。この協定は金沢地先埋め立てが完了間近の 1980（昭和 55）年頃、再び両者の間で再び境界線変更の協議が成されることになるが、1984（昭和 59）年１月、県の調整案に基づき、両市が港湾区域を拡張し、この地区の空白区域の存在は解消されることになった（横浜市港湾局臨海開発部, 1992)。

３）計画の概要

1965（昭和 40）年 10 月、横浜市は「横浜の都市づくり」という冊子の中で、金沢地先埋立事業の基本的な考え方を市民に示した。その考え方を支える６つの基幹事業として、

都心部強化事業　　金沢地先埋立事業　　港北ニュータウン建設事業
高速道路網建設事業　　高速鉄道（地下鉄）建設事業　　ベイブリッジ建設事業

の六大事業を挙げている。金沢地先埋立事業については、横浜に残された最後の自然海岸を埋め立てるのであるから、一時的な財源収入を目的とした、大企業への造成地切売りのみに終わるような事業はしないとして、

①都心部強化の一環としての工場移転用地に充て、都心に立地するにふさわしい近代的な工場団地を形成する
②工場立地だけでなく、工場関連従業員の住宅、あるいは都市施設整備公共事業などによる移転代替住宅などの住宅団地を造成する
③最後の水際線を使用するのであるから、市民のために、その代替として水際線のあるレクリエーション施設（海の公園, 八景島構想の前身）を建設する
④資金はマルク債を発行してあてる
⑤土地売却からマルク債返済までの資金余裕を、工場移転跡地買収など、都心部強化事業に活用する
⑥海面埋め立ての前提である漁民への対策としては、単に漁業権の金銭補償にとどまらず、海の公園などの埋め立て関連事業のなかでその転業対策をこうじていく

以上６つの性格づけを行っている（横浜市港湾局臨海開発部, 1992)。こうして、金沢地先埋立事業は、それまでの大企業工場誘致型から、都市再開発＝福祉複合型へと転換する埋立事業の典型的な途をたどる（若林, 2000)。

金沢地先埋立事業の対象区域は、金沢区富岡町から乙舳町に至る延長約 7,000m の地先海面である。計画当初の主な概要を以下に示す。

１．埋立面積　　660 万㎡（約 200 万坪）
３．埋立土量　　6,000 万㎥
４．護岸延長　　8,000m
６．工事期間　　５年（1968（昭和 43）年度～1972（昭和 47）年度）

埋め立て面積の利用区分については、

・都市再開発用地　　約 430 万㎡（約 130 万坪）

・住宅用地　　約 100 万㎡（約 30 万坪）
・海の公園用地　　約 65 万㎡（約 20 万坪）
・公共用地　　約 65 万㎡（約 20 万坪）
以上の４つに分けられた。

埋め立て工事については、工区を３つに分けて行うこととなった。その理由として①事業の経済性の確保②防災上の理由③早期着工の可能などであった。３つの区分については、１号地は再開発用地地区（工場の移転先としての用地）で、木材センター、三菱重工業横浜造船所の移転先、下水処理場が置かれた。２号地は富岡川から長浜水路までを範囲とし、流通関連用地、中小工場用地、清掃工場、下水処理場の一部、貨物ヤードが置かれ、３号地は主に中小工場用地となった（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

４）２回の計画変更と反対運動

金沢地先埋立事業は、原計画が発表された 1968（昭和 43）年以降、1971 年と 1974 年の二度の設計変更が行われている。

第１回目の変更は、漁業補償交渉の遅れや、社会的・経済的情勢の変化に起因する。当初、漁業関係者から激しい反対運動があった。交渉にあたっては、当時の飛鳥田市長自ら話し合いの場を設けるなどの試みがあったものの、交渉は難航。結局、数度の交渉を経て、富岡・柴漁業協同組合とは組合共通事項〈埋立里譲渡、交渉経費、職員退職金等〉を除き詳

表 3-20　金沢地埋立事業変更計画の経緯（横浜港振興協会横浜港史刊行委員会，1989）

		1968 年原計画	1971 年変更計画	1974 年変更計画	備　考
計画概要	埋立て面積(ha)	660	660	660	
	埋立て土量(千㎥)	60,000	68,000	68,000	
	護岸延長(m)	8,090	13,325	13,782	
事業年度		1968～72 年度(5 カ年)	1968～77 年度(10 カ年)	1968～81 年度(14 カ年)	
事業費	工事費(千円)	25,600,000	(4,700,000) 56,240,000	(18,923,000) 117,448,000	(　)内は物価上昇引当金で内数
	補償費(千円)		12,000,000	12,000,000	
	管理費(千円)	7,900,000	3,400,000	6,074,000	
	公債諸費(千円)	7,789,014	20,529,000	42,166,000	
	計(千円)	41,289,014	92,169,000	177,688,000	
変更の要因			1. 漁業補償交渉が当初予定より遅れた。 2. 環境整備のための投資額を大幅に増加した。 3. 労務費，材料費等の物価上昇に対応できる措置を取り入れた。 4. 海の公園の形状と規模に新しい構想を取り入れた。	1. 継続費予算を経済実勢に合わせる必要が生じた。 2. 埋立て免許の遅れによる事業年度の延伸 3. 埋立て用土砂の入手先変更 4. 1975 年度以降 3 カ年にわたる起債計画	

細協議が成立。1970（昭和 45）年、内金の支払いが行われた。一方、一部組合員からの反対が残っていた金沢漁業協同組合も、富岡・柴漁業協同組合の詳細協議成立を知り、組合員が補償金の早期受領を強く希望しはじめたため、同年 11 月 19 日に交渉再開となり、1971（昭和 46）年１月、全漁業協同組合との補償交渉がまとまった。ようやく埋め立て事業は実現に向かうものと思われたが、しかし、市民の反対運動が強まるのは。むしろそれ以降であった。

1971 年の計画変更案は「計画事業年度も費用も倍増」しているということで各方面に衝撃を与えた。住民に反対運動が強まり、「金沢の自然と環境を守る会」（高間惣七代表、以下「守る会」と略す）も結成されたのである。守る会は市長ならびに市議会議長あてにこの変更案の再検討を求めたが、結局、付帯意見付きの賛成多数で可決されたのが

①厚生省長浜措の景観を残し、これに人造湖、緑地、サイクリングロードを配した公園を造成する
②質疑のなかで問題となった移転工場の公害問題、埋め立て用山土の採取問題などを審議する「金沢地先埋立問題協議会」を設け、その意見を事業の遂行に反映させていく

などを骨子としていた。さらに、1973（昭和 48）年５月、横浜市は京急電鉄㈱による釜利谷地区の大型宅地開発を許可したが、その排土を金沢地先埋め立てに無償で提供することを条件としたことから、二重の環境破壊に繋がるとして、釜利谷地区の宅地開発とともに再度計画の中止を求めた。しかし、同年 10 月 16 日、県知事より建設大臣あてに埋め立ての許可申請が出された。これは東京湾地域整備連絡会議（通称六省庁会議＝建設、運輸、通産の各省および経済企画の各庁、首都圏整備委員会からなる）にかけられ、その結果、横浜市の計画は環境・福祉面で十分な配慮がされているとし、また、もっとも慎重な態度をみせた環境庁も、①下水の三次処理②工場移転や宅地化による排水を東京湾に出さない③反対住民とのさらなる話し合い、を行うことを条件に認めることになった（読売新聞, 1974）。こうして 1974（昭和 49）年３月 11 日、建設大臣によって認可され、14 日には県知事からの埋め立て許可も下り、同年 12 月、２回目の設計変更案が議決された（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

表 3-21　横浜市における埋立事業の変遷と漁業補償（横浜市漁業問題研究会，1978）

埋立て事業名	埋立て面積	事　業　費	補償交渉経過	補　償　金　額	備　　考
大黒町地先埋立て	79 ha	17 億円 （1955～60 年度）	1955.6　交渉開始 1958.8　子安浜，西神子安浜，妥結 1958.9　生麦妥結	子安浜，西神子安浜　15,000,000 円 生　　麦　3,000,000 円	対象組合　3 組合　672 人
山下埠頭建設	35 ha	82 億円 （1957～67 年度）	1958　計画説明 1958.9　北方妥結 （特別整備工事） 1968.2　〃	北　　方　6,886,000 円 〃　4,138,000 円	対象組合　1 組合　50 人
根岸湾埋立て	470 ha	165 億円 （1959～64 年度）	1956　「根岸湾問題協議会」設立 1959.1　7 組合と妥結	根岸湾，屏風浦，生麦，本牧，富岡，柴，金沢　1,485,890,382 円	対象組合　7 組合　1,356 人
根岸湾 「ハ地区」埋立て	144 ha	91 億円 （1967～70 年度）	1964.5　交渉開始 1965.5　3 組合と妥結	富　　岡　582,000,000 円 柴　207,875,000 円 金　　沢　120,625,000 円	対象組合　3 組合　394 人 進出企業　169 社 （大企業 14 社，中小企業 155 社） 丸善石油，石川島播磨重工業，中央卸市場，トヨタ自動車販売，リバースチール等
本牧埠頭同関連産業用地造成	512 ha 本牧埠頭　341 ha 関連産業用地 171 ha	553 億円 埠　　頭　350 億円 産業用地　203 億円 （1963～69 年度）	1962.1　交渉開始 1963.4　本牧，北方，生麦　妥結 1963.9　子安浜，西神子安浜　妥結 1964.3　屏風浦，根岸，富岡，柴　妥結	9 組合　4,001,550,000 円	対象組合　9 組合　1,362 人
大黒町埠頭建設	220 ha	1,130 億円 （1971～78 年度）	1968.9「京浜港中央地区漁業対策実行委員会」設立 1969.11　交渉開始 1971.6～9　妥結	子安浜，西神子安浜　8,417,860,000 円 生　　麦　8,181,250,000 円 川崎漁協（8 組合）　3,943,900,000 円	対象組合　4 組合　878 人 扇島東埠頭建設計画発表 （1968.11　川崎市） 扇島地先埋立て計画発表 （1969.3　日本鋼管 KK）
平潟湾埋立て	24 ha	11 億円 （1963～65 年度）	1962.10　交渉開始 1963.3　妥結	金　　沢　170,000,000 円	対象組合　1 組合　162 人
金沢地先埋立て	660 ha 1 号地　193 ha 2 号地　170 ha 3 号地 海の公園　297 ha	1,776 億円 （1968～81 年度）	1969.1　交渉開始 1970.2　妥結	金　　沢　2,408,040,000 円 富　　岡　2,023,962,000 円 柴　5,849,256,000 円	対象組合　3 組合　458 人

５）土地利用計画の概要

「横浜市金沢地先埋立地利用基本計画報告書」(1969 年 6 月,㈶日本工業立地センター)では、土地利用計画の基本パターンを緩衝地帯型とし、基本方針に基づき、当初の計画から二度の変更を経て最終的に以下のような利用区分が定められた。

・都市再開発用用地　　258ha（約 78 万坪）39%

・住宅用地　　82ha（約 25 万坪）12%

・海の公園用地　　70ha（約 21 万坪）10%

・公共用地　　250ha（約 76 万坪）39%

金沢地先埋立事業には、市の内部でもさまざまな部課が関わっており、その他多くの建築家やさまざまな事業主体も参加している。

６）都市再開発用地地区の利用

a）都市再開発用用地

都市再開発用地地区の利用は以下のとおりである。

①都市部散在の立地不適当な工場移転用地

②都市施設用地

③工場団地の環境保全用地（工場従業員休憩緑地、水際線緑地等）

④地区全体に必要な諸施設（道路等）

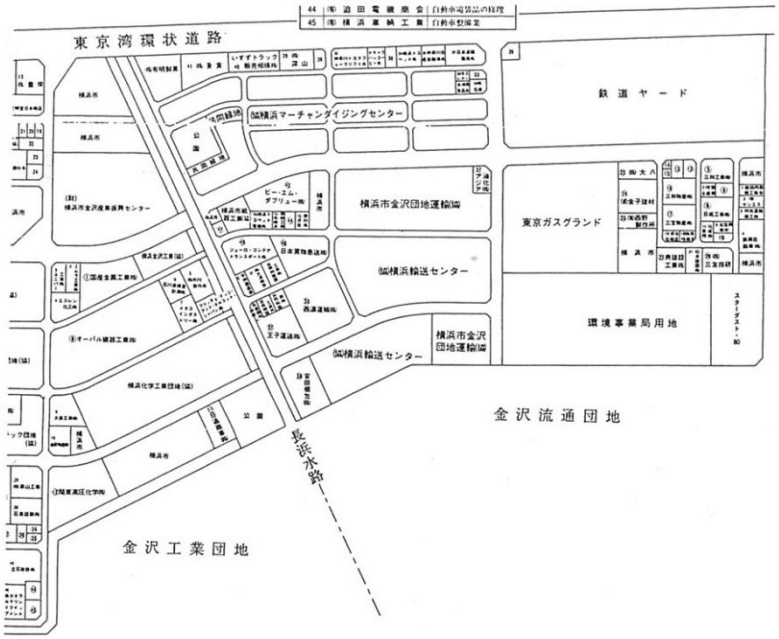


図 3-57　金沢流通団地配置図（横浜市経済局，1973）

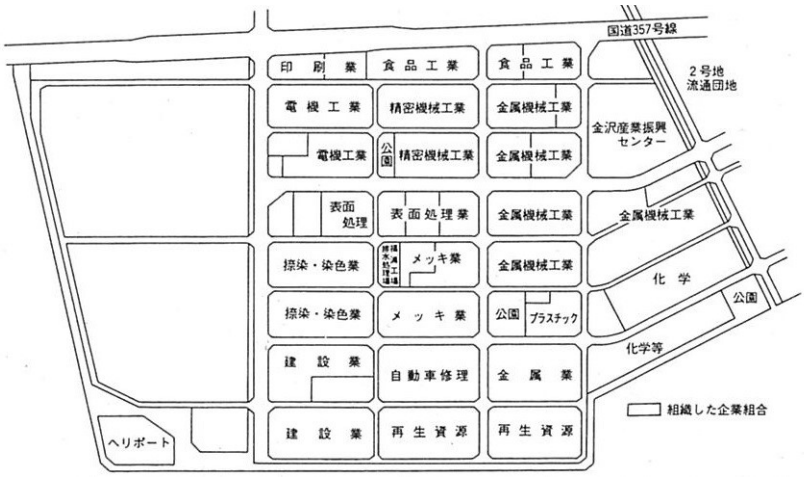


図 3-58　金沢工業団地移転事務所の業種別内訳（横浜市経済局商工部，1986）

具体的には、金沢工業団地を３号地に配置し、その移転の対象となる企業は、市内に工場などを有する中小企業者で、製造業、修理業、加工業者などを営むもの、および木材団地関連業種、流通業務関連業種とすること、三菱重工業横浜造船所を１号地内に移転させること、同じく１号地内に新山下町貯木場に代わる新木材港と、木材地場産業の育成と既成市街地の再開発を目的とした木材センターを設けることなどであった。三菱重工業横浜造船所が金沢地先埋め立て地へ移転し、その跡地と前面区域の埋め立てにより「みなとみらい 21 計画」が実現。横浜の新しいウォーターフロント開発が可能になった。その他、金沢ポンプ場や排水処理場、ヘリポートなども計画された（図 3-58）（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

b）住宅用地

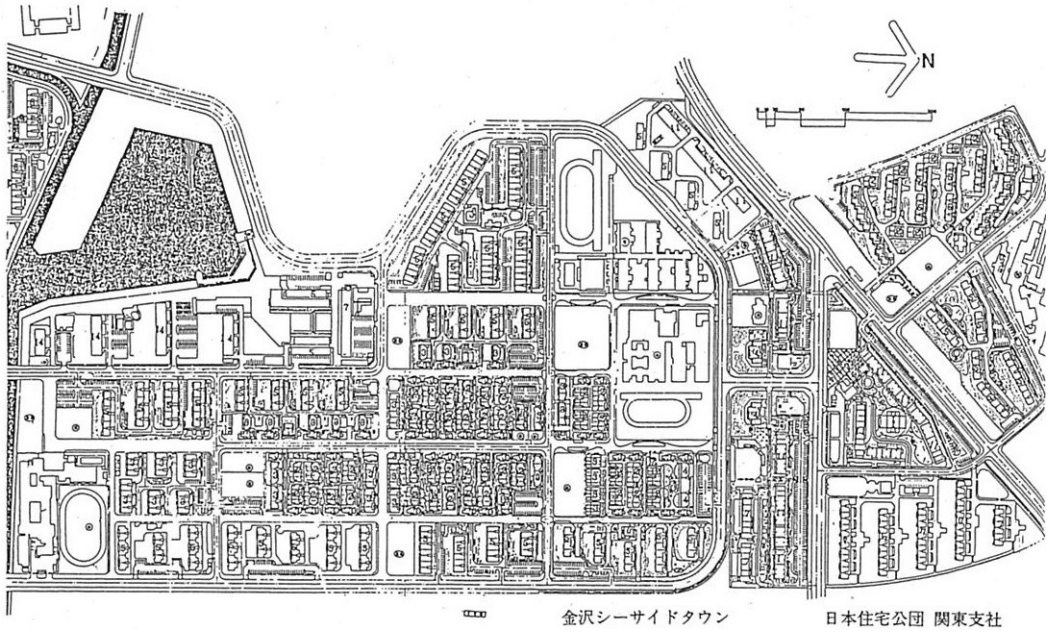


図 3-59　金沢地先埋立地 1 号地住宅地全体配置図（横浜市港湾局臨海開発部，1992）

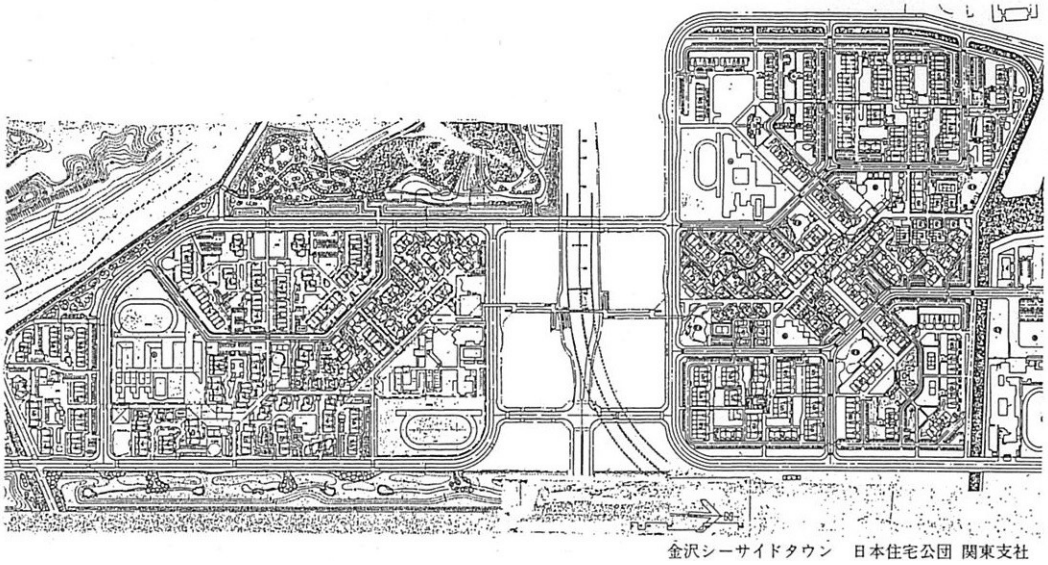


図 3-60　金沢地先埋立地 2 号地住宅地配置図（横浜市港湾局臨海開発部，1992）

住宅用地に関しては、『金沢地先埋立事業』（横浜市埋立事業局パンフレット，1968 年 7 月 23 日）に「都心地区の強化、都心施設整備に必要な住宅移転用地と臨海工場従業員の住宅用地を確保し、一般公共住宅も考えることとします。計画人口は約 17,000～20,000 人となります」とされている。計画人口については後に約 30,000 人まで拡大され（金沢埋立事業について，横浜市都市開発局，1976 年 7 月，p．3）、同時に質的に高居住環境を実

現するため、アーバンデザインが取り入れられた（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

アーバンデザインについては、横浜市が造成した土地に、一部市営住宅を除き、住宅の建設は複数の事業者が行うことになっていたため、全体に均整のとれた落ち着いたまつなみを形成すべく、導入された。内容については、一定のブロックごとに①建蔽率・容積率②緑地や道路の位置③建物の形状と色彩、などの基準を決めた。当時、市にはアーバンデザイン担当チームがなかったので、建築家の槇文彦氏がこれにあたった（田村, 1981）。

c）海の公園用地－海の公園と八景島の開発―

海の公園用地は、既存の水際線よりの浜辺と沖合の島からなるレクリエーションエリアで、1986（昭和 61）年 10 月 31 日、人工砂浜のある方を「海の公園」、人工島の方を「八景島」と命名された。この計画が発表されたのは 1971（昭和 46）年２月、「海の公園基本構想」においてであった。都市の過密化に伴う市民生活阻害の解消と市民の要望にこたえる形で構想されたこの計画では、陸側を静ゾーン、東京湾側を動ゾーンとし、静ゾーンには人工砂浜を設け、新旧海岸線の間を緑化して、花園、芝生公園を点在させ、島と陸の間に挟まれた海域にはボートの遊び場とし、動ゾーンにはフィッシングボート、ヨットハーバー、プールなどのレクリエーション施設を設けて、島の沖側先端を山下公園風の臨海公園とする、というものだった。もともとエリアは江戸時代後期より潮干狩りが楽しめ、戦前は海水浴場としても人気の自然海岸であった。そのため、地域住民からの期待と不満を大きかったに違いない。海の公園基本構想は発表当初から話題を集め、さまざまな議論を

項目			原構想	新構想
規模	面積 (70ha)	島部	40 ha	約 24 ha
		浜部	30 ha	約 46 ha
	島の位置		金沢湾奥	金沢湾中央
	内海		面積 23 ha	面積 約 110 ha
	砂浜延長		300m, 360m の 2 か所 幅は干潮時で約 140 m	約 1 000 m 幅は干潮時で約 200 m

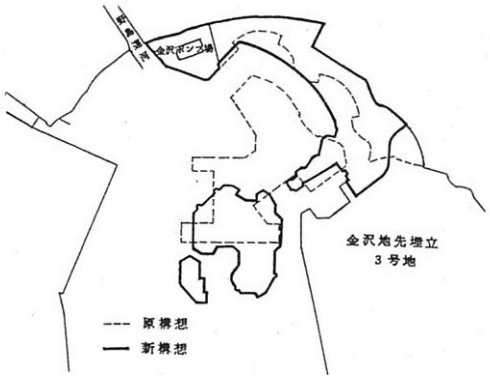


図 3-61　海の公園・八景島の原構想と新構想（横浜市港湾局, 1978）

巻き起こした。こうした人工砂浜で自然が再生されるのか、浜と島の間の水路が狭いため水質汚濁を引き起こすのではないか、といった不安の声も多く上がった。これを受けて市では再検討を重ね、1978（昭和 53）年２月に、

①浜の拡大と砂浜の充実

②砂浜前面海域の拡大

③島の沖合への移動と面積の縮小（ただし、浜と合わせた総面積 70ha かわらず）

の三点の変更を加えた「新基本構想」を発表した。変更の背景には、東京湾環状道路など

幹線道路のルートの再検討、潮干狩りのできる砂浜への期待、周辺海域への汚染を避けようとしたこと、などがあった。「新基本構想」により、海の公園だけが 1980（昭和 55）年７月に先にオープンした。人工砂浜の養浜砂は、埋め立てにも用いた千葉県浅間山の山砂を利用した（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

d）公共用地

・緑地計画

金沢埋め立てでは以下のような形で「緑のネットワーク」を計画した（図 3-62）（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

①旧水際線沿いの公園（約 534ha）：富岡総合公園、富岡八幡公園、長浜公園、まつかぜ公園

②住宅地と工場団地の緩衝緑地帯（約 15ha）：金沢緑地

③水際線緑地（約９ha）：（仮称）：金沢海辺の散歩道

④直接自然の海とふれあい親しむ自然公園としてのレクリエーション拠点（約 46ha）：海の公園

⑤施設を活用し、自然と海と人とのかかわりを知るため、にぎわいのあるレクリエーション拠点（約 24ha）：八景島

⑥野島公園

・交通施設

金沢区周辺の交通難を解消するため、根岸湾ハ地区から海の公園を経由して、平潟湾周辺に計画中の泥亀釜利谷線や、六浦平潟湾線などの都市計画路線に連絡するバイパス

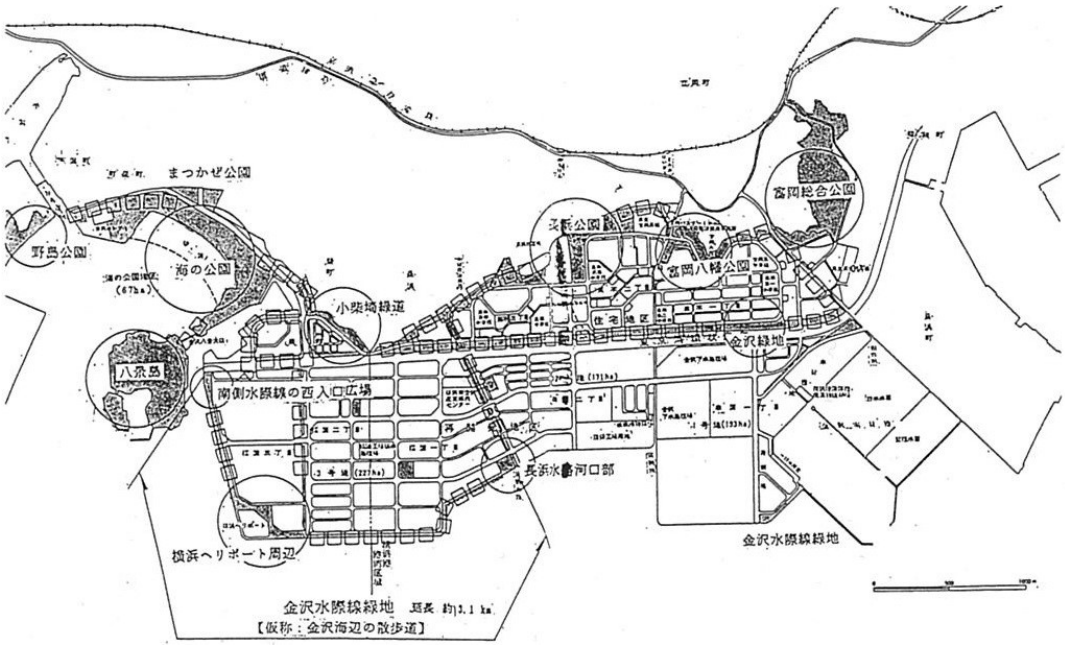


図 3-62　金沢地先埋立地 緑のネットワーク（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）

を計画した（図 3-63）（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

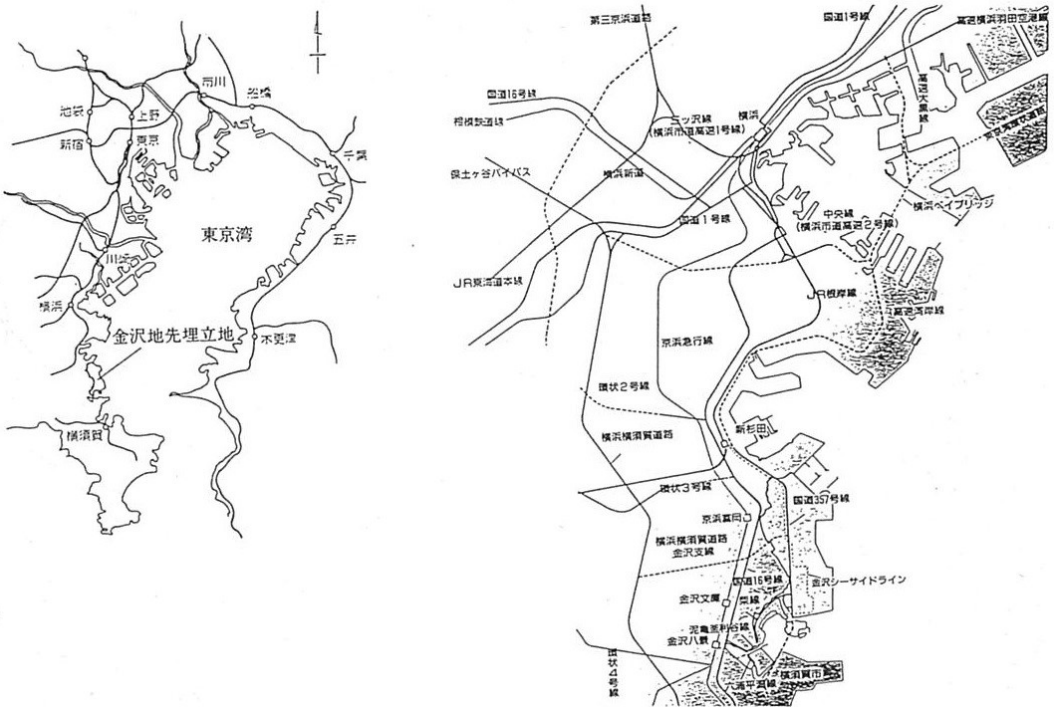


図 3-63　金沢地先埋立地周辺道路網図（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）

また、埋め立て地に居住する人、働く人、海の公園や横浜市立大学病院などの公共施設を訪れる人々のために、ガイドウェイ式の新交通システム（金沢シーサイドライン）が計画され、1989（平成元）年 7 月に開業した（図 3-64）（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

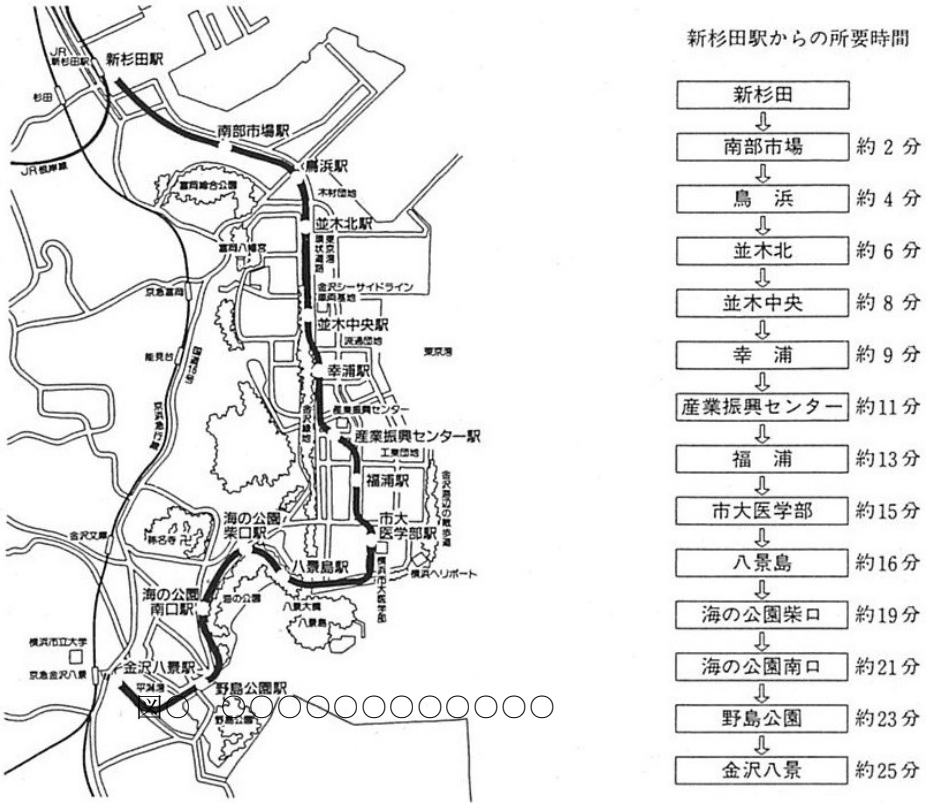


図 3-64　金沢シーサイドライン路線図（横浜市・横浜新都市交通㈱, 1989）

7）資金計画

金沢地先埋立事業では、大企業誘致のための土地造成と異なり、都市型産業に適した中小企業用地の提供に重点がおかれていたため、予納金などの収入を見込むことは出来なかった。そこで、1968（昭和 43）年度から 1972（昭和 47）年度までの総事業費 412 億 8901 万余円のうち、先行投資となる 228 億円について外国債の導入を図るべく、大蔵省に資金導入の可能性を打診した。そこで使われたのが、ドイツマルク債である（表 3-22）。ドルが下落傾向にあり、ドイツマルク債は長期金利（15 年, 年 6.75%、ちなみに国内債では 7 年, 最高条件でも年 7.3%）ということで採用された。当初、マルク債の発行は 4 回の予定であったが、工事の遅れと金融情勢の変化から国内債のほうが金利が安くなり、さらに外積のだぶつきから政府が外債発行を認めなくなってしまったため、3 回で打ち止めとなった（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）。

表 3-22　金沢地先埋立事業企業債の明細（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）

種類	発行年月日	発行総額(円)	償還高(円) 当年度償還高	償還高(円) 償還高累計	未償還残高(円)
根岸湾海面第2期(ハ地区)埋立事業					
横浜市第373回事業公債	1967. 3.31	500 000 000	31 000 000	124 000 000	376 000 000
横浜市第393回事業公債	'67.11.30	200 000 000	12 000 000	36 000 000	164 000 000
横浜市第400回事業公債	'68. 3.25	300 000 000	18 000 000	54 000 000	246 000 000
横浜市第425回事業公債	'69. 1.25	118 000 000	7 200 000	14 400 000	103 600 000
横浜市第430回事業公債	'69. 2.28	200 000 000	12 000 000	24 000 000	176 000 000
横浜市第431回事業公債	'69. 3.25	182 000 000	11 000 000	22 000 000	160 000 000
小計		1 500 000 000	91 200 000	274 400 000	1 225 600 000
金沢地先埋立事業					
第1回横浜市ドイツマルク公債	'68. 8.26	(9 396 000 000) 100 000 000*	(554 541 986) 6 000 000*	(1 330 241 844) 14 000 000*	(8 080 560 000) 86 000 000
第2回横浜市ドイツマルク公債	'69. 9.26	(9 396 000 000) 100 000 000*	0	0	(9 396 000 000) 100 000 000
第3回横浜市ドイツマルク公債	'71. 8.16	(9 396 000 000) 100 000 000*	0	0	(9 396 000 000) 100 000 000
横浜市第14回事業公債	'73. 3.24	1 500 000 000	0	0	1 500 000 000
横浜市第15回事業公債	'73. 3.30	3 500 000 000	0	0	3 500 000 000
小計		33 188 000 000	554 541 986	1 330 241 844	31 872 560 000
計		34 688 000 000	645 741 986	1 604 641 844	33 098 160 000

種類	発行価額	利率(年%)	償還終期	備考
横浜市第373回事業公債	100円につき 99円75銭	7.3	1973年度	中央卸売市場会計にて償還
横浜市第393回事業公債	100円につき 99円75銭	7.3	'74年度	
横浜市第400回事業公債	100円につき 99円75銭	7.3	'74年度	
横浜市第425回事業公債	100円につき 99円35銭	7.3	'75年度	
横浜市第430回事業公債	100円につき 99円35銭	7.3	'75年度	
横浜市第431回事業公債	100円につき 99円35銭	7.3	'75年度	
小計				
金沢地先埋立事業				
第1回横浜市ドイツマルク公債	99%	6.75	'83年度	
第2回横浜市ドイツマルク公債	96.5%	7.00	'84年度	
第3回横浜市ドイツマルク公債	100%	8.00	'86年度	
横浜市第14回事業公債	100円につき 99円30銭	6.8	'83年度	
横浜市第15回事業公債	100円につき 99円30銭	6.8	'83年度	
小計				
計				

(注)　*：単位はドイツマルク.
ドイツマルク公債の発行総額及び未償還残高欄の(　)は，それぞれのマルク建金額を1ドイツマルク＝93円96銭(1973年3月30日・金曜日の実勢レート)で換算した額であり，また，償還高欄の(　)は送金時における外国為替相場で円換算した額である.

（4）民間企業の宅地開発

1950（昭和25）年9月号の『月刊よこはま』（横浜市文化政策委員会刊）では、戦前の海軍による埋め立てなどで金沢の美観が失われたものの、非戦災地であったことで経費地

帯の人々が大量に押し寄せ、急激な人口増大で横浜市内でも最大の住宅地になるだろう、としている。この頃の金沢区では、農業は食糧統制解除後、都市部への野菜の供給を主とする農業へと転換しながらもまだかなりの範囲で営まれ、漁業も柴漁港を中心に続けられていたが、戦後の経済復興と宅地化によって徐々に収縮していく。

昭和 30 年代に入ると、首都圏のベッドタウンとして宅地開発の波が押し寄せる。戦前の交通網の発達によって、東京までの通勤通学の足が揃っていたことも大きい。宅地開発のさきがけとなったのは京急興業㈱の富岡地区における宅地造成や、称名寺裏山開発を計画した西武鉄道㈱の進出も、地域に大きな影響を与えた。もちろん大手企業ばかりでなく、さまざまな開発業者が盛んに宅地開発を行った。

当時の民間企業の開発のほとんどが丘陵地を削って階段状の住宅地を造成していくものであり、道路・公園・下水道などの公共施設の整備まで含めた計画はされておらず、緑の稜線をくいつぶす形でのスプロールが広がっていた。

一方で、金沢地先海面の埋め立て計画も大手開発企業を中心に立案されるようになった。1963（昭和 38）年、各社がこの金沢地先埋立計画に乗り出すため、周辺海域の漁業権を持つ富岡、柴、金沢の３漁業協同組合から埋立造成の許可を得るための交渉がはじまった、とする情報がもたらされて、これに危機感を覚えた横浜市は早急な対応に追われることになった。そして、ついに 1974（昭和 49）年に横浜市主導で金沢地先埋立計画が認められることとなった。

1973（昭和 48）年５月、横浜市は京浜急行電鉄㈱が金沢区釜利谷に計画していた宅地開発の計画があることを発表した。しかし、この開発地区の約 28ha の大半が市街化調整区域に含まれているとのことで、周辺住民による反対運動が起こった。住民らは、なぜ市がこの計画に許可したのかについての説明を求めたが市からの回答は

①「開発面積」は 181ha、うち宅地は 41ha

②調整区域開発 275ha のうち、62％を緑地として残す

③緑地のうち、66ha は２分の１の価格で市が買い取り、「自然動物公園」とする。残った区域は市と契約して「市民の森」とする

④学校、公園、その他の公共施設の提供

⑤能見堂などの史跡やハイキングコースを保存する

⑥通勤通学路を確保し、金沢文庫西口広場の整備も行い、人口は２万人にとどめる

などの条件を出しており、決して安易に開発許可を出したわけではない、と主張した。しかし、この条件の中には「開発による排土を金沢地先埋め立てに無償で提供すること」も求めており（神奈川新聞, 1973 月 11 月 6 日付,「金沢埋め立て/その夢と現実<10>」）、これが「釜利谷の緑を削って出てきた土で埋め立てをする二重の自然破壊」であると、埋め立てに反対の住民の態度をさらに硬化させる要因になった。こうした住民運動がみられるようになった背景には、昭和 40 年代に全国的な広がりを見せた反公害・環境保全の運動が活発になっていたこともあるだろう。

その後、オイルショック（1973）以降の物価の高騰、土地に関する国土利用計画法などの法的措置、新土地税制の実施など、開発事業をとりまく状況が大きく変わったことにより、釜利谷開発の着工の目途は立たなくなった。そこで問題となったのは、では金沢地先埋め立ての土をどこから持ってくるのか、ということである。そこで市は改めて、千葉県浅間山の山砂の利用に動き出した。

浅間山の山砂は、すでに日本鋼管の扇島埋め立て用として総量１億 2500 万トンのうち約 8000 万トンが使われており、同地域の埋め立てをほぼ完成していた。横浜市はこの残土を金沢地先埋め立てに利用しようと目論んだが、川崎市や東京都も利用を希望しており、東京湾岸をめぐる資源争いとして報道されたりもした（朝日新聞, 1974 年 11 月 8 日付）。結局、金沢埋め立てようとして 2000 万㎥が使えることになった。

釜利谷開発のほうは、環境問題をめぐって座り込みから訴訟にまで発展したが、1978（昭和 53）年２月、宅地開発面積は約 180ha で、宅地率を 40.6%にまで切り下げるなどの条件をつけて、ついに開発許可が下りた。排出土砂も金沢埋め立てに利用されたが、当初計画されていた量の 10 分の１程度（約 300 万㎥）であった。

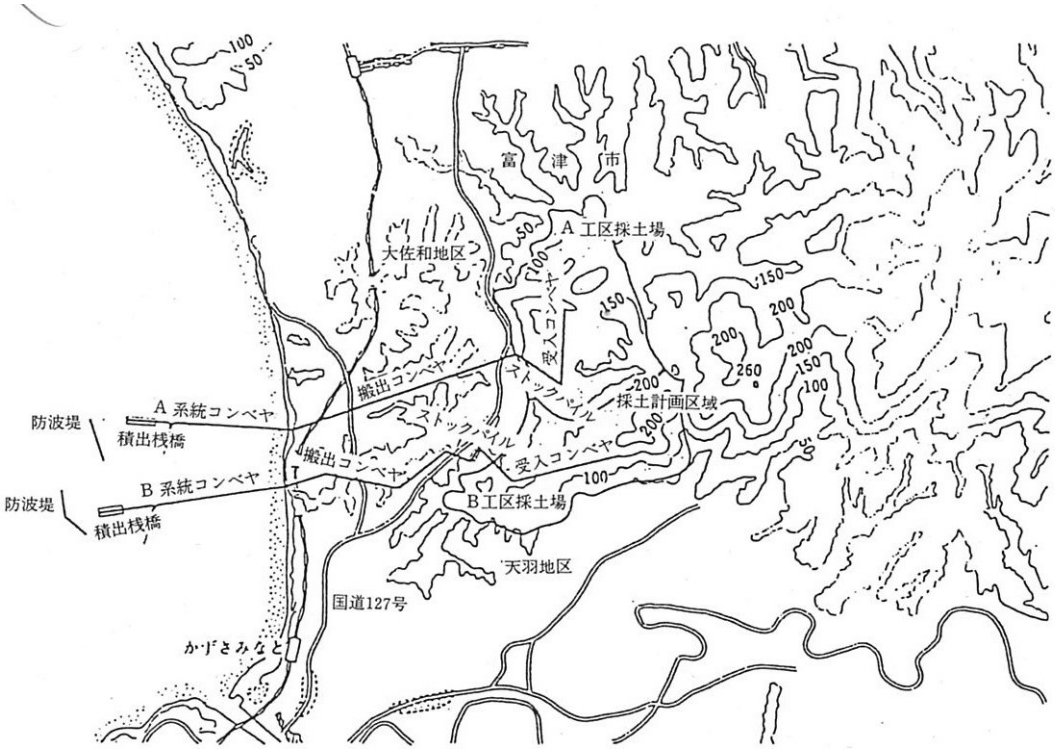


図 3-65　千葉県富津市浅間山開発平面図（横浜市港湾局臨海開発部, 1992）

第４章　考察

4.1　“金沢八景”は失われてしまったか

第２章から第３章にかけて、どのように“金沢八景”ができたのか、どのようにして変化していったのかという景観環境史を整理した。

平潟湾をとりまく地形は、沈降隆起を伴う地殻変動と氷期-間氷期変動による海水面の変化が大きく関わっている。最終間氷期の海進によって古東京湾が形成され、関東平野に下末吉面が堆積する一方で、上総層群が隆起した地形にある古平潟湾を形成する山地は、海進の影響に晒されなかった。最終氷期で海面が低下し、現在の東京湾はほぼ陸地となった。この時、古宮川と古侍従川が合流し古平潟川が形成された。関東平野の延長河川の浸食作用によって下末吉面には砂礫が堆積したが、古平潟川の分水界は非常に狭いものであったため、ほとんど浸食は進まなかった。縄文海進によって再び海面が上昇したが、この海進によっても古平潟湾への堆積物はほとんどなかった。古墳時代に海面が低下し、現在とほぼ変わらない地形ができる。平潟湾は山地丘陵に囲まれ、深海の内湾環境が形成された。以上の地形の変遷から、平潟湾の小規模でありながら深い海を持つ特殊な内湾環境の中に中世以降の人間活動が広がっていくのである。以下より、中世以降の各時代平潟湾の景観と、人間の営みの様子を概観していく。

■中世の平潟湾の景観

中世の金沢は鎌倉へ移送される物資が運ばれてくる東の玄関口であった。船で輸送されてきた物資は平潟湾で陸揚げされ、六浦道の朝比奈切通を抜けて鎌倉へ運ばれた。平潟湾の湾口の瀬ケ崎・室の木・野島には大型船が着岸する船着場があり、房総半島や東北地方などからの物資が運ばれていた。称名寺へ運ぶ物資は、瀬戸付近で小型船に乗り換えて寺前八幡社前の船着き場で着岸し運んでいた。金沢に運び込まれた物資はほとんどが鎌倉を最終目的地としたもので、中世の平潟湾はこうした船がひっきりなしに行き交い、船着場付近には船主や問丸、為替などを生業とした人々が暮らしていた。また、これほどの内湾環境で漁業を生業としている人々がいなかったとは考えにくい。おそらく平潟湾の至る所で漁船がみられ、平潟湾奥部の瀬戸入海では浅瀬を利用して製塩も行われていた。

中世の人々にとって平潟湾は景観を楽しむべき場所というよりは、むしろ港湾都市として必要な機能を備えた最先端の港町であったのではないだろうか。平潟湾の景観に関心を寄せるのは知識人階級が中心で、庶民の中にそういった関心を寄せる人々は少なかったと考えられる。

■近世の平潟湾の景観

知識階級の八景を比定する遊びは、江戸時代初期に “金沢八景”の場所が比定されてから“金沢八景”の景観を見て楽しむ遊覧に移行し、江戸庶民を中心に流行した。この頃の金沢・六浦は鎌倉幕府滅亡の頃より港湾都市としての機能を失い、凡庸な港町であった。大山詣の流行や金龍院・能見堂による出版活動で急速にその名を広め、江戸時代末期には金沢遊覧者はピークに達し、金沢の中心地で船着場のあった瀬戸を中心に旅亭が立ち並び、活気に満ちた観光地であっただろう。平潟湾の景観はこの時期に出版された浮世絵にも描かれている。中世と異なるのは物資の輸送を目的とした船がほとんどみられない点だろうか。平潟湾を航行する船は“金沢八景”を海上から見ることを目的とした遊覧船が多かったと考えられる。近世江戸時代の重要な事は、永島泥亀による新田開発である。干拓工事は長きにわたり行われ、1668（寛文８）年から江戸末期まで続いて、内川入江の半分ほどが埋め立てられた。干拓地は当初米作が行われる予定であったが、米作には向かない土地であったようで、中世から引き続き製塩業も行われた。

■近代以降の平潟湾の景観

近代に入ると、観光地・金沢は大きな変貌を遂げる。明治初期までは江戸時代の遊覧地としての性格も残していたが、大正時代～戦前にかけて海軍による埋め立て工事で野島地先の景観は大きく変わった。平潟湾については、戦前から電鉄会社による埋め立てがはじまり、戦後も横浜市主導の埋め立て事業がすすめられた。平潟湾や泥亀新田の埋め立ては人口増加による住宅供給を目的とした宅地化であった。泥亀新田の辺りには金沢区役所や中央郵便局、地区センターなど行政の施設が建設された。また、称名寺裏山、釜利谷地区などが民間企業よって宅地造成されたのを皮切りに、山地も次々と宅地開発が進められていった。

以上のように各時代の平潟湾をとりまく景観を捉えると、景観の変化は時代が変わるごとに連続的に起きている。中世にみられた港湾都市の様相は近世にはほとんど見られなくなっていたし、近世の遊覧地“金沢八景”は近代以降の海軍による埋め立て、民間企業や行政による宅地開発などでその姿を消した。“金沢八景”が失われたことを人間の活動によるものとして反省と後悔を促す論調がしばしばみられるが、金沢を大枠で捉えると、中世から現代まで政治や文化の中心地に近い場所に位置していたことで時代の影響に晒されやすく、常に変化を求められた地域であったと言える。これらの史実から、“金沢八景”は失われた、と否定的に捉える必要はなく、人間の活動の変化によって平潟湾の用途も変わり景観が変化したに過ぎない。我々が失ってしまったと嘆く“金沢八景”がみられた近世の人々は、もしかしたら「中世の時代に鎌倉の外港として栄えた平潟湾」に対して憧憬の念を抱いていたかもしれない。過去の景観に捉われ現在の景観に目を向けずにいることは、地域の魅力を見出す

時の大きな妨げとなる可能性がある。むしろ重要なのは、埋め立てや宅地造成が成された現在の平潟湾にどのような景観を見出せるか、ということではないだろうか。

4.2 “金沢八景”の未来

2008（平成20）年、横濱金澤シティガイド協会による金沢区制60周年を記念して平成の“金沢八景”を決める「新金沢八景選定事業」が実施された（横浜市金沢区HP）。この事業の目的は、区民の投票によって「新金沢八景」を選定することで郷土愛の醸成を促し、「新金沢八景」を区内外にPRして、観光客の誘致を計り、区の活性化に繋げることである。約12,000人の区民の投票によって選定された “新金沢八景”は以下のとおり。

①春色（しゅんしょく）：西柴の桜トンネル（8,488票）
②潮干（ちょうかん）：海の公園の白砂青松（7,499票）
③展望（てんぼう）：海と緑を辿るシーサイドライン（7,036票）
④一望（いちぼう）：金沢自然公園からの眺望（6,794票）
⑤彩色（さいしょく）：八景島の紫陽花（6,656票）
⑥白帆（しらほ）：横浜ベイサイドマリーナの夕景（6,654票）
⑦古道（こどう）：朝比奈切通し（6,597票）
⑧梅花（ばいか）：能見堂跡 （6,534票）

選定にあたっては、横濱金澤シティガイド協会が新金沢八景に相応しいとみた候補地を挙げ、その中から選考委員によって16の景観が絞り込まれた。2008（平成20）年１月から区民投票がはじまり、区役所や地区センターなどに投票箱を設置するほか、区内の小・中・高・大学校などにも投票を呼びかけた。

新金沢八景では、潮干、展望、一望、彩色、白帆と８つのうち５つの景観は戦後の金沢地先埋立事業に関連している。海の公園や八景島、金沢自然公園、ベイサイドマリーナは区民のレクリエーション施設であり、シーサイドラインは埋め立て地に居住、または働く人々のために建設された交通機関である。“新金沢八景”であるから、埋め立て地に関連する景観が区民にとって八景になり得るものと認識されているのは喜ばしいことだが、“金沢八景”をめぐる景観環境史の視点で評価するならば、平潟湾に関連する景観をもう数か所入れるべきではないかと考える。例えば、「横浜ベイサイドマリーナの夕景」の代わりに室ノ木と野島を繋ぐ夕照橋からみる夕景や、平潟湾に停泊している船舶と夕景など、夕景がみられる場所を平潟湾に置き換えることでそれは可能である。

“金沢八景”は元は瀟湘八景の概念を踏襲したもので、決められた枠組みの中に平潟湾の景観を落とし込んでつくられた。しかし、“新金沢八景”では八景論などに縛られない自

由な発想で八景を選定することができる。このような視点から、今、目の前にある平潟湾の景観を捉えることが、“金沢八景”の未来を決定づけることになるだろう。

4.3　結論

本研究で得られた研究成果は以下とおりである。

平潟湾をとりまく地形は、沈降隆起を伴う地殻変動と氷期-間氷期変動による海水面の変化によって形成され、海進による堆積や、海退による浸食作用の影響を受けずに岩石海岸を維持したまま現在に至る。

中世には鎌倉の外港として栄え、平潟湾は鎌倉へ運搬する物資を載せた輸送船が行き交っていた。

近世の平潟湾は“金沢八景”の地として親しまれ、多くの遊覧客でにぎわっていた。永島泥亀による新田開発で内川入江の半分ほどが埋め立てられた。干拓地は当初米作が行われる予定であったが、米作には向かない土地であったようで、中世から引き続き製塩業も行われた。

近代以降の平潟湾は大正時代～戦前にかけて海軍による埋め立て工事や戦後の宅地開発によって平潟湾のみならず、山地を掘削して宅地造成が進められていった。

各時代の平潟湾の景観を捉えると、景観変化は時代の変化と共に連続的に起きていることがわかった。“金沢八景”は失われたと否定的に捉えず、現在の平潟湾にどのような景観を見出すかが重要である。

新しい“金沢八景”の捉え方として“新金沢八景”が2008（平成20）年、横濱金澤シティガイド協会によって選定された。八景論に縛られない自由な発想で今、目の前にある平潟湾の景観を捉えることが、“金沢八景”の未来を決定づけることになる。

謝辞

本研究を進めるにあたりお世話になった方々に感謝を申し上げます。

指導教員の辻誠一郎先生には工学系出身の私にはない発想や視座で研究活動を導いてくださいました。本研究では金沢八景というテーマを与えてくださり、自分の育った場所を改めて誇りに思うことが出来ました。貴重な機会を与えてくださったこと、深く感謝いたします。

副指導教員の早川裕弐先生には空間情報を用いた分析方法など、新たな視点を与えていただきました。ここに謝辞を表します。

本専攻 OG で関東学院大学の二宮咲子氏には社会学の研究手法などをご教授いただきました。植田弥生氏の優しい言葉にはいつも励まされました。

辻研究室・文系院生室の皆様のおかげで、和やかな雰囲気のなか論文執筆に励むことが出来ました。ここに挙げた皆様に、改めて御礼申し上げます

最後に、いつもあたたかく見守ってくれた両親に心から感謝いたします。

引用文献

・Laser,H(1984):「Zum　Ökologie-, Ökosystem-, und Ökotopbegriff.」『Natur und Landscaft』59-9, p351-357.

・横山秀司（1995）：『景観生態学』古今書院.

・中村麻子（2016）：「武蔵野台地における人の暮らしと景観のうつりかわり―神田川水系中・上流域を中心に―」東京大学大学院新領域創成科学研究科 2015 年度修士論文, 5.

・石弘之（1999）：「いまなぜ環境史なのか」石弘之・樺山紘一・安田喜憲・義江彰夫編『相関社会学６　環境と歴史』, p1-7, 新生社.

・樺山紘一（1999）：「―環境史学を求めて―」石弘之・樺山紘一・安田喜憲・義江彰夫編『相関社会学６　環境と歴史』, p11-26, 新生社.

・卯田宗平（2004）：「いま、なぜ環境史か―魚と人をめぐる比較環境史―」『歴史研究の最前線 *Vol2.2 March 2004* 環境史研究の課題』, 71, 吉川弘文館.

・神奈川県立金沢文庫（1993）:「金沢八景　歴史・景観・美術」神奈川県立金沢文庫.

・神奈川県立金沢文庫（2012）：「金澤八景いま昔～初公開　楠山永雄コレクション～」神奈川県立金沢文庫.

・神奈川県立歴史博物館（2007）：『広重が描いた日本の風景　歌川広重没後 150 年記念』神奈川県立歴史博物館.

・横浜開港資料館・横浜開港資料普及協会編（1987）:「F.ベアト幕末日本写真集」, p42-45, 横浜開港資料普及協会.

・竹内章（1981）:「広域応力場の変遷と堆積盆のテクトニクス」『地質学会誌』, 87, 737-751, 日本地質学会.

・貝塚爽平・鎮西清高編（1995）：『新版日本の自然２　日本の山』, 277, 岩波書店..

・貝塚爽平（2000）：「7-1　山地と関東構造盆地の形成」貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編『日本の地形４　関東・伊豆小笠原』, 304-307, 東京大学出版.

・鈴木毅彦（2000）：「7-3　台地段丘の形成過程」貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編『日本の地形４　関東・伊豆小笠原』, 313-318, 東京大学出版.

・貝塚爽平・成瀬洋・太田陽子（1985a）：『日本の自然４　日本の平野と海岸』, 226, 岩波書店.

・貝塚爽平（1987）：「関東の第四紀地殻変動」『地学雑誌』, 96, 223-240, 日本地質学会.

・鈴木茂（1999）：「神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊」『国立歴史民俗博物館研究報告　第 81 集』, 131-138, 国立歴史民俗博物館.

・辻誠一郎（2002）:「日本列島の環境史」『日本の時代史１　倭国誕生』, 276, 吉川弘文館

・地質調査所(1998)：１:50,000 地質図幅　横須賀, 地質調査所.

・地質調査所(1982)：１:50,000 地質図幅　横浜, 地質調査所.

・川瀬博（1987）：「金沢の自然史」関東学院大学経済研究所『総合地域研究「金沢」―新・金沢八景づくりをめざして―』，p49-64，関東学院大学経済研究所.
・広瀬有紀雄(1989)：「横浜市金沢区所在瀬戸神社境内地内遺跡」『考古学ジャーナル(300)』，29，26-29，ニュー・サイエンス社.
・松島義章(1979)：「南関東における縄文海進に伴う貝類群集の変遷」『第四紀研究 17（４）』，p243-265，日本第四紀学会.
・松島義章（1991）：「横浜南部、金沢八景瀬戸神社旧境内地内遺跡における自然貝層の ^{14}C 年代ｔｐそれに関連する問題」『神奈川県立博物館研究報告（自然科学）』，20，31-49，神奈川県立博物館.
・松島義章（1996）：「貝類群集による完新世の環境変遷―横浜南部金沢八景の平潟湾を例にして―」『関東平野』，４，p11-24，関東平野研究会.
・金沢区制五十周年記念事業実行委員会（2001）：「図説 かなざわの歴史」金沢区制五十周年記念事業実行委員会.
・堀川貴司(2002)：『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本文化の様相』，臨川書店
・神奈川県立歴史博物館(2007)：『広重が描いた日本の風景』神奈川県立歴史博物館
・福島金治（1997）：「第二章 金沢北条氏と称名寺の組織と編成　第一節 武蔵国久良岐郡六浦荘について」『金沢北条氏と称名寺』，p51-65，吉川弘文館.
・石井進（1986）：「中世六浦の歴史」三浦古文化編集委員会『三浦古文化』，40，p1-18，三浦古文化研究会.
・網野義彦（2007）：「海上交通の拠点――金沢氏・称名寺の場合」『網野義彦著作集 第十巻 海民の社会』，p197-221，岩波書店.
・神奈川県立金沢文庫（2009）：「中世の港湾都市 六浦」神奈川県立金沢文庫.
・神奈川県立金沢文庫（2000）：「六浦・金沢～海が育んだ歴史と文化～」神奈川県立金沢文庫.
・国立歴史民俗博物館（ 2005）：「３ 湊の景観　金沢称名寺と宋・元との交流」『東アジア中世街道―海商・港・沈没船―』，82，p156-159，毎日新聞社.
・原淳一郎（2013）：『江戸の旅と出版文化――寺社参詣の新視角』三弥井書店
・内田四方蔵（1987）：『金沢の 100 年』横浜市金沢図書館.
・前田元重（1987）：「江戸時代の旅から見た金沢八景」関東学院大学経済研究所『総合地域研究「金沢」―新・金沢八景づくりをめざして―』，140-148，関東学院大学経済研究所.
・前田元重（1968）；「江戸時代金沢八景の旅籠　旅亭東屋を中心に」『神奈川県博物館協会々報」第 21 号』抜刷，神奈川県博物館協会.
・辻善之助（1942）：『大日本年表』，大日本出版.
・『江戸名所図会』，角川文庫，角川書店，1967 年.
・三浦浄心（1970）：朝倉治彦編『順礼物語』，古典文庫.
・関靖（1984）：『かねさは物語』国書刊行会.

・神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会（1969）：「十方庵遊歴雑記」『相模国紀行文集』，神奈川県図書館協会.
・『新編武蔵風土紀稿』，千秋社，1982 年.
・永島加年雄（2015）：『泥亀永島家の歴史』永島加年雄遺稿集刊行会.
・神奈川県立金沢文庫（1960）：「460 御預所村々産物書上帳」「480　永島段右衛門履歴之概略〔塩浜〕」「478　泥亀新田沿革略〔物産（塩米）〕」「嘉永七年割付上」『金沢文庫古文書 第 16 輯 永島家文書』.
・中川喜雲（1979）：『名所記鎌倉物語』，村田書店.
・河井恒久（2003）:『新編鎌倉志　貞享二刊』，汲古書院.
・鈴木良明（1999）：「浮世絵版画と名所地―金沢八景・鎌倉・江嶋・大山―」『都市・近郊の信仰と遊山・観光』，p45-51，雄山閣出版株式会社.
・横浜市歴史博物館（2000）:「第五章　泥亀新田・入江新田の開発」『近世横浜　海岸部の開発』，p45-60，横浜市歴史博物館・㈶横浜市ふるさと歴史財団.
・「松本ナミ家所蔵文書目録」『横浜市史料所在目録 ２』，1793(寛 5)年～1946(昭和 21)年.
・平田恒吉（1984）：『金沢と六浦荘時代』，金沢と六浦荘時代頒布会.
・金沢区役所（1978）：『金沢歴史年表』，横浜市金沢区役所.
・横浜市港湾局臨海開発部（1992）：『横浜の埋立』，横浜市港湾局臨海開発部.
・横浜市緑政局（1973）：『横浜の花の歴史を語る』，横浜市緑政局.
・横浜開港資料館（2005）：「漁業収益表と三分の漁業」『横浜市金沢区布川家文書』，横浜開港資料館.
・永井晋（2009）：『金沢八景の歴史と変遷』，中国文化第６７号抜刷.
・神奈川県立金沢文庫（2012）：『金澤八景いま昔～初公開 楠木永雄コレクション～』.
・神奈川県花き業界沿革史編纂委員会（1967）：『神奈川県花き業界沿革史』，神奈川県生花商組合連合会.
・神奈川県水産会（1925）:『神奈川県漁村調査書』，神奈川県水産会.
・横浜市総務局市史編集室（1990）：『横浜市農政概要　昭和十四年版』横浜市.
・横浜市農局（ 1934）:『横浜市農政要覧　昭和３４年度版』横浜市農政局.
・横浜市産業部農政課（1940）:『横浜市農政概要　昭和 14 年版』横浜市産業部農政課.
・京浜急行電鉄株式会社（1999）：『京浜急行百年史』京浜急行電鉄.
・若林敬子（2000）:「第６章　３ 横浜―民間埋立てから金沢地先埋立てまでの変遷」「第６章　４ 横浜市の漁業補償と柴漁港の資源管理型漁業」『東京湾の環境問題史』，p180-190，p190-199，有斐閣.
・横浜市埋立事業局（1970）:『根岸湾ハ地区埋立事業概要』横浜市埋立事業局
・横浜市教育委員会（1988）:『史跡称名寺境内庭園苑池保存整備報告書　昭和 53～62 年度』横浜市教育委員会

・横浜市計画局（1966）:『金沢地区開発事業概要パンフレット』
・横浜市福祉文化事業団（1987）:『昨日、今日、そして明日 創立 20 周年記念』
・神奈川県（1959）:『横浜市と横須賀市との境界に関する争論関係資料』
・横浜港振興協会横浜港史刊行委員会（1989）:『横浜港史　各論編』，378，横浜市港湾局企画課
・横浜市漁業問題研究会（1975）:『横浜市の埋立事業と漁業者の転業対策年表――金沢地先埋立て事業を中心として』，
・横浜市経済局（1973）:『金沢流通団地・工業団地のあらまし』
・横浜市経済局商工部（1986）:『金沢工業団地』，　27
・田村明（1981）:「金沢シーサイドタウンのアーバンデザイン構想」『都市住宅 8110』，18.
・横浜市港湾局（1978）:『横浜市海の公園新基本構想について』，7.
・横浜市・横浜新都市交通㈱（1989）:「金沢シーサイドライン」
・国立国会図書館 :「国立国会図書館デジタルコレクション　斎藤月岑編（1912）武江年表，国書刊行会」
< http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/949631/1 >2017 年 1 月 16 日閲覧
・横浜市金沢区 :「記者発表資料　平成 20 年（2008）　新金沢八景決まる」
< http://www.city.yokohama.lg.jp/kanazawa/03houdou/2008/080228.html >2017 年 1 月 10 日閲覧